

# 印西町 小林城跡

—一般県道印西印旛線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

1994

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

いん ざい まち こ ばやし じょう あと  
印西町 小林城跡

—一般県道印西印旛線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—



1994

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

千葉県の北西部に位置し北は利根川を隔てて茨城県に接する印西町は、恵まれた自然環境により、先土器時代から歴史時代におよぶ数多くの遺跡が存在しています。とくに江戸時代には利根川の水運を利用して、江戸や房総半島内部への交通の重要な拠点となったことが知られています。

近年は、東京方面のベッドタウンとして千葉ニュータウンをはじめとした住宅団地の建設が進み、これに対応して、千葉県土木部は都心と当地域と空港を結ぶ道路の整備を目的として一般県道印西印旛線を計画しました。そこで千葉県教育委員会は、道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いを千葉県土木部道路建設課をはじめ、関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりました。その結果、路線変更が困難であるため、道路建設予定地内に所在する小林城跡についてやむを得ず、発掘調査による記録保存の措置を講じることとし、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施してまいりました。

発掘調査は、平成3年6月から平成4年3月までの期間に行われ、その結果、戦国時代の山城の大規模な遺構が検出され、さらに、先土器時代、縄文時代、古墳時代の遺物も多く発見されました。とくに、戦国時代の山城の構造、築城から廃城にいたるまでの過程、当時の生活の様子などを研究するうえでの貴重な遺物などの多くの成果が得られました。

このたび、これらの調査結果をまとめて、報告書として刊行することになりました。本報告書が学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史への理解を深めるために、多くの方々に活用していただければ幸いです。

おわりに、発掘調査から報告書刊行にいたるまで、ご協力いただいた千葉県土木部、印旛土木事務所、ご指導いただいた千葉県教育委員会、印西町教育委員会に厚くお礼を申し上げるとともに、発掘調査および整理作業に従事された調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成6年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 奥山 浩

## 例　　言

1. 本書は千葉県印旛郡印西町小林1474他に所在する小林城跡（遺跡コード327-001）の発掘調査報告書である。
2. 調査は千葉県土木部、印旛土木事務所の一般県道成田印西線地方道道路特殊改良第一種事業および、一般県道成田印西線県単道路改良（一般）事業に先立ち、千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施した。

なお、平成5年度中に成田印西線の一部国道昇格があり、前者の事業名が一般県道印西印旛線地方道道路特殊改良第一種事業に変更された。また、調査範囲は両事業に分かれているが、遺構が両者にまたがるものが多いため、本報告書の刊行については印西印旛線地方道道路特殊改良第一種事業として2事業分をまとめた。

3. 調査期間、担当者は以下の通りである。

平成3年度	(調査部長天野 努、部長補佐佐久間豊、班長上野純司)
一般県道成田印西線地方道道路特殊改良第一種事業	平成3年6月1日から9月30日
	技師井上哲朗
一般県道成田印西線県単道路改良（一般）事業	平成4年10月1日から平成4年3月31日
	技師井上哲朗

4. 整理作業及び報告書の作成作業の期間、担当は以下のとおりである。

平成4年度	(調査部長天野努、部長補佐佐久間豊、班長田坂浩)
一般県道成田印西線県単道路改良（一般）事業	平成4年8月1日から9月30日
	技師井上哲朗
一般県道成田印西線地方道道路特殊改良第一種事業	平成4年10月1日から12月31日
	技師井上哲朗（10・11月）、技師大鷹依子（12月）
平成5年度	(調査研究部長高木博彦、印西調査事務所長田坂浩)
一般県道成田印西線県単道路改良（一般）事業	平成5年4月1日から6月30日
	技師井上哲朗
一般県道印西印旛線地方道道路特殊改良第一種事業	平成5年7月1日から11月30日
	主任技師井上哲朗

5. 繩文土器の分類は大鷹依子、第5章(3)埴輪の執筆は主任技師萩原恭一、他は全て井上哲朗が執筆・編集した。

6. 現地調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から御指導・御協力をいただいた（敬称略）。深く謝意を表します。

印旛土木事務所、印西町教育委員会、伊藤正義、飯村 均、小野正敏、滝川恒昭、遠山成一、外山信司、藤澤良佑

## 本文目次

序 文

例 言

凡 例

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	地理的環境	1
第3章	歴史的環境	3
第4章	小林城の構造（地表面観察）	12
第5章	調査の方法と経過	20
第6章	原始・古代の遺構と遺物	
(1)	先土器時代	25
(2)	縄文時代	26
(3)	古墳時代	32
第7章	中近世の遺構と遺物	
(1)	築城遺構（土壘、空堀、虎口）	43
(2)	I郭上の遺構	57
(3)	土壘B・B'下の遺構	70
(4)	II郭上の遺構	72
(5)	遺 物	75
第8章	結 語	93
報告書抄録		卷末

## 挿図目次

第1図 小林城跡周辺地形図(1) .....	1	第38図 S H 1・S H 2 遺物垂直分布.....	49
第2図 小林城跡周辺の主な遺跡.....	2	第39図 C・D・斜面部トレンチセクション.....	50
第3図 小林城跡周辺地形図(2) .....	4	第40図 斜面部調査風景.....	51
第4図 小林城跡周辺の小字.....	6	第41図 S F 1 .....	52
第5図 小林城跡および周辺概念図.....	8	第42図 S F 2 .....	54
第6図 小林城跡地形商量・概念図.....	13	第43図 S D 2 .....	56
第7図 小林城跡概念図.....	17	第44図 I 郭上遺構(1)-1.....	58
第8図 笠神城跡概念図.....	18	第45図 I 郭上遺構(1)-2.....	59
第9図 中根砦跡概念図.....	19	第46図 I 郭上遺構(2) .....	60
第10図 竹袋城跡概念図.....	19	第47図 I 郭上遺構(3)-1.....	62
第11図 小林城跡調査範囲と周辺.....	21	第48図 I 郭上遺構(3)-2.....	63
第12図 大グリッド・トレンチ配置図.....	22	第49図 I 郭上遺構(4) .....	64
第13図 大グリッドと小グリッド.....	22	第50図 I 郭上遺構(5) .....	65
第14図 遺構配置図(1) .....	23	第51図 I 郭上遺構(6) .....	66
第15図 遺構配置図(2) .....	24	第52図 土壘B下遺構.....	68
第16図 下層確認調査グリッド配置図.....	25	第53図 S K103遺物分布 .....	69
第17図 下層確認グリッド土層 .....	25	第54図 土壘B'下遺構 .....	71
第18図 先土器時代石器.....	26	第55図 II 郭上遺構(1) .....	73
第19図 織文土器(1) .....	27	第56図 II 郭上遺構(2) .....	74
第20図 織文土器(2) .....	28	第57図 II 郭上調査風景.....	75
第21図 土壘B下遺物包含層.....	29	第58図 土師質土器.....	76
第22図 織文時代石器(1) .....	29	第59図 カワラケ .....	77
第23図 織文時代石器(2) .....	30	第60図 中世内耳土鍋.....	78
第24図 織文時代石器(3) .....	31	第61図 中世瓦質土器.....	79
第25図 S X 3 .....	32	第62図 中世陶磁器(1) .....	80
第26図 S I 1 .....	33	第63図 中世陶磁器(2) .....	82
第27図 S I 2 .....	34	第64図 中世石製品(1) .....	85
第28図 S I 3 .....	35	第65図 中世石製品(2) .....	86
第29図 古墳時代遺物(1) .....	36	第66図 中世石製品(3) .....	87
第30図 京都府綾瀬郡田辺町堀切7号墳 出土人物埴輪.....	38	第67図 中世金属製品(1) .....	88
第31図 古墳時代遺物(2) .....	39	第68図 中世金属製品(2) .....	89
第32図 古墳時代遺物(3) .....	40	第69図 中世錢貨 .....	90
第33図 古墳時代遺物(4)(埴輪) .....	42	第70図 近世錢貨 .....	91
第34図 トレンチ調査風景 .....	43	第71図 中世遺物遺構別全体分布 .....	94
第35図 Aトレンチセクション .....	44	第72図 中世遺構変遷図 .....	96
第36図 Bトレンチセクション .....	46		
第37図 S H 1・S H 2 遺物平面分布 .....	48		

## 表 目 次

第1表 錢貨計測表 .....	92
-----------------	----

## 図版目次

- 図版 1 小林城跡周辺航空写真
- 図版 2 (1)小林城跡航空写真  
(2)小林城跡遠景
- 図版 3 (1)調査前(Ⅰ郭側空堀と土塁)  
(2)調査前(Ⅱ郭からⅠ郭方向をのぞむ)  
(3)調査前(土塁B上からⅡ郭をのぞむ)
- 図版 4 (1)Ⅰ郭北側直下から近景  
(2)北東部の切り通し  
(3)Ⅰ郭東側尾根  
(4)Ⅰ郭東側段  
(5)Ⅰ郭南東側腰曲輪  
(6)南東側堅堀  
(7)Ⅱ郭虎口下がらⅣ郭をのぞむ  
(8)Ⅳ郭上(右側はⅡ郭)
- 図版 5 (1)南西側近景  
(2)斜面途中の墓地  
(3)V郭下の段  
(4)IV郭上  
(5)IV・V郭間の堀と土塁  
(6)IV・V郭間の堀と土塁  
(7)III郭南東部  
(8)II郭上からIII郭をのぞむ
- 図版 6 (1)Aトレント(土塁C)  
(2)Aトレント(SH2)  
(3)Aトレント(土塁B')
- 図版 7 (1)Bトレント(土塁D)  
(2)Bトレント(土塁B)  
(3)Bトレント(土塁A)
- 図版 8 (1)Cトレント  
(2)Dトレント(土構)  
(3)南東側斜面部
- 図版 9 (1)SH1(Bトレント)  
(2)SH1(南から)  
(4)SH1内障壁
- 図版10 (1)SH2表土除去状況  
(2)SH2廐域段階  
(3)SH2堀底
- 図版11 (1)SF1(Ⅱ郭上空から)  
(2)SF1(柱穴と礎石)  
(3)SF1(掘方)
- 図版12 (1)SF2礎石  
(2)SF2と道路跡  
(3)SF2掘立柱門跡
- 図版13 (1)I郭上遺構(西から)  
(2)I郭上遺構(南北から)
- 図版14 (1)SK23  
(2)SK23炭化物、焼土等出土状況  
(3)SK24
- (4)SK35, 36, 56他  
(5)SK8焼土、火葬骨出土状況  
(6)SK64板碑出土状況  
(7)SK19, 20他  
(8)SK130
- 図版15 (1)SK103  
(2)SK103遺物出土状況  
(3)SK116他  
(4)SK110他  
(5)SK111他  
(6)SK111土層堆積状況
- 図版16 (1)SH2とⅡ郭上  
(2)下層土層  
(3)SX3  
(4)SK119, 120, 121  
(5)SK119土層堆積状況  
(6)SK120土層堆積状況  
(7)SD2と近世以降の植栽痕  
(8)SD2土層堆積状況
- 図版17 (1)SI1  
(2)SI2  
(3)SI3
- 図版18 (1)縄文土器(田戸式土器群)  
(2)縄文土器(鶴ヶ島台、茅山  
諸磯式土器群)
- 図版19 (1)石器  
(2)古墳時代遺物
- 図版20 墓輪
- 図版21 土師質土器、カワラケ
- 図版22 (1)内耳土鍋  
(2)瓦質土器  
(3)瓦質火鉢
- 図版23 (1)青磁、瀬戸・美濃産皿  
(2)瀬戸・美濃産碗、鉢、瓶子
- 図版24 (1)瀬戸・美濃産皿、天目茶碗、小壺  
(2)瀬戸・美濃、常滑産擺鉢
- 図版25 (1)常滑産大甕  
(2)近世陶磁器(SH1表土出土)
- 図版26 (1)中世石製品(硯、砥石)  
(2)中世石製品(五輪塔、板碑、茶臼)
- 図版27 (1)中世金属製品  
(2)中近世錢貨
- 図版28 (1)漆塗椀(SK23出土)  
(2)スラグ、椀形津、るつぼ  
(3)貝

## 凡　例

1. 本書で使用した地形図、遺構平面図の方位はすべて座標軸である。
2. 小林城跡地形測量図は井上の指示のもとで、京葉測量株式会社に委託して作成したものである。
3. 小林城跡・笠神城跡・中根砦跡・竹袋城跡の概念図は井上が作成した。
4. 小林城跡鳥瞰図は富士総合コンサルタント株式会社により測量図をコンピュータ処理したもので、視点は北東上空高さ50m、水平と高さの比は1:1.5である。
5. 航空写真は京葉測量株式会社による1967年撮影のものを使用した。
6. 遺物の色調は、埴輪以外、1988年版『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修)による。
7. 遺物実測図の番号と写真図版中の遺物の番号は一致する。
8. 遺物実測図の縮尺は基本的には、先土器時代石器・縄文時代石鏃2/3、縄文土器・埴輪1/3、縄文時代石器・中世磁石等・金属製品1/2、土師器・土師質土器・内耳土鍋・瓦質土器・陶磁器1/4、常滑壺・大甕1/8、茶臼・五輪塔・板碑1/6、錢貨1/1とした。
9. 遺構図中の遺物実測図の縮尺は上記のさらに1/2とした。
10. 遺物実測図において、縄文土器断面・石器・土師器・陶磁器のスクリーントーン部分は、それぞれ、織維を含むもの・擦石の使用面・赤彩部分・施釉部分を示す。
11. 遺構の堆積土層については、特に明示しない限り下図の通り、スクリーントーンで示した。
12. 中近世遺物の分布図は、下図の通り、種類別にドットで表現した。

(遺構覆土土層)



(遺　物)

- 土師質土器
- 内耳土鍋
- △ 瓦質土器
- 潤戸美濃産陶器
- 常滑産陶器
- ▲ 級載磁器
- ◆ 石製品
- ◆ 鉄製品
- ◆ スラグ
- ◆ 錢貨、銅製品
- ◆ 漆
- ◆ 貝

## 第1章 調査に至る経緯

平成2年度、千葉県土木部と千葉県教育委員会は一般県道成田印西線の建設にあたり、道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、路線変更が困難であるため、小林城跡の道路建設予定地内3,200m<sup>2</sup>とそれに接する1,400m<sup>2</sup>についても、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講じることとなった。前者は一般県道成田印西線地方道道路特殊改良第一種事業に伴う埋蔵文化財調査、後者は一般県道成田印西線県単道路改良（一般）事業に伴う埋蔵文化財調査として、平成3年6月から平成4年3月まで、（財）千葉県文化財センターが発掘調査を行った。

## 第2章 地理的環境（第1,2図）

小林城跡は、千葉県北西部に位置し、北3.5kmには茨城県との県境をなす利根川が流れ、利根川はたびたび流路を変えながら、かつては埼玉県北東部から江戸川・隅田川経由で東京湾に注いでいたが、17世紀半ばより鬼怒川水系の常陸川に変更され、銚子から太平洋に注ぐようになった。小林城跡が北東端に位置する標高25~30mの広大な北総台地は常陸川およびその支流で南東10kmの印旛沼に流入する将監川と長門川によって浸食され、台地に切れ込む様に広い沖積地が形成され、大小の谷が樹枝状に入り込む。なお、沖積地（水田面）との比高は20~25mである。





第2図 小林城跡周辺の主な遺跡（国土地理院1/50,000地形図使用）

同上

卷之三

8

1999

100

1099

### 第3章 歴史的環境（第2,3,4,5回）

小林城跡に直接関係する発掘調査には、昭和49年（1974）に当城跡の北西に続く台地上の牧の里団地造成に伴う小林古墳群と、昭和59年（1984）に城跡北西部（主にII・IV郭の一部）が削られる宅地造成に伴う過去2回の緊急調査がある。本章ではまず当地域の時代変遷を概説した後にその調査概要について触ることにする。

#### （古代以前）

先土器時代から縄文時代前期の遺跡は、小林城跡の位置する台地の続きで西方に大きく造成が進む千葉ニュータウン地域で多く分布しているが、逆に縄文時代中期から弥生時代の遺跡の密度は粗であり、この広大な北総台地上が狩猟場的地域であったことを物語る。しかし、古墳時代前期の集落は沖積地を見おろす台地の縁部に分布し、古墳時代後期の古墳群も6世紀代の小林古墳群をはじめ、道作古墳群・笠神古墳群など同様な立地である。

奈良・平安時代の集落も台地の縁部にみられ、山田寺系瓦が出土している7世紀の木下別所廃寺が存在する。『和名類聚抄』では「印旛郡言美郷」に推定される地域である。なお、古代以降重要な点は国境である。当地域における現在の千葉県と茨城県の境は利根川であるが、かつての下総国と常陸国との国境は銚子から小林城跡の北方あたりまでは現在の利根川を境として変わらないが、そこから茨城県北相馬郡利根町地域を含み、東は鬼怒川・小貝川辺りに線が引かれて、北は栃木県小山市近くまで延びて古河市を含んで、西側は現江戸川・墨田川を下って東京都葛飾区をも含んでいた。つまり、当地域は下総国が常陸国に南に大きく食い込まれる地域であったといえる。

#### （中世以降）

北総地域では、平安時代末期、他地域同様に律令体制の土地制度が崩壊し、私有地である荘園が営まれた。こうした過程の中で集落が移動して、多くの中世的村郷が形成されたと考えられる。かつての印旛郡は印旛沼を境に、北西部の三宅・船穂・吉高が印西条に、東南部の印旛・八代・日理・鳴矢・長脇・余戸が印東条に、北部の言美郷が埴生西条に再編成された。印西・印東条は初期には国衙領であったが、のちに荘園化して印西庄・印東庄と呼ばれた。また、印東条の南部も臼井庄・白井庄となった。埴生西条は、その中に小林・大森・平岡・笠神・中根・富谷の諸郷が存在したが<sup>(1)</sup>、これらは現在の大字の名称に継続されている。

埴生西は、12世紀には印西条とともに香取社遷宮の用材を負担する国衙領であった。<sup>(2)</sup>また、一部は、13世紀前半に藤原友重らによって奈良薬師寺に寄進されている。「藤原友重外寺領寄進状」では「下総国埴生西薬師寺領事、都合六町六供、限南中根郷中坊、限東杉校溝流小林郷、限西□□本松、限北平岡郷下成沢溝流通西谷」と、薬師寺領の領域が示されている。なお、13世紀後半には埴生西の北条実時の所領は金沢称名寺へ寄進される。<sup>(3)</sup>



第3図 小林城跡周辺地形図(2)  
〔昭和14~17年奈良本部測量課測量局測量1/20,000迅速測量図他用〕



西に接する印西条については、鎌倉期、西方3kmの大森郷に北条氏一族に推定される大森氏が存在し、そこの長榮寺と金沢称名寺とは密接な関係があった。また、印西条も金沢氏によつて相伝され、14世紀中葉には足利尊氏が家臣に充行った所領中に「下總國印西庄」がある。その後、同庄地頭職は尊氏から佐々木道善に与えられたが、千葉介氏胤らの押領にあつ。南北朝期以降再び「印西条」と呼ばれ、15世紀初頭には鎌倉公方持氏が「印西条内外」を鎌倉円覚寺に安堵している。<sup>(5)</sup> 円覚寺寺領目録によると、印西条は内・外に分かれ、それぞれ8ヶ郷であった。<sup>(6)</sup> 15世紀半ばには、千葉胤将（下總國守護か）が円覚寺領の「印西条両郷」に対する違乱を禁じ<sup>(7)</sup> ていることから、その頃までは同寺領であったこと千葉氏の進出が判明する。

なお、千葉氏は天文23年（1554）の千葉妙見社の遷宮に際して、その用材を「いんざい十六郷の山」から徵収している。その後、年月未詳（永禄年間か）千葉胤富（本佐倉在城）書状によると、北条氏政が小田原を発って「金」（小金 松戸市か）に到着するに呼応して、森山衆（原氏）が森山（小見川町）を発って菱田（芝山町）に泊まり翌日「印西」へ行くよう要請されており、そのルートからもこの「印西」の拠点が小林城である可能性が考えられる。その後、天正10年（1582）には千葉介邦胤（本佐倉在城）が「印西外郷」を「守護不入」の地とする判物を原豊前守（胤長）に発給している。<sup>(8)</sup> 原胤長は本佐倉城にあって千葉胤富・邦胤の直臣であったが、印西地域の支配を千葉氏から獲得していったことが推測される。<sup>(9)</sup> 胤長は天正13年（1585）の邦胤没後は後北条氏の影響を強く受けた。この頃は「印西庄内外十六郷」と呼ばれ、小林郷もその中の一つであった可能性が高い。一方、当時は下總國であった布川の豊島氏は当時、鬼怒川水系の通過権を有していたとみられる在地領主であり、戦国末期には後北条氏の配下に組み込まれる。<sup>(10)</sup> なお、利根町の頼繼寺（現 来見寺）に対する豊嶋頼繼の寄進状には「印西之内」として「作屋之郷十五貫五百文」、「大森之内二貫八百文」があげられ、小林の鳥見神社の棟札（永禄11年）には大壇那として千葉胤富、原胤晴（清）、壇那として豊嶋新六郎の名があることから、当地域は原氏と豊嶋氏の領地の交錯する地域であったことが推定される。

さて、房総の戦国期は15世紀半ば、鎌倉府の公方足利持氏と幕府・関東管領上杉憲実の争い（永享の乱・結城合戦など）に始まったといつてよい。房総の国人領主層も両派に分かれて争い、康正元年（1455）には公方方の原胤房・馬加康胤が上杉方の千葉宗家を千葉城に滅ぼし、以降、馬加系が千葉宗家となる。この時期に争乱の関東から房総に入ったと考えられる一族に里見・武田・土岐氏などがおり、徐々に安房・上総の在地領主層を取り込み勢力を拡大していく。一方、千葉一族は鎌倉期以来、諸家が下總各地に散らばってそれぞれで名字の地を有し、千葉宗家は本佐倉城を本拠とした。しかし、16世紀には南から里見・武田氏、北の常陸国から結城・佐竹氏らの圧力を受け、当時関東に勢力を拡大していた小田原北条氏と関係を深めた。天文7年（1538）の第一次国府台合戦（後北条対里見）後、下總國の大半が後北条氏の影響下となり、千葉氏は後北条氏の家臣となる。なお、当時千葉氏一族中で原氏が小弓城（千葉市）



と臼井城（佐倉市）を本拠に最も勢力をもつた。永禄4年（1561）には上杉謙信が関東に入部し、房総も戦国大名間の争いに巻き込まれることになる。この時は上杉氏に呼応して里見・正木氏が北上し、生実・本佐倉・臼井城などが攻撃される。一方、後北条氏は永禄7年（1564）の第二次国府台合戦で勝利し、上総国へも勢力を伸ばした。しかし、天正18年（1590）には豊臣秀吉軍による小田原城・関東諸城落城と以降の徳川家支配により、房総も多くの城がその機能を閉じた。

戦国期の小林城および周辺地域の様相を具体的に示す一次史料は存在しないが、笠神城跡内の南陽院に天文14年（1545）没の原豊前守の位牌が存在する。なお、参考として江戸時代に執筆された合戦記の内容を記す。

『東国戦記』<sup>(19)</sup> 天正3年（1575）小林城主原肥前守とその子息である笠神城主原豊前守が、先年布川（茨城県利根町）の豊島紀伊守に笠神城を攻められた仕返しに原美濃守・神保・田口・高倉・中根・岩井・阿蘇・吉岡・萩原等（小林城跡周辺の現小字に概当）二千騎で布川城を攻撃した。しかし、逆に江戸崎（茨城県江戸崎町）の土岐氏や小金（松戸市）の高城氏に逆襲され、笠神城まで退却したが、攻められ、さらに龍腹寺へ逃げたところ、僧兵がよく応戦したが、結局焼かれ、草深（印西町）の要害でくい止めた。しかし、原肥前守は討ち死した。

『龍腹寺縁起』<sup>(20)</sup> 千葉家を勧めて共に後北条氏を討とうと謀っていたが、永正4年(1507)、門中の者が北条家に内通して焼き討ちにあった。

『常總軍記』<sup>(21)</sup> (印西合戦) 天正13年(1585) 2月牛久(茨城県牛久市)の岡見氏の家臣栗林氏と布川の豊島氏の家臣荒川・根本氏・矢田部の遠藤氏六百余兵が「小田原笠の馬しるしして」(後北条方といふことか)竹袋・平岡・小林・笠神・松虫の順に攻撃した(「小林十郎左衛門が籠りし砦を攻めうごかす」)。これに対して印西勢は五百余騎で応戦して退けた。岡見勢は「千葉方の小砦五十八十貫ぬとも全の勝利にあらず。佐倉城を責落し香取郡、千葉郡を平げずんば大利とはなすべからず。(中略)誠の勝利は佐倉、香取、千葉にあり、無用也とて勢をまとい松虫の台に陣して大方里を焼き(後略)。」

これらの軍記物類が正確な史実を伝えているとはいがたいが、当時の千葉氏の拠点に侵入されやすい国境地域であり、戦国時代後期に当地域が千葉氏系の領域であったことが窺える。

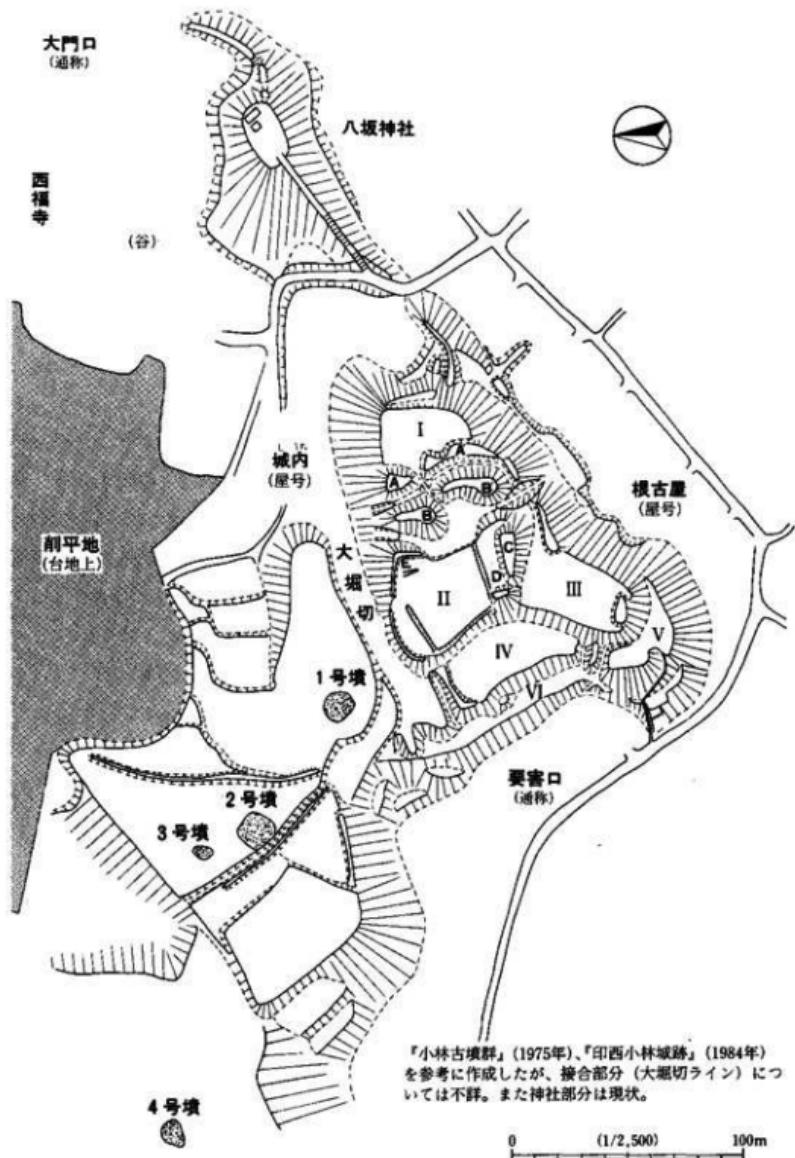
#### (近世以降)

近世は、小林村として、当初は旗本永井氏・三宅氏・佐橋氏の相給、寛文3年(1663)から幕府領、元禄14年(1701)から佐倉藩領、享保8年(1723)から淀藩領。村高は992石余(『元禄郷帳』・『天保郷帳』・『旧高旧領』)だったが、延宝元年(1673)の新田検地により同年250石余増。明和9年(1772)明細帳によれば、家数155、人数655、馬43。水戸道我孫子宿の大助郷<sup>(22)</sup>村であった。また、近くの竹袋村は利根川の木下河岸として、銚子方面の鮮魚が陸揚げされて、馬で江戸に運ばれ中継地として、さらに、香取・鹿島神宮への遊覧船基地としても栄えた。中世以前にも水運が多く使われたと考えられる。広大な台地上は印西牧として使用されたが、近年千葉ニュータウン造成までほとんど原野の様相を呈していた。

#### (周辺の中世的景観)

小字では小林城跡本体の山部分が「城山」、北側の道沿いに展開する集落が「宿」、また、現在は使われていないようであるが、城跡の南西側下が「要害口」、北東部に入り込む谷の入り口が「大門口」、さらにその西側の細い尾根を挟んだ西側の谷が「出兵谷津」とよばれていた。また、屋号では、三郭南東下の民家が「根古屋」、一郭北側下の民家が「城内」という。しかし、「宿」は江戸時代以降、「大門口」は谷中の西福寺関係の可能性がある。

周辺の寺社については、先述の鳥見神社が往古十八ヶ村の御社にて千葉城主北方入冠鬼門除けの社と伝えられ、小林城跡の北東に伸びる尾根上にある愛宕神社が明治42年鳥見神社に合祀されている。また、西福寺は天台宗延暦寺派で瀧水寺の末寺、14世紀頃創建と推定されている。<sup>(23)</sup>また、天保年間(19世紀前半)の地誌である『小林村鏡』に「小林字辺田方虚空堂の上に古城址有之候」とある。これは、明治時代初期の地図(第3図)中の城跡南端部に記されている「虚空堂」であろう。現在は墓地になっているが、地元の方のお話では数十年前までお堂があつたということである。



第5図 小林城跡及び周辺概念図 (1974年2月段階)

なお、同図には将監川の周辺の沖積地に「～新田」という小字が多くみられる。17世紀後半の新利根川開削に伴う新田開発の際にいた地名と考えられることから、中世以前には印旛沼へ続く広い沖積地は湿地が広がっており、中世以前の生産基盤は主に谷部の水田としていたのであろう。

中世の景観を文化財から考えてみると、他の北総台地同様集落跡の調査例はないが、台地上で発掘調査された例では小支谷をのぞむ谷斜面につくられた角田台遺跡の台地成形区画(土坑・地下式坑群)<sup>(24)</sup>がある。また、宗教関係で現存する有形文化財は多く、印西町内では松崎多門院の正応2年(1289)在銘「毘沙門天像」・木下三宝院の永仁5年(1297)在銘「十一面観音立像」・結縁寺の嘉元元年(1303)在銘「銅造不動明王像」・大森長楽寺の応安2年(1369)在銘梵鐘・永錄6年(1563)の創建と推定される小倉宝珠院の「光堂」(観音堂)などがあり、板碑も永仁3年(1295)から文明12年(1480)の紀年銘のある40基をふくめて、合計134基が確認されている<sup>(25)</sup>。今回の発掘調査で小林城跡からも板碑が出土したが、周辺から暦応年間(1338~42)の紀念銘を持つ武藏型板碑が発見されている。なお、「応長元年(1331) 上ノト」と刻まれた自然石がかつて鶴塚古墳と小林城跡南側民家宅地内計2個もが確認されているが、意味不明である。先述したように印西庄他の荘園の存在も含め、当地域に中世村落が存在したことは明らかであるが、発掘調査で集落が検出されていないのは、恐らく台地斜面の下や将監川の氾濫によって形成された自然堤防上に展開する、少なくとも江戸時代から続く集落が古代末以来の集落の立地であると考えられる。

また、近辺の台地上では竹袋城跡・笠神城跡・中根砦跡・城の内城跡などがある。詳細は第3章で述べるが、構造的に16世紀後半にまで下ると考えられる小林城・笠神城については、前者は台地先端部に、後者は独立台地に占地しており、いずれも「根古屋」という城下集落を想定できる地名・集落が伴っている。一方、中根砦跡は台地先端部ではあるが、谷の奥に占地し、「根古屋」地名もない。同様に小林城跡南から西に延びる谷途中の台地端(小林城跡から西約200m)に「城山」の子字が残っている(第4図)が、調査もなく破壊されたらしい。以上から、中世でも当初は谷内の水田・それに伴う集落を本拠とした在地領主が、沖積平地の開発に伴い、或いは、戦略上の必要性からか、戦国期後半に沖積地を見おろす位置に城を移動、或いは千葉氏系の国人領主層が新たに築城した可能性が考えられる。

#### (小林古墳群調査概要)<sup>(26)</sup> (第5図参照)

1号墳 円墳 周溝内径17m、比高2.3m、内部施設は竪穴土壙、出土遺物は主体部内直刀・鉄鎌、墳丘上円筒埴輪・形象埴輪(人物・馬・猪・牛・鶏)・碧玉製管玉・ガラス製小玉・滑石製裏玉・硬玉製垂飾。6世紀中葉に推定。墳丘下から古墳時代初頭竪穴住居跡2軒検出。

2号墳 方墳 一边12~13m、比高2.75m 周溝なし、内部施設は竪穴土壙、出土遺物は盛土

内から土師器高杯、擾乱内から鉄鎌・ガラス小玉。主体部床面に雲母片岩散乱。6世紀前半に推定。墳丘下から古墳時代初頭竪穴住居跡3軒検出。

3号墳 破壊著しく墳丘形態不明 内部施設も破壊、7.6×10.9m、比高0.6m、出土遺物は土盛土内土師器片。墳丘下から古墳時代初頭竪穴住居跡1軒検出。

4号墳 破壊著しいが円墳 墳丘径8.6m 比高1.5m、内部施設は竪穴土壙、出土遺物は主体部内から刀子・鉄鎌。6世紀後半に推定。

なお、古墳部分以外の造成地部分の発掘調査は行われていないが、小林城に関連すると推定された「土壙・溝・郭・腰曲輪」などは概念図化されている。高さ0.6m～1.5mの3条の「土壙」が存在したが、城の全体構造の中での役割が不明であり、恐らく、当地域の台地上に多い近世の馬上手の可能性が高いと考えられる（第4章 城の構造 あらためて後述）。

#### （小林城跡調査概要）<sup>(27)</sup>（第5図参照）

小林城跡全体のコンタ測量と、消失するII・IV郭の北西部・外郭部（II郭北側の空堀を隔てた台地上か）に計2×93mのトレンチ調査が行われた。

（II郭） 郭上で弥生時代後期（古墳時代初頭であろう）竪穴住居跡3軒、V字状溝1条

（II郭斜面からIV郭） IV郭のII郭側直下において人为的に埋没した空堀（幅1.8m）と土壙基底部が検出された。土壙頂部と堀底との推定比高2mである。

（IV郭と北西部の土壙・空堀） IV郭上は1m程の白色粘土と褐色砂から成る版築状互層が載り、北西端の土壙にはさらに黄茶褐色粘土を主体とする版築状互層が1.2m程積まれていた。築城時のIV郭との推定比高は2.5～3mのことである。またさらに外側には調査前時で1m程の溝がその土壙上から4mの深さの空堀が人为的な埋没を受けていた。

以上について、報告書ではIV郭の構築を次の様に2期に分けている。

（前期） II郭直下に空堀と土壙を構築した段階。

（後期） II郭直下の土壙を削平し、空堀を埋め、その上に版築状互層を積んで郭内に平坦面を形成し、さらに外郭との境に土壙・空堀を構築した段階。

出土遺物は繩文土器（田戸下層式などの条痕文系・諸磯b式・興津式・加曾利E式・加曾利B式）、弥生後期土器、古墳時代初頭土師器、埴輪、瓦質土器、瀬戸美濃産擂鉢・土師質土器、北宋銭である。小林城跡周辺出土の板碑もあわせて、報告書では「小林城は南北朝期の初期に造営され、16世紀に至って大規模な改修・拡張工事が実施された」と推定している。しかし、板碑の紀年銘と城の機能した時期を直接結びつけることは危険であろう。

この結果や推定と今回のI・II郭を中心とした調査結果と総合すると、小林城全体の築城・改造・廃城の過程の概要がほぼ明らかとなるが、第7,8章でまとめたい。

以上、小林城跡の歴史的環境について、考古学・文献史学・歴史地理学などの諸分野から、今回の調査前段階の研究史を概説してみた。

## 注

- (1)『千葉県地名変遷総覧』千葉県立中央博物館内千葉県郷土資料刊行会 1972年
- (2)旧大藏宣家文書「香取文書」「千葉県史料 中世編 香取文書」所収
- (3)房総古文書叢書「改訂房総叢書」第1編 所収
- (4)金沢文庫文書「年月未詳称名寺用配分置文断簡」「千葉県史料 中世編 県外文書」所収
- (5)金沢文庫文書「金沢瀬戸櫛造宮棟別銘往文案」「千葉県史料 中世編 県外文書」所収
- (6)清源寺文書「栃木県史 史料編 中世1」所収
- (7)佐々木文書「神奈川県史 史料編3」所収
- (8)円覚寺文書「応永26年鎌倉御所持氏御教書」「千葉県史料 中世編 県外文書」所収
- (9)円覚寺文書「神奈川県史 史料編3」所収
- (10)円覚寺文書「文安4年千葉胤将書状」「千葉県史料 中世編 県外文書」所収
- (11)「千学集抄」「改訂房総叢書」第2編 所収
- (12)原文書「千葉県史料 中世編 諸家文書補遺」所収 解釈などについては達山成一氏の御教示。
- (13)根津文書「千葉県史料 中世編 県外文書」所収
- (14)外山信司「戦国末期の下総原氏」「千葉史学」17号 1990年
- (15)「天正5年原豊前守往進状」「妙見実録千葉記」「改訂房総叢書」第2編 所収
- (16)佐藤博信「福田家文書の再検討」「中世東国の大支配構造」忠文閣出版 1989年
- (17)佐藤純夫「中世史解明の方策」「印西町の歴史」創刊号 1985年 によるが、滝川恒昭氏によると、同文書は再検討の必要があるとのことである。
- (18)注(17)と同様。
- (19)小管与四郎「東国戦記実録」全 東京印刷 明治41年
- (20)五十嵐行男「龍腹寺焼亡 (続) 戦国時代・印西の合戦」「印西新報」第51号 1992年
- (21)『千葉県印旛郡誌』後編 1913年
- (22)『千葉県地名大辞典』角川書店 1984年
- (23)印西町教育委員会町史編纂室からの資料提供による。
- (24)発掘調査報告書は未刊。
- (25)『印西町の板碑』印西町教育委員会 1979年
- (26)『小林古墳群遺跡』小林古墳群発掘調査団 1975年
- (27)『印西小林城』印西町小林城跡調査会 1984年

## 参考文献

- 『小林古墳群遺跡』(注(26)と同じ)
- 『印西小林城』(注(27)と同じ)
- 『日本城郭体系 第4巻 茨城 栃木 群馬』新人物往来社 1980年
- 『日本城郭体系 第6巻 千葉 神奈川』新人物往来社 1980年

## 第4章 城の構造（地表面観察）（第5～10図）

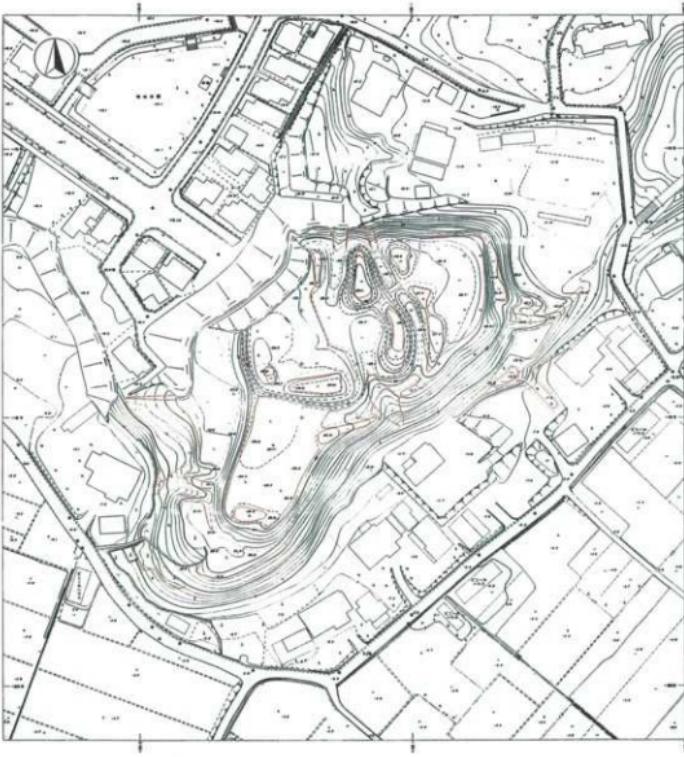
本章では、今回の発掘調査開始前の地表面観察による縄張構造について述べていくが、過去に消失した部分はその際の発掘調査結果を参考にすることとする。それは、埋もれている城の縄張構造上の特徴や問題点を抽出し、それによって発掘調査から解明され得る課題として認識する上で、また、調査が行われなかつた部分も含めた城の全体構造の把握の上で必要である。しかし、いうまでもなく、地表面は城の最終的な姿であつて、機能していた姿ではない。改造や廃城を経た後、後世の耕作・開発等によって改変され、さらに表土が堆積した段階である。なお、説明の便宜上、曲輪や腰曲輪にローマ数字を振り、主要曲輪は「郭」という表記を使用した。

**概要** 過去の2度の開発によって城の西側が消失してはいるが、城の主体部は基本的には台地先端部を大規模な堀で切った先の部分（北東—南西方向に約200m、北西—南東方向に約130m）であろう。基本的郭配置は台地最上部の主要な二つの郭（I・II郭）と南方緩斜面に造成されたIII郭と周囲の腰曲輪から構成される。

**西側台地** 大堀切以西の土壙については、小林古墳群2・3号墳の東側のものは比高約1.5m、西側のものは比高2m、南側のものは比高約0.6mであった。平場・段については、2・3号墳の西側にある約40×50mの平場が標高29.3mと最も高く、その東側の平場が約0.7m下、2・3号墳のある平場が約0.6m下、1号墳のある平場がさらに1m下で標高27mであった。また、その東・南の谷斜面と最上の平場の西側斜面に段が存在した。しかし、これらを城の縄張構造上、最上部の平場をこの地区の主要郭と仮定した時に、土壙配置に防御上の意味がなく、平場の比高も少ないので、多くの部分は城の遺構とは考えられない。ただ、大堀切の南東端は台地下まで切っていないので、その部分の防御、そして斜面の段群は小林城の外郭部の虎口遺構として判断してもよいと考えられる。また、東の谷斜面の段については、畠として造成された可能性が高いと考えられる。

**北東台地先端部** 城の主体部から切り通しの道を挟んで北東に延びる、現在山上に八坂神社と愛宕神社がまつられる標高約32mの台地である。その北部斜面は削平されて谷中の集落が展開している。神社境内は勿論平場が造成されており、周囲の斜面は非常に急である。また、北東に伸びる細尾根は一部切れているものの、切り通しの道の残存であろう。城の主体部とは地形的に低い細尾根が中間に存在するだけで、ほぼ切り離される状況であり、地表面観察の限り、城としての遺構は捉えられない。しかし、北・東・南方向が見渡せる櫓台的機能を有していたことは考えられる。また、神社創建がいつ頃まで遡るかは明らかではないが、中世において集落の神社として存在した可能性も考えられる。

**I郭** 主体部の東端に位置する東西約40×南北約30mの平場であり、標高は26.5～27mである。



第6図 小林城跡地形測量・概念図

西側（II郭側）には空堀（SH1）と低土壘（土壘A、A'）が走り、やや北寄りの土壘の切れ目の延長で空堀に土橋が掛かる。土壘AはI郭との比高約1.5mだが、土壘A'は0.5m程と低い。なお、土壘A'は空堀（SH1）と共に下りながら南端で西方に折れる。

I郭周辺 周辺の斜面は急激な傾斜をなすが、北側は途中から削られている。東側はI郭から6m程下に幅2m程・長さ約20mの狭い平場が存在する。また、その南端部の東下方斜面途中に狭い段が存在し、I郭南東隅の下方斜面途中から東側に降りる細尾根との間が堅堀状に造られている。また、さらにもう一段の平場が存在して北側の民家（屋号「城内」）の庭に降りる。この部分は北西側からI郭へ登る虎口の可能性が考えられる。南側斜面はI郭上から約15m下、民家の敷地レベルからの比高約6mで現状幅1~5mの平場が存在する。今回の道路建設に伴い、予定地内の民家が南西の隣接地に盛土されて移築されたために埋もれているが、1984年の小林城跡調査時の概念図によるとこの平場がII郭下まで続いている。縁に低い土壘状の高まりがあり、南東へ民家の敷地を区切る土壘状の掘り残し部分が存在するが、I郭東側の尾根ルート、或いはI・II郭間の堅堀へ続くルートの南東側の虎口の一つと考えられる。

II郭 既に1984年の宅地造成のために郭上では北端から約20mが削られているが、削平前で北西-南東方向約60m・南西-北東方向約40mの規模で、標高28~28.5mと平場の中では最高所、大堀切の底との比高は4~5mである。郭内はやや東側（I郭側）に緩やかに傾斜している。また、浅い溝が数状ある。1984年時に作成された測量図・概念図によると、II郭との比高0.6m程の土壘EがII郭隅で西に折れてさらに20m程続いており、5m程切れてやや北側に膨らんだII郭の北縁を北西隅まで25m程残っていた。また、南縁に郭上からの比高約1mの土壘Cが20m程続き、南西隅近くで郭上からの比高約1mの土壘Dとの間に空間をもつ。なお、微地形ながらII郭西側に若干の高まりがあることから、土壘DはII郭西側縁をはしっていたと考えられる。地元の方のお話では、II郭上は數十年前まで桑などの畠であったということであり、溝は根切り溝で、畠の造成で土壘Dの続きも破壊されたものと考えられる。

I・II郭間の土壘・空堀 (SH1) I郭上からの深さ0.5m~1m、土壘A・A'上からの深さ1.5~2m。北側斜面にも延長のくぼみがあることから堅堀が造られていると考えられる。

(土壘B・B') I郭側の土橋に続く延長で土壘の切れ目がある。北側（土壘B）の頂部は標高30.4mで、城内最高所である。南側ではII郭側（西側）に膨らむ。南側（土壘B'）の標高は27~29.5mで、やや南東に若干延び、途中から南に折れて、南端部では土壘B同様西側に膨らむ。なお、この部分は明瞭な上場が見られない。屈曲させた土壘B・B'によってII郭側に枠形状の空間を造り出した構造となっている。

(SH2) II郭のI郭側（東側）の土壘B・B'に沿ってII郭上から緩やかな落ち込みが見られた。II郭の北西隅にある土壘E頂部との比高が2.7mあり、土壘Bの間で空堀状を呈しており、その延長の北側斜面に堅堀状の落ち込みが見られること、同様に延長の南側斜面も堅堀状を呈

することから、II郭と土壘B・B'の間のくぼみ部分には大規模な空堀（SH2）の埋没が予想でき、果たして発掘調査で検出された。II郭上が最高所で、土壘C・D・Eが縁部に存在すること、土壘B・B'が土壘A・A'より大規模であり、その間に空堀SH1があることなどは、II郭が主郭であることを示唆するものであった。SH1より大規模なSH2の検出はI郭の優位性を示すものであり、繩張り構造上矛盾が感じられ、調査前時点で具体的な過程は不明ながら、改造或いは破城行為が行われたことが推測された。

**III郭** II郭の南西側下位に位置する北東一南西方向約50m・北西一南東方向約25mの長方形に近い形の曲輪である。曲輪面はII郭上から下に2m程で標高26~26.8mである。土壘C南東端の下からIII郭南東縁に沿って比高0.5m程の低土壘が25m程続き、II郭斜面とその土壘に挟まれた部分がI郭西側のSH1の連続と考えられ、実際の発掘調査でもSH2との関連も含めて確認できた。また、南西端部に比高0.5m程の低土壘が15m程の長さで存在し、その下の平場から登る細い道がある。現状はけもの道状でしばらく人の往来の痕跡はないが、III郭上の土壘と併せてその下の平場方面とつなぐ虎口関連遺構と考えられる。

**腰曲輪IV** II郭とIII郭の西側下に位置する幅10~15m・現状の長さ約50m・標高22~23mの平場である。II郭との比高は約5.5m、III郭との比高は約5mである。1984年の宅地造成によって北端部が20m程消失したが、大堀切側に曲輪面からの比高約1mの土壘と深さ約1mの空堀が存在していた。その際のトレンチ調査によって、IV郭上は厚さ1~1.6mの版築状互層が積まれ、土壘は基底部幅5.6mから高さ2.5~3mと推定され、空堀は2mの人为的埋土が判明した。また、II郭直下に幅約1.8m・深さ1.5m以上の空堀が人为的に埋められ、その外側に幅1.5mの土壘基底部が検出された。

**腰曲輪V** III郭の南西端を囲む様に下に5m程のレベルに造られた標高21m程の半月状の平場であり、原地形はII郭辺りを頂部として南東に下る尾根筋であったことが推測される。西側部分には近代以降の墓地があるが、その北側のIII郭直下には浅く掘り込まれて下のVI郭、さらにはその下まで続いていると推定される道がある。これはIV郭との境に造られた2本の小規模な豎堀の一つで、その間には尾根状の障害がある。

**腰曲輪VI** IV郭の西側下に3m程のレベル（標高16m程）で幅5m程の平場が存在する。1984年に北端部が消滅する以前は大堀切の下にまで続いている様であるが、それ以西の造成により詳細は不明である。

**腰曲輪VII周辺** V郭の南西斜面には幅4m程で帯状の小規模な平場が存在し、南側下の墓地（かつて虚空蔵堂が存在）の関係であろうか、近代以降の墓地が造られている。なお、下からこの平場とV郭の墓地へ登る小道が存在するが、比高から考えられる各郭の優位性がII郭を頂点に南西に下る点から、若干の改変はあってもこの平場とルートは共に城の機能した時期にも存在したと考えられる。



第7図 小林城跡概念図（調査前）

**虎口・大手筋について** 城の主要曲輪である I・II郭への道筋としては、次のように大きく4つのルートが考えられる。

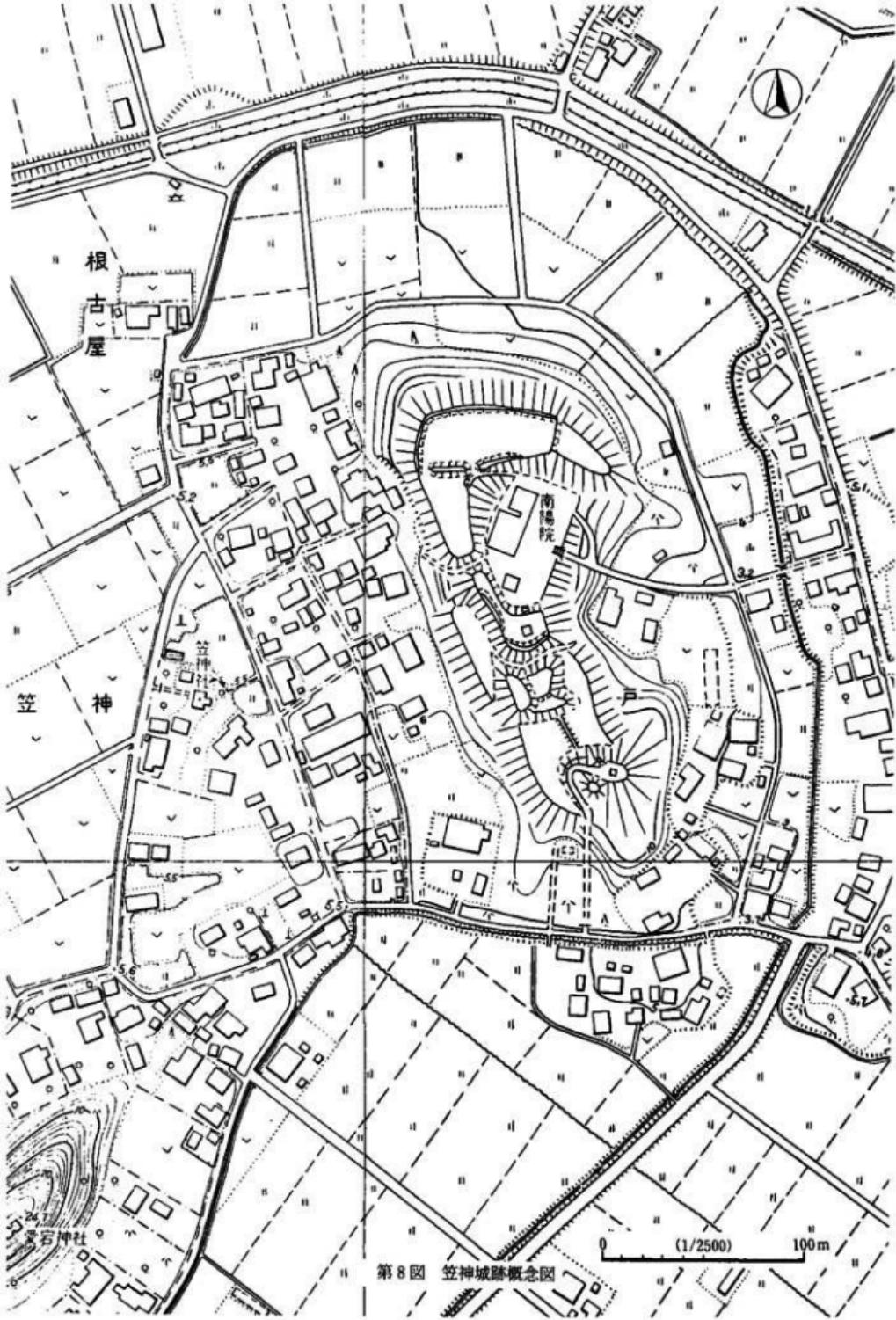
- ① I郭北東下からと I郭南東下から登る尾根筋からの直登ルート。
- ② II郭の南東斜面の堅堀を使用する直登ルート。
- ③ V郭西下から段を経て、またはかつて存在した大掘切から消滅した土壘・空堀（虎口）→腰曲輪VIから障害である土壘の外側をまわって腰曲輪V→III郭南端部（虎口）→II郭の土壘C・D間（虎口）→土壘A・B間（虎口）→I郭。

以上のうち、③は西側に展開する腰曲輪を通るものである。IV郭は経ないもの特に大掘切から入るルートは西側斜面の腰曲輪を有効に通過し、4か所の虎口を通過するものであることから、これが小林城の主要ルート（大手筋）と考えられる。

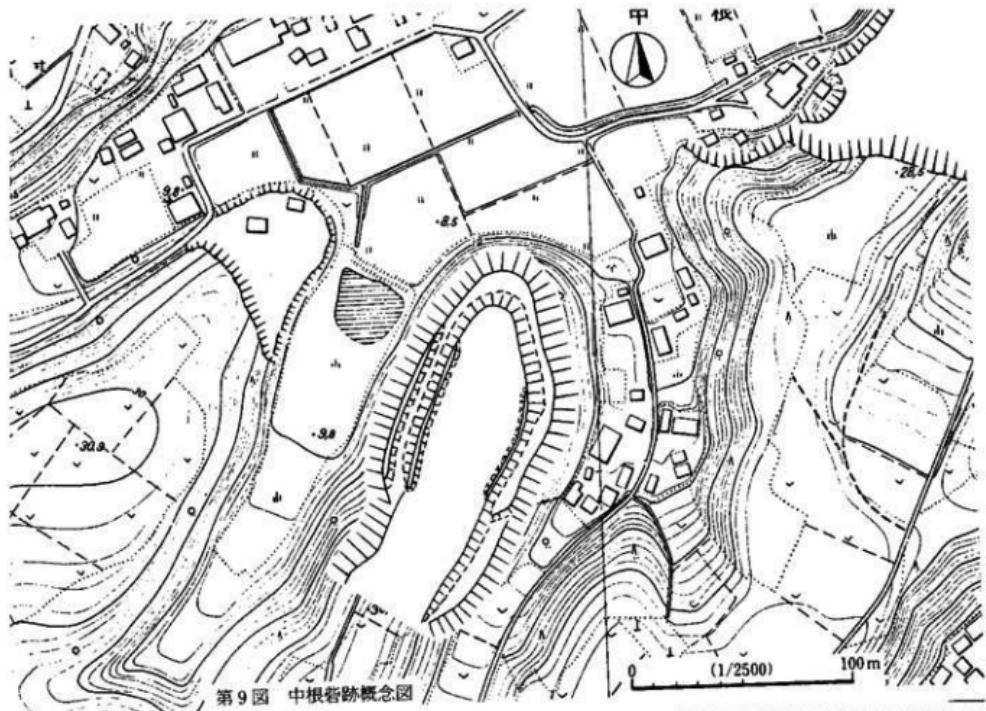
**周辺城跡との比較** 本来、小林城の歴史的環境を考えた場合、少なくとも印旛郡内の千葉・原氏系列や茨城県南部の諸城跡を比較する必要があろうが、ここではごく近辺のものにとどめた。

**（字城山）** 小林城跡の南側谷の奥約200mの台地端に小字「城山」があるが、現在は宅地造成によって遺構は確認できない。

**（笠神城跡）** 小林城跡から南東へ1kmの標高17mの独立台地に占地する。規模は約300×120m。



第8図 笠神城跡概念図



基本的には空堀・土塁・自然の谷などによって5つの郭に分けられる連郭式山城である。北部の郭は土塁で囲まれ、「原豊前守」の位牌を所蔵する南陽院からの坂道が土塁と手前の平場によって出枡形虎口が形成されている。東側緩斜面に造られた南陽院境内は戦国期にも居館としての平場として存在した可能性がある。また、東側集落の小字「根古屋」は城下集落が想定できる。

(中根砦跡)笠神城跡から南南西に約150mの小支谷の奥まった標高27m程の台地先端部に占地する。規模は約100×180m。台地縁に低土塁、周囲に幅2～5mの腰曲輪と西側縁の土塁のみであり、台地基部側との仕切りとなるべき遺構は後世破壊されたと考えられる。

(竹袋城跡)小林城跡から北西約3.5kmの標高26m程の台地先端部に位置し、現利根川や対岸を見おろす位置にある。規模は約80×100m。谷中には平将門伝説が伝えられる「将門の井戸」と称される井戸が存在する。しかし、台地上は空堀が屈曲して枡形を形成していることから、小規模ながら戦国時代末期の新しい構造を有するものと考えられる。

以上の周辺城跡を比較すると、小林城・笠神城が独立または独立状の台地先端部に占地し、規模が大きく、郭が多く、構造的に充実し、根古屋集落が想定できるのに対し、中根砦は谷奥に占地し、小規模・簡易な構造である。小字「城山」の遺構も同様なものであった可能性がある。また、竹袋城は小規模ではあるが、新しい構造を有し、また、性格の異なる城であろう。恐らく、最終的には小林城・笠神城が戦略上かつ領域支配上の重要な拠点として、竹袋城は戦略上重要な点としての砦的機能をもつ城として在地領主以上の権力の影響下に戦国期後半まで機能し、中根砦・小字「城山」は在地領主の城として、或いはやや古い段階で存在したことが想定できそうである。

## 第5章 調査の方法と経過（第11～15図）

今回的小林城跡の発掘調査は、道路工事予定地部分である一般県道成田印西線地方道路特殊改良第一種事業分3200m<sup>2</sup>と一般県道成田印西線地方道県単道路改良（一般）事業分1400m<sup>2</sup>の2事業、合計4600m<sup>2</sup>である。しかし、その境界は土塁・空堀をはじめ、土坑群などの遺構を通るものであり、調査も同時併行となる箇所があった。

**地形測量** 発掘調査は1992年6月から開始したが、調査前に城全体の測量図を作成する必要があったため、同年5月航空写真測量と現地平板測量を測量会社に委託して、担当者の指示のもと、等高線測量と同時に概念図を作成した。（第6図）

**グリッド** 公共座標を基準として、一辺20mの大グリッドを地形図上に作成し、東西方向は西

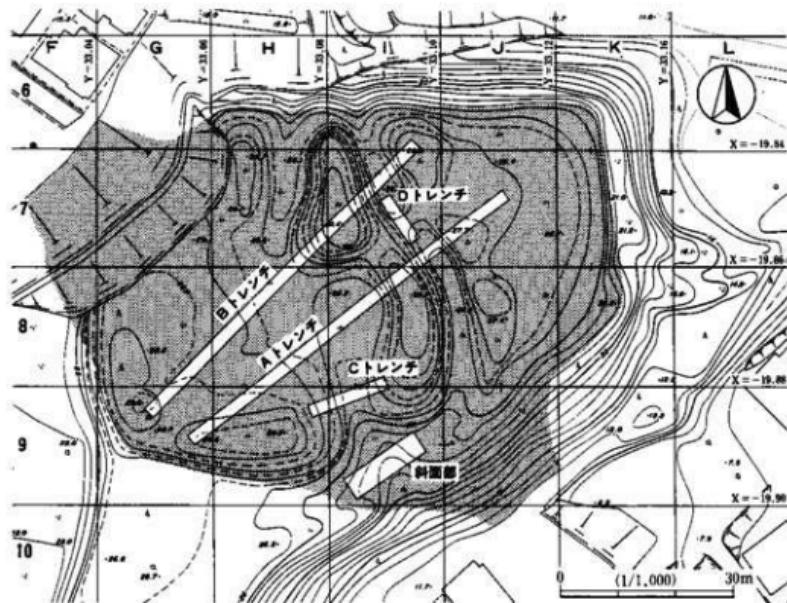
からアルファベット順、南北方向は北からアラビア数字順に配置し、各グリッドの北西隅にある交点を基準にそのグリッド名とした。また、大グリッドの内部に一辺2mの小グリッドを00から99まで100単位入るように設定した。(例 10J-00 X = -19.90km Y = 33.10km)

**トレンチ調査** 城の基本的な築城・改造・廃城過程や生活面を層序的に把握することと、盛土・埋土の量を明らかにして以降の調査計画を立てる必要上から、本格的な遺構調査に入る前の段階として、手掘りによる任意の場所のトレンチ調査を実施した。Aトレンチは土壠A'・SH1・土壠B'・SH2・II郭上・土壠Cを通した2×69m、Bトレンチは土壠A・SH1・土壠B・SH2・II郭上・土壠Dを通した2×65m、CトレンチはSH2の南部に2×14m、DトレンチはSH1の土橋に直交させた2×9m、また、重機の登り口とするために南東側斜面部に設定した4×15mのトレンチである。(第12図)

**上層本調査** 排土場所がなかったために、調査終了部分を埋めてから未調査部分の調査に移るという次のような順番のスイッチバック方式をとらざるを得なかった。①SH1、②I郭上、③SH2の上部、④土壠B・B'、⑤SH2の下部、⑥II郭上。また、時間的節約のため、トレンチ調査の結果を踏まえて、主に表土剥ぎ、空堀の覆土の一部除去・廃土、廃土移動などにバックフォーを使用した。

また、遺構番号については調査時に付けたものを変更せずに報告することとする。基本的には調査時の判断で次の様に遺構記号を使用した。竪穴住居跡 = S I、掘立柱建物跡 = S B、土





第12図 大グリッド・トレンチ配置図

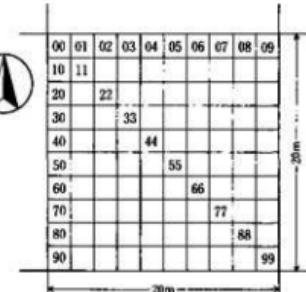
坑=S K、ピット=S P、溝=S D、空堀=S H、

虎口遺構=S F、性格不明遺構=S X

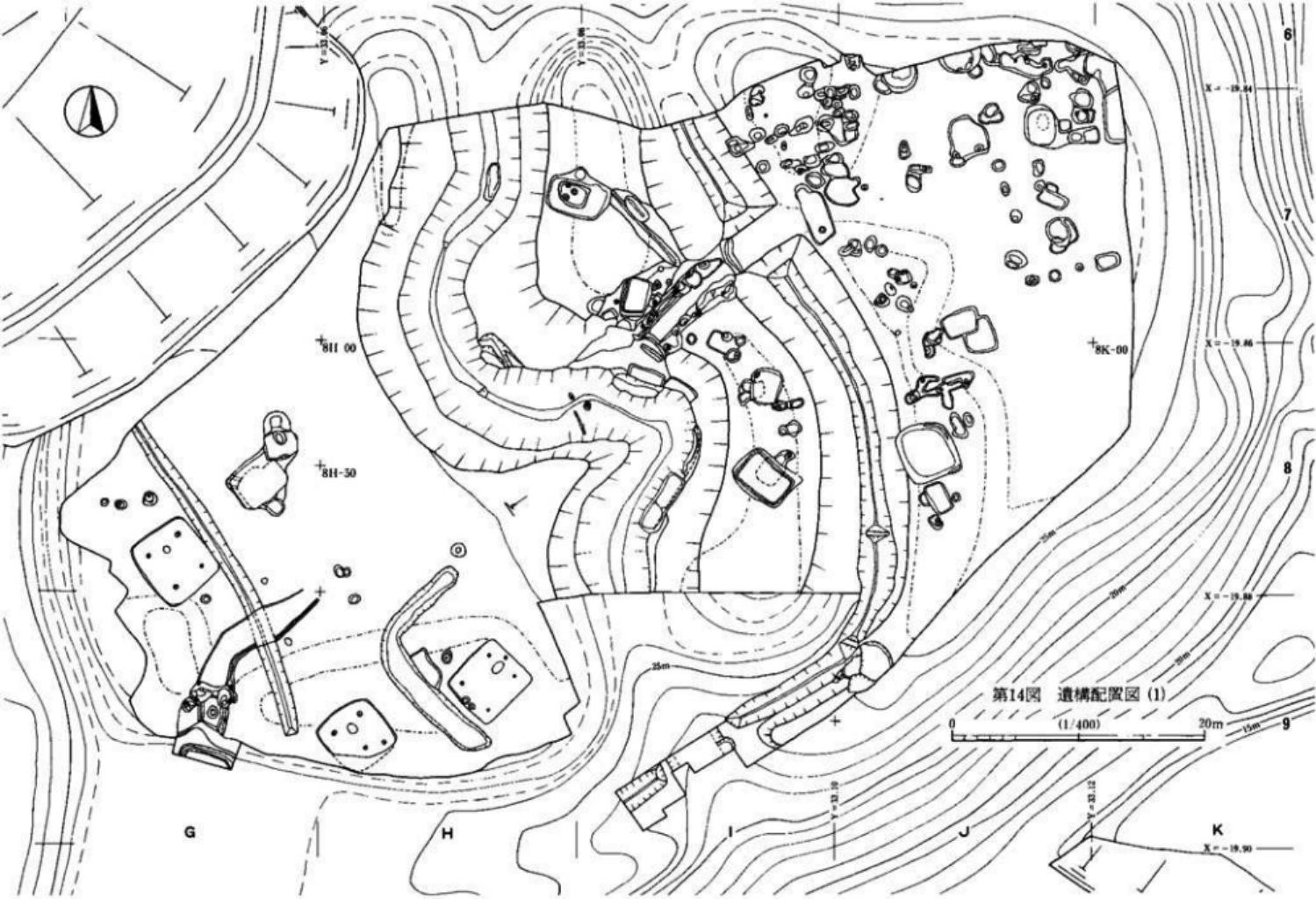
**下層確認調査** 薬城時に立川ローム層もかなり削平されていたため、やや残存が良好で遺構密度の少ないII郭上のみについて行ったが、遺物は確認グリッドから検出されず、本調査は実施しなかった。

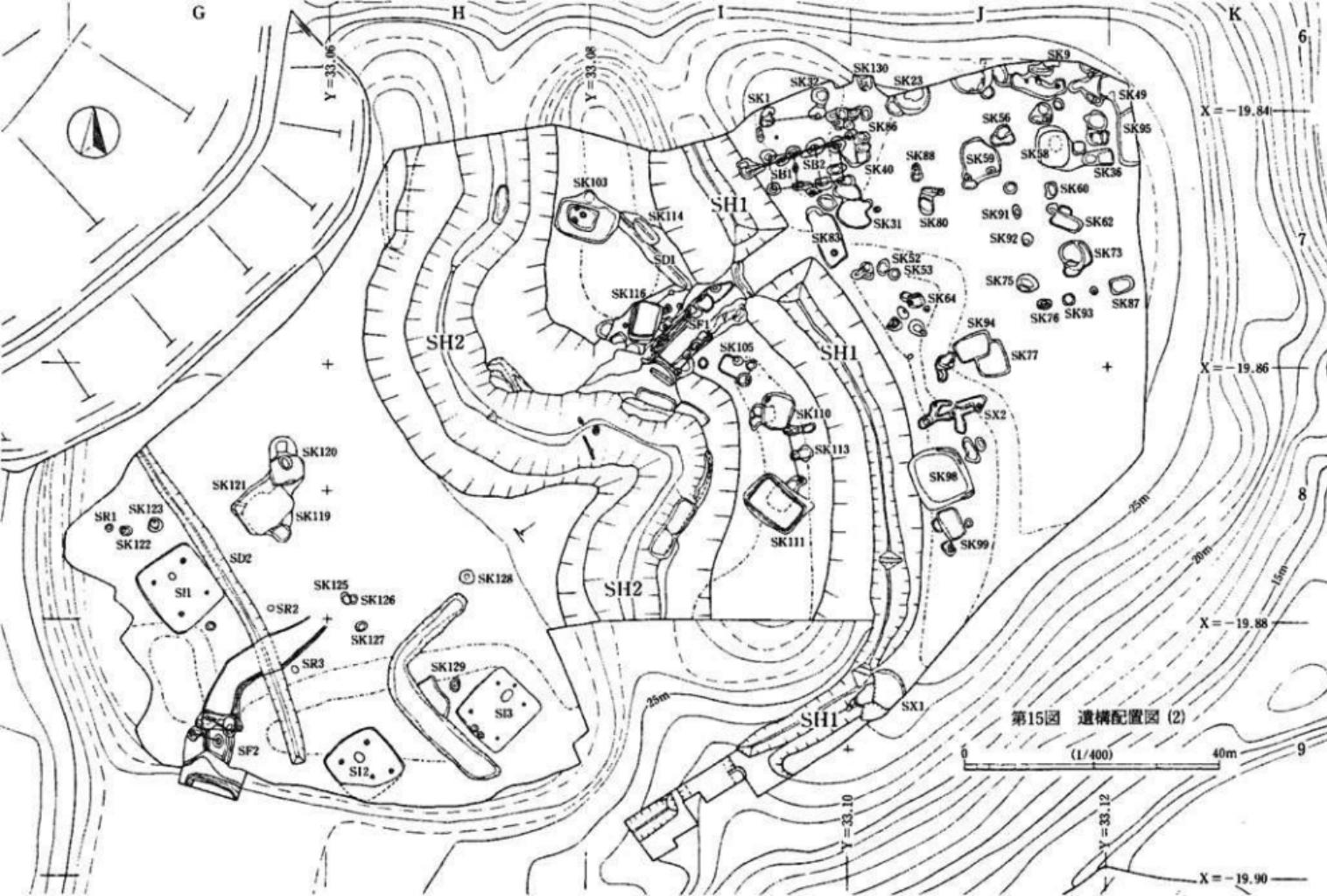
**安全対策** 南東側斜面に階段・郭周囲に柵を設置し、遺構が深くなる場合は周囲を下げて比高を小さくし、さらに柵・階段を設けた。それでもなお、斜面部・台地端部など崩落の可能性の危険がある箇所の調査は行わなかった。

**埋め戻し** 最後にバックフォーで調査区全体を埋め戻し、土をならして終了した。



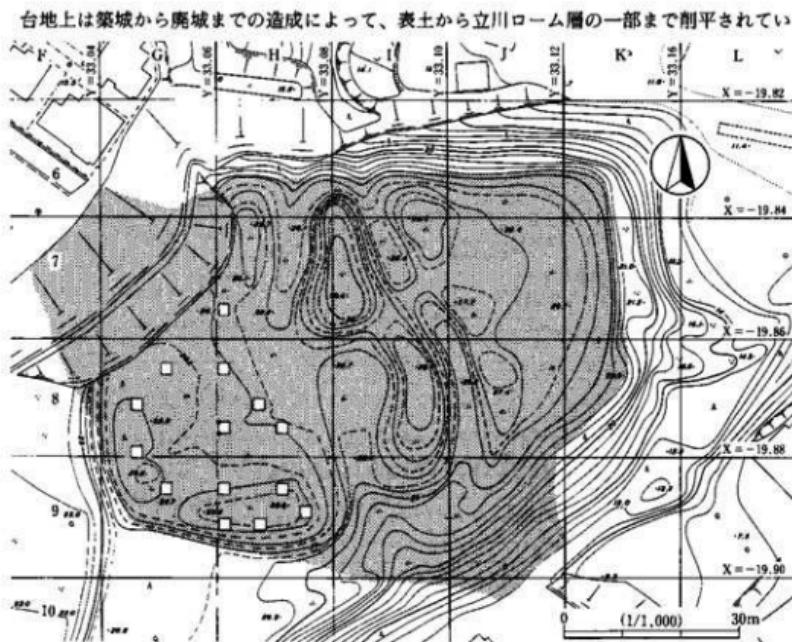
第13図 大グリッドと小グリッド



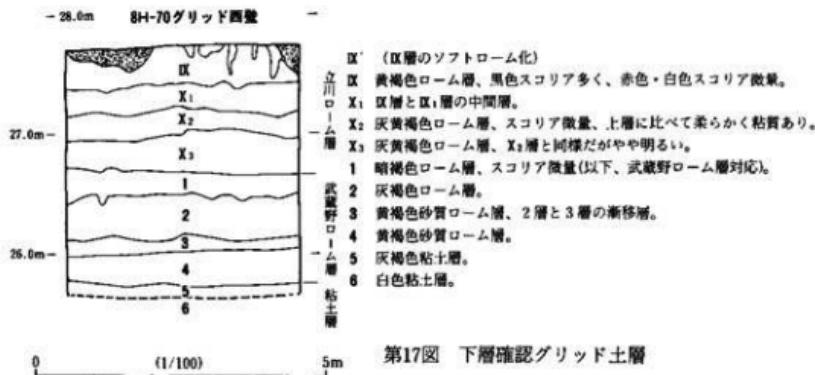


## 第6章 原始・古代の遺構と遺物

### (1) 先土器時代 (第16~18図)



第16図 下層確認調査グリッド配置図



たため、確認調査はローム層の残存状態が良く遺構密度の少ないII郭上のみに実施したが、遺物の検出はなかった。なお、地山の層序をみるために一部で粘土層まで下げた。(第17図、図版16)当概期の遺物は1点のみで、中世の空堀SH2の埋土中から出土した暗灰色安山岩製の打製石器である。横長剝片を素材とした槍先形先頭器の未完成と考えられる。

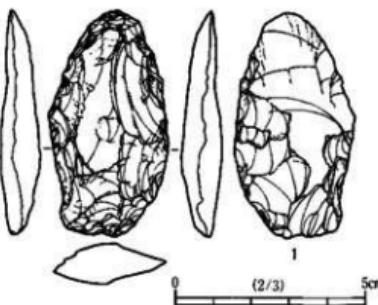
## (2) 繩文時代(第19~24図)

確実に縄文時代といえる遺構も城の造成のために破壊されたと考えられるが、土器、石器、また、当概期のものと考えられる礫などが中世の遺構の覆土から検出された。第7章で詳しく述べるが、土壁B南部に積まれた大量の黒色土とその下の旧表土と考えられる黒褐色土中から大量の縄文土器が検出された。包含層調査を行ったが、その下に縄文時代から中世の遺構が検出されなかったこと、土師器や中世陶磁器をも含むこと、古墳の盛土の積み方ではないと判断されることなどから、これらの遺物は中世において塚の造成時そして土壘造成時に周囲の表土ほかの土が集積されたものと考えられる。

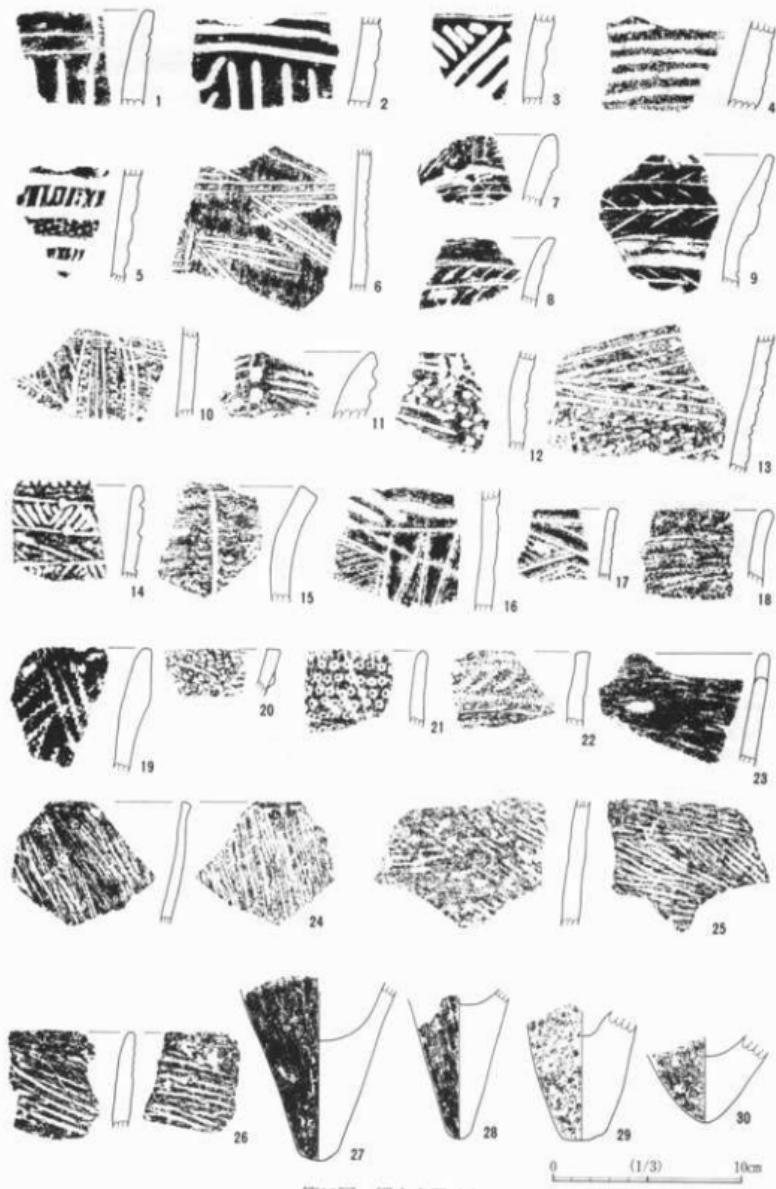
### ①土器

土器・土製品は細片が多く、全てに明確な時期・型式を当てはめることはできなかった。破片数は総数8547点で、その内容は三戸式8点、田戸下層式103点、田戸上層式177点、上下層不明田戸式83点、鶴ヶ島台式144点、茅山式74点、形式不明早期条痕文系2571点、形式不明早期無文系4885点、形式不明早期末から前期初頭447点、諸儀式6点、型式不明前期末から中期初頭1点、形式不明中期15点、時期不明29点、土製品4点である。また、土器の時期別破片数割合は早期沈線文4.36%、早期条痕文32.74%、早期無文57.35%、早期末から前期初頭5.24%、前期0.07%、前期末から中期0.11%であり、ほとんどが早期である。また、早期の形式別土器片割合は三戸式1.36%、田戸式61.63%、鶴ヶ島台式24.45%、茅山式12.56%であり、田戸式土器が2/3近くを占めている。

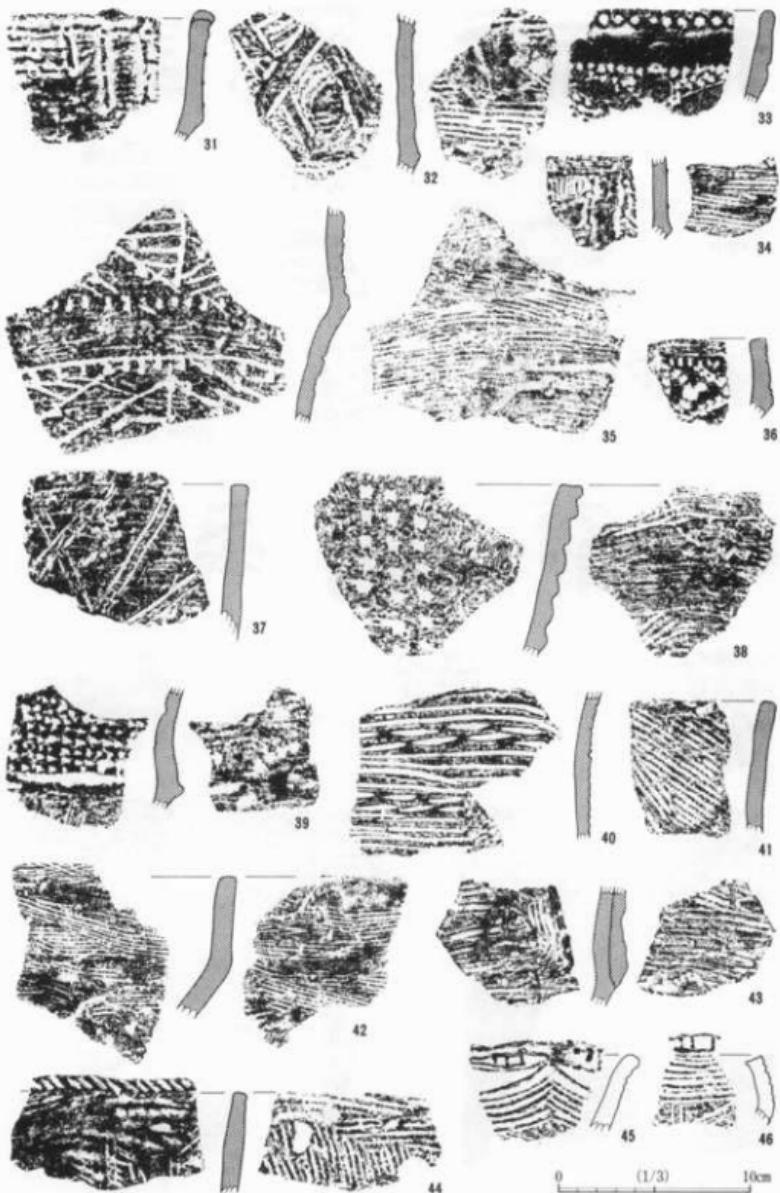
(第19図、図版18)は田戸式土器群を次の様に主たる文様構成で並べたものである。1~5は太沈線、6~9は細沈線、10~15は細沈線と刺突文の組み合わせ、16,17は細沈線と貝殻腹縁文の組み合わせ、18,19は貝殻腹縁文、20~21は竹管による刺突文、22は絡条体压痕文、23~26は条痕文、27~30は底部である。



第18図 先土器時代石器



第19図 繩文土器 (1)



第20図 繩文土器 (2)

(第20図、図版18)は鶴ヶ島台、茅山、諸磯土器群である。31~35は鶴ヶ島台式土器。31は微隆起線文、32は押引沈線で区画、35の裏面は条痕文である。36~44は茅山式土器。38、39の表面は連続刺突文である。44、45は諸磯式土器の口縁部である。

## ②石器 (第22~24図)

製品については全て図示したが、礫については集合した遺構(礫群)として出土しておらず、中世以降の可能性も若干考えられるので除外した。

**石鎌 (1~3)** 石材は全て黒曜石であり、SH2埋土中からの出土である。1は2.9cmと比較的大型で抉入は小さい。2は抉入が大きい。3は小型品である。

**磨製石斧 (4, 5)** 4は灰緑色頁岩、5は灰色砂岩、いずれも両面が磨かれている。

**打製石斧 (6~8)** 6は黒灰色砂岩、両側面が敲かれて若干のえぐりが作りだされている。刃部は欠損している。7は灰色砂岩。8は青灰色砂岩、裏面・基部・側縁部に自然面が残されている。

**敲石 (9~12)** 9は黒灰色砂岩、使用痕は端部のみ、表面には自然剥離がある。10は緑灰色硬砂岩で同様に使用痕は端部のみである。11は灰色砂岩、使用痕は端部から片側側縁部にある。12は灰色凝灰岩、使用痕は端部と片面の中心部にある。

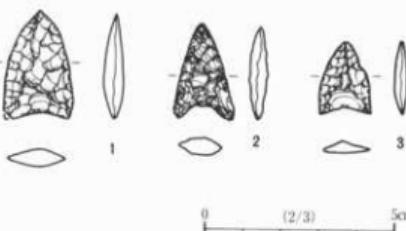
**擦石 (13~17)** 13は白灰色安山岩、使用痕は側縁部以外にある。14, 15は灰色安山岩、使用痕は側縁部以外にある。16は褐灰色砂岩、使用痕は端部にある。17は灰色安山岩、残存する全面に溝状の使用痕がある。13, 14, 15, 16は偏平な河原石を利用している。

**凹石 (18)** 多孔質の黒色安山岩製の小片であり、両面に複数の凹みがある。

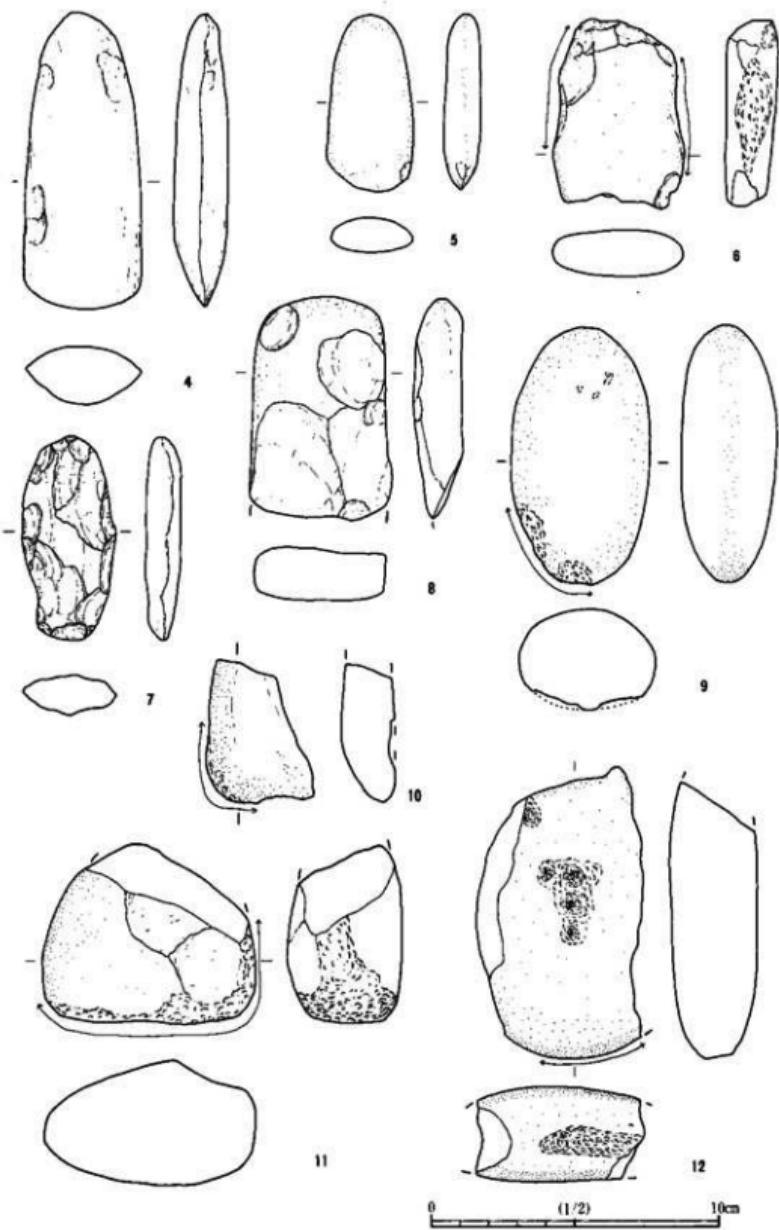
**石皿 (19)** 多孔質の灰色安山岩製の小片であり、両面が使用されている。



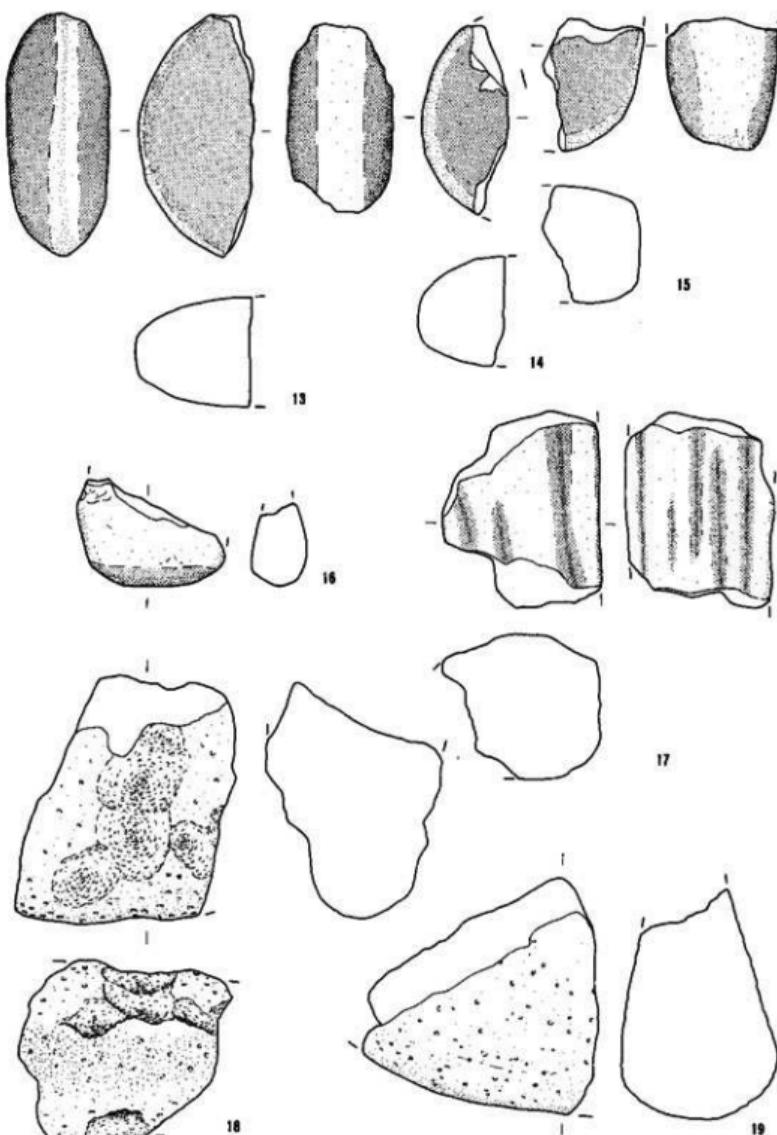
第21図 土壙B下遺物包含層



第22図 繩文時代石器 (1)



第23図 繩文時代石器(2)



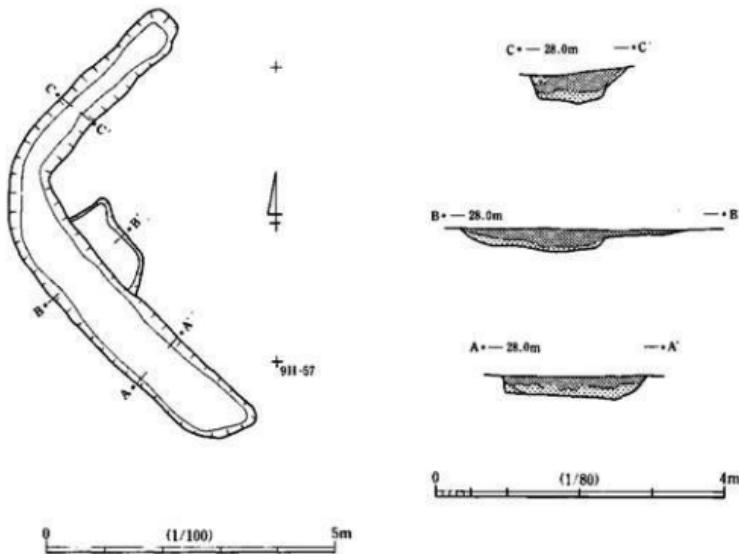
第24図 繩文時代石器 (3)

### (3) 古墳時代

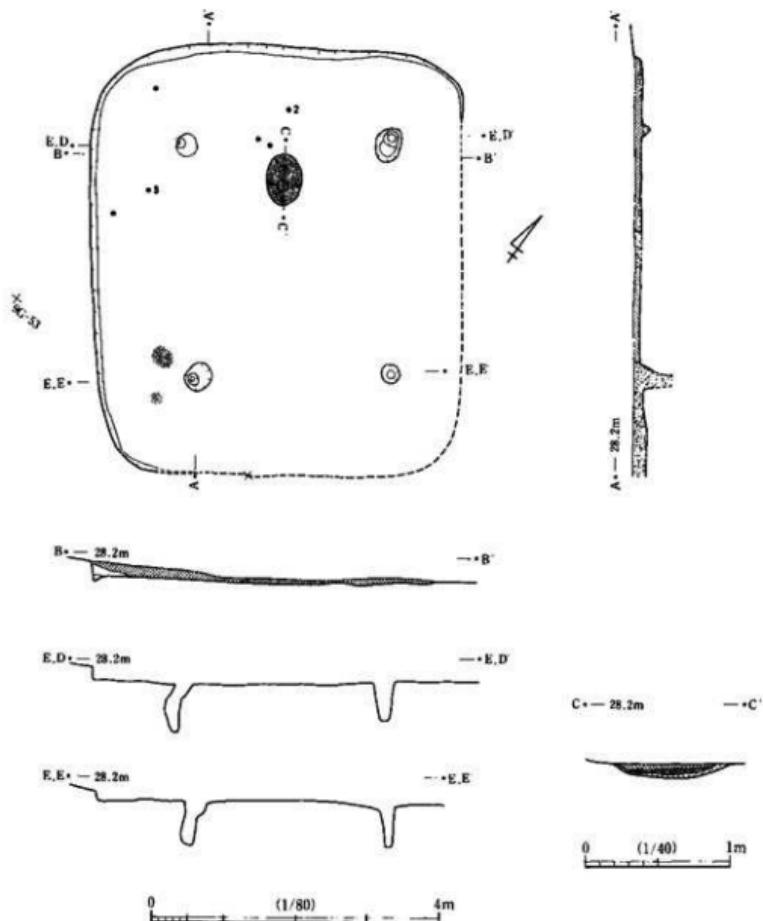
古墳時代の遺構は初頭の方形周溝墓と考えられるSX3と竪穴住居跡3軒(SI1, 2, 3)であり、遺物は土師器の他、近辺に存在したことが推測される古墳に伴っていたと考えられる埴輪、直刀、石棺材である。石棺材については、中世において銘が刻まれて板碑として、さらにその後、城に伴う門の礎石として再利用されており、第7章で取り上げたい。

#### ① 遺構

SX3（第25図、図版16） II郭南部の土塁Cの下から検出されたL字形溝状遺構であるが、築城時に上部を削平されている。規模は北西辺約4.5m、南西辺約6mで、溝の幅は北西辺で60cm、南西辺で80~90cm、深さは20~30cmである。北東部は削平面が東に傾斜しているので溝が消失した可能性があるが、南東辺はその形跡がなかった。溝の覆土は上層が黒褐色土、下層がローム微粒を多く含む明褐色土であり、底部との境は判別しにくかった。南西辺内側には約60cm×1.7mの方形で浅い落ち込みが存在し、溝の覆土上層との区別はできない。構築時から存在したと推測できるが、その性格は不明である。遺物は上層に古墳時代初頭の土師器片が多量に含まれていることから中世に埋没したものではなく、東西に近接する竪穴住居跡に関連するものと考えられる。形状・遺物などから古墳時代初頭の方形周溝墓の可能性が考えられる。

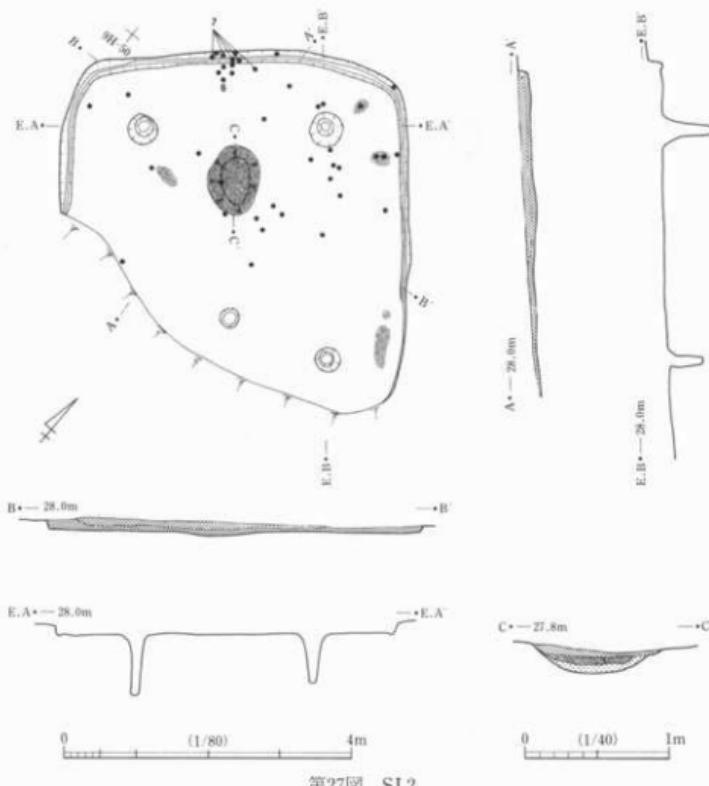


第25図 SX3



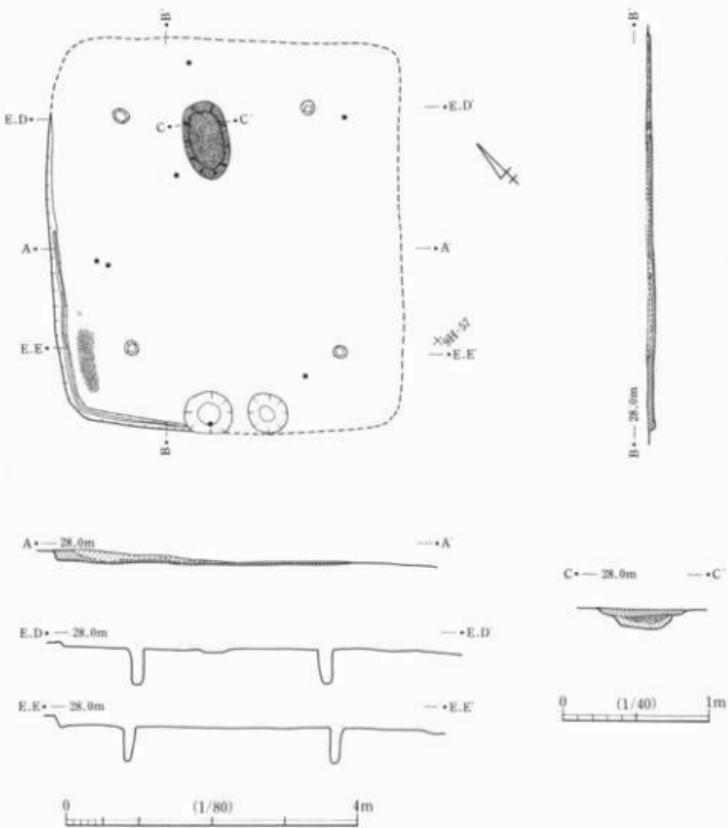
第26図 SI 1

SI 1 (第26図、図版17) 位置 II郭の西端部、一部が土壘Dの下にかかる。主軸 N-35°-W 形状・規模 隅丸方形、長軸5.9m、短軸5.2m、東部の壁は城の造成によって削平されており、その後の畠耕作による擾乱も受けている。覆土 黒褐色土層、しかし、床まで10cmも残存していない。炉上には灰を含んだ黒色土が堆積。柱穴 4か所、径30~40cm、深さ60cm前後。炉 長軸1.3m、短軸40cm。遺物出土状態 東側は削平が深いためか西側に土師器片分布。住居跡周辺の擾乱に混入していた土師器もこの住居跡に伴っていたものと考えられる。土師器破片数82、縄文土器・中世陶器片も混入。



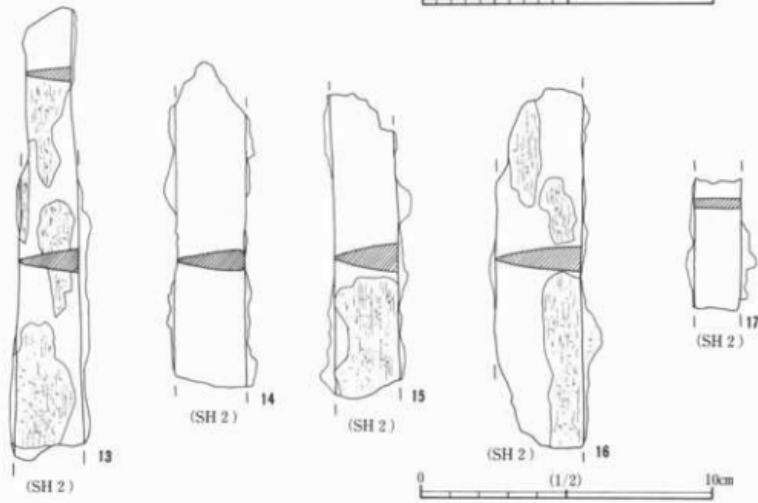
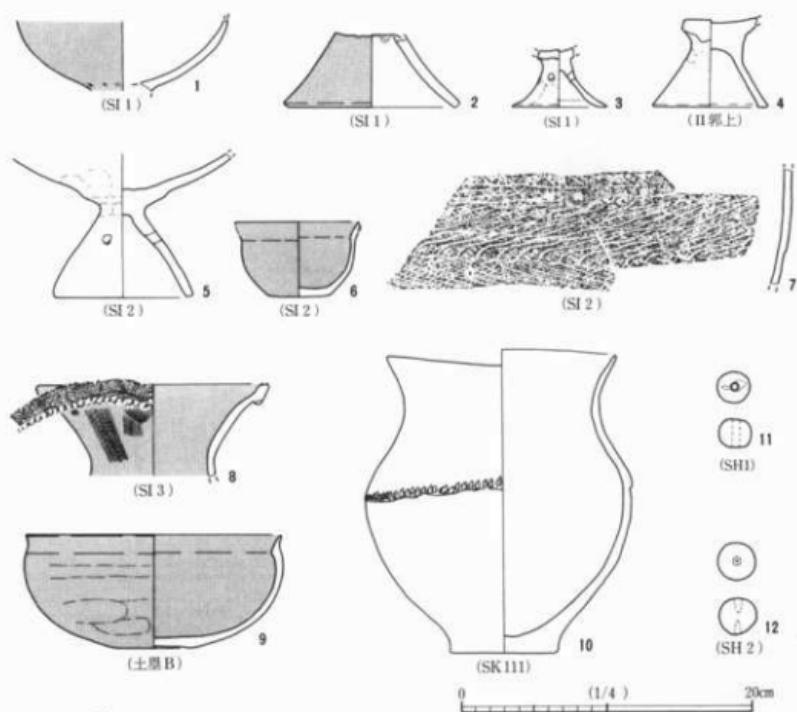
第27図 SI 2

**S I 2** (第27図、図版17) 位置 II郭の南端部に位置し、全てが土壙Cの下である。主軸 N—40°—W 形状・規模 南部が城の造成に伴う斜面のカットにより消失し、上部も削平されている。隅丸方形。長軸推定約5m、短軸4.9m。覆土 黒色土の上に黒褐色土のが堆積。しかし、床まで10cm程しか残存していない。北東壁近くと炉の近くに焼土がブロック状に分布。床・壁残存部分には周溝が巡る。全面に硬化面が形成されている。柱穴 主柱穴3か所（1本は削平された）、径30~40cm、深さ50~80cm前後。炉の南東1.1mの位置に径25cm・深さ5cm程度の穴があるが、性格不明。 炉 長軸90cm、短軸70cm。遺物出土状態 土師器片が北部に集中して分布。土師器破片数127、縄文土器・中世陶器も混入。



第28図 SI 3

**S I 3** (第28図、図版17) 位置 II郭の南東端部に位置し、全てが土壙Cの下である。主軸 N-45°-E 形状・規模 壁は西部の一部を残して城の造成に伴い消失。上部全体も削平されている。周溝も西側一部に残存。床の硬化面によって隅丸方形と確認できた。長軸5.4m、短軸4.9m。覆土 明褐色土の上に黒褐色土が堆積。しかし、床まで10cmも残存していない。西側の隅付近に焼土がブロック状に分布。柱穴 主柱穴4か所、径20cm、深さ40~50cm。南西側壁際に径1m程・深さ約20cmの擂鉢状の穴が検出されたが、性格不明。或いは出入り口施設に伴うものか。炉 長軸1.1m、短軸60cm 遺物出土状態 土師器片が一様に分布。土師器破片数113、縄文土器・中世陶器も混入。



第29図 古墳時代遺物 (1)

## ② 遺物 (第29図、図版19)

小破片が多く、実測できたものは少ない。なお、土師器の器種としては高坏が多い傾向がある。

**S I 1 出土** 1は高坏の坏部(70%)で、口縁部も欠損。内面ヘラ磨き、外面は摩滅して不明。脚部との接合部近くは指頭痕あり。色調は外面がぶい赤褐色で赤彩が風化したと推測、内面は黒色。2は高坏の脚部(60%)で、底径12.2cm、穿孔推定6か所。調整は外面ヘラ磨き。色調は外面ぶい赤褐色、内面橙色。3は小型器台の脚部(90%)、底径6.6cm、整形は手づくね、調整は指ナデとヘラ削り。色調は外面ぶい黄橙色、内面黒褐色。4はS I 1に近い攢乱出土の高坏脚部(90%)。底径8.0cm。調整は外面ヘラナデ、内面指ナデ。色調は坏部内面が赤彩され、赤褐色、脚部外面橙色、内面黄橙色。

**S I 2 出土** 5は高坏(70%)で坏部口縁部が欠損。脚部穿孔3カ所、底径9.7cm、調整は坏下部外面が指頭とナデ、脚部外面ヘラ磨き、内面指ナデ。色調は外面橙色から浅黄橙色、内面ぶい橙色から褐灰色。6は小型鉢(50%)。口径8.5cm、底径4.2cm、器高5.1cm。調整は内外面ヘラ磨き。色調は外面明赤褐色、内面浅黄橙色。7は壺の胴部。文様は付加繩文。色調はぶい黄橙色。

**S I 3 出土** 8は壺の口辺部(25%)。口径14.6cm。口縁部上端部から外側に折り返された部分に繩文が施され、下端部には斜めの刻みが施される。調整は外面に一部ハケ目痕が残り、内面はヘラ磨き。色調は内外面とも赤彩され、赤褐色。

**その他の遺構出土** 9は土塁B下の黒色土層から出土した鉢(70%)。口辺部に棱をもつ。口径8.6cm、底径5.0cm、器高7.6cm。調整は外面下半ヘラ削り、上半ヘラ磨き、内面ヘラ磨き、口縁部内外面横ナデ。色調は全面赤彩され、赤から赤褐色。10は土塁B'下の地下式坑S K111埋土中から出土した壺(ほぼ完形)。口径15.8cm、底径7.5cm、器高20.5cm。外面胴部上半に木の実とも考えられるもので刺突が連続している。調整は内外面横方向の不規則なナデ。底部に木葉痕あり。胴部下半には多くのススが付着しており、日常火を受けていたものと考えられる。色調はスス部分以外は橙色。11,12は土玉。11はSH1埋土中出土。径2.3~2.9cm穿孔は径5mm。色調は赤褐色。12はSH2埋土中出土。径2.5cm、穿孔は径6mmであるが、貫通していない未成品である。13~17はSH2埋土中から出土した直刀と考えられる鉄製品である。ほぼ同一レベルから集中して出土したので同一個体と考えられる。13~16は刃部で、17は中茎に推定される。刃部には鞘と考えられる木質が付着している。これは恐らく堅穴住居跡の時期よりも下るもので、築城時に近辺に存在して崩した古墳の主体部に副葬されていたものと考えられる。

埴輪（第30～33図、図版20） 1から6は形象埴輪、それもすべて人物埴輪の部分資料と考えられる。1は人物の腰の部分の破片資料である。色調は器肉中央が灰色、その周囲が黄色、そして器表面が赤橙色である。胎土中には酸化鉄粒、石英粒、長石粒を普通量含み、焼成は良好である。腰帯を表現していると考えられる突帯に、U字状のものが垂下するように貼付されている。このU字状の部分は細い竹管による刺突が縁どりのように連続しており、中央にはヘラでX字状の刻みが入っている。竹管による連続した刺突は革紐による綴じを表現していると考えられる。このことから、このU字状のものは革製の小さな鞆様のものであることが想定される。これに類似する資料として京都府綾喜郡田辺町堀切7号墳出土の人物埴輪（第30図）をあげることができる。堀切7号墳例では、鞘に納まつた刀子と鞆状のものが幅広の革帶に垂下されている。

2は人物埴輪の左腰に装着されていた刀子もしくは小刀の柄頭である。端部は平面卵形で、平坦になっており、下方に瘤状の折れをもつ。端部平坦面と外側側面にヘラ刻みによる沈線が描かれている。また、外側側面には棒状工具による刺突が2か所に見える。色調は橙褐色で、長石粒、石英粒等を普通量含み、焼成は良い。

3は人物埴輪の腕を表現している資料であると考えられる。色調は器肉が暗橙褐色、器表面が橙褐色で、酸化鉄粒、石英粒等を普通量含み、焼成はかなり良い。

4は人物埴輪の着衣の裾部分を表現しているものと考えられる。形態からみて半身像である。小片からの復原であるので、実際の姿はこれよりも若干太めであったかも知れない。器肉が橙褐色、器表面が赤橙色で、酸化鉄粒、石英粒等を普通量含み、焼成はかなり良い。

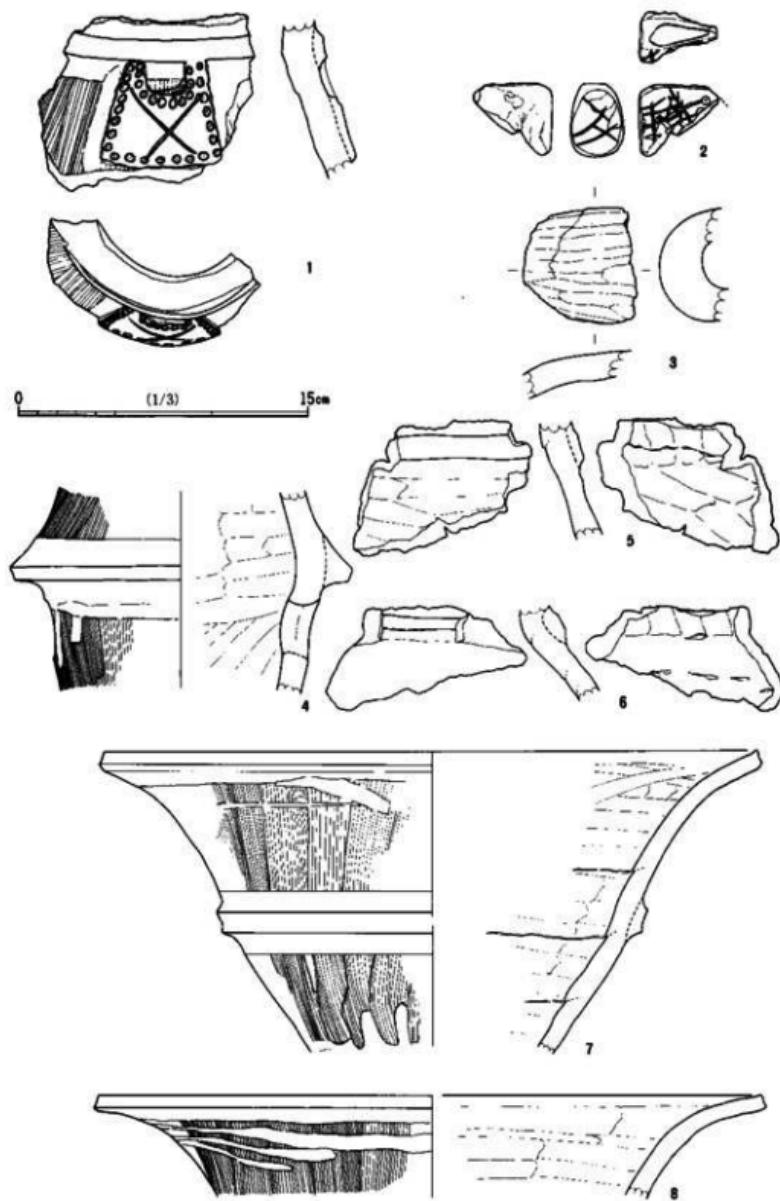
5・6ともに人物埴輪の腰の部分の破片であると考えられる。5は器肉中央が灰色、その両側が乳橙色、そして器表面が橙色である。酸化鉄粒等を普通に含み焼成は良好である。6は乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み焼成は良い。

7・8は朝顔形埴輪の花状部の資料である。ともに最大径が30cm程度で、頸部で明瞭にくびれる形態のものである。7は器表外面が乳褐色、それ以外の部分が乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒を多めに含み、焼成は良い。8は器肉中央が



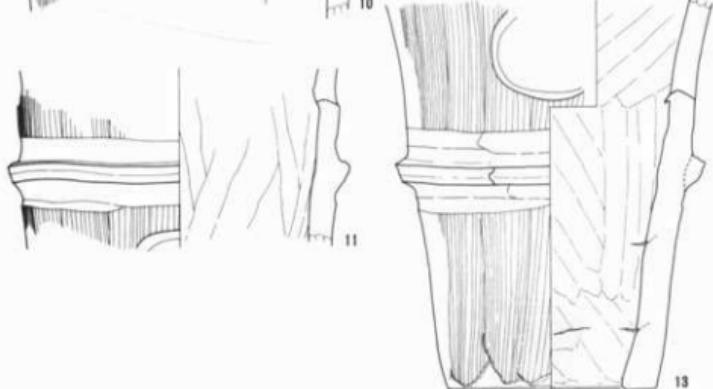
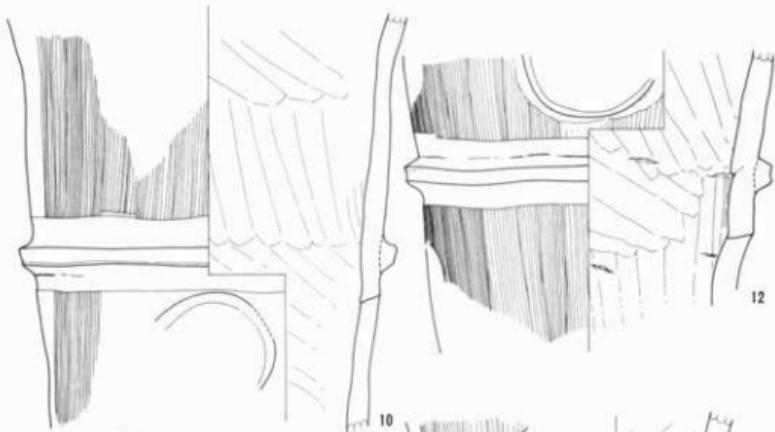
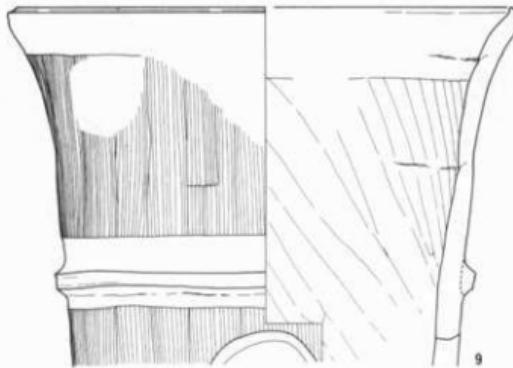
第30図 京都府綾喜郡田辺町  
堀切7号墳出土人物埴輪

出典：若林良一『はにわ人の世界  
—'88さいたま博覧会  
特別展図録』  
埼玉県立さきたま資料館



第31図 古墳時代遺物(2)(埴輪)

0  
1  
3  
15cm



第32図 古墳時代遺物(3) (埴輪)

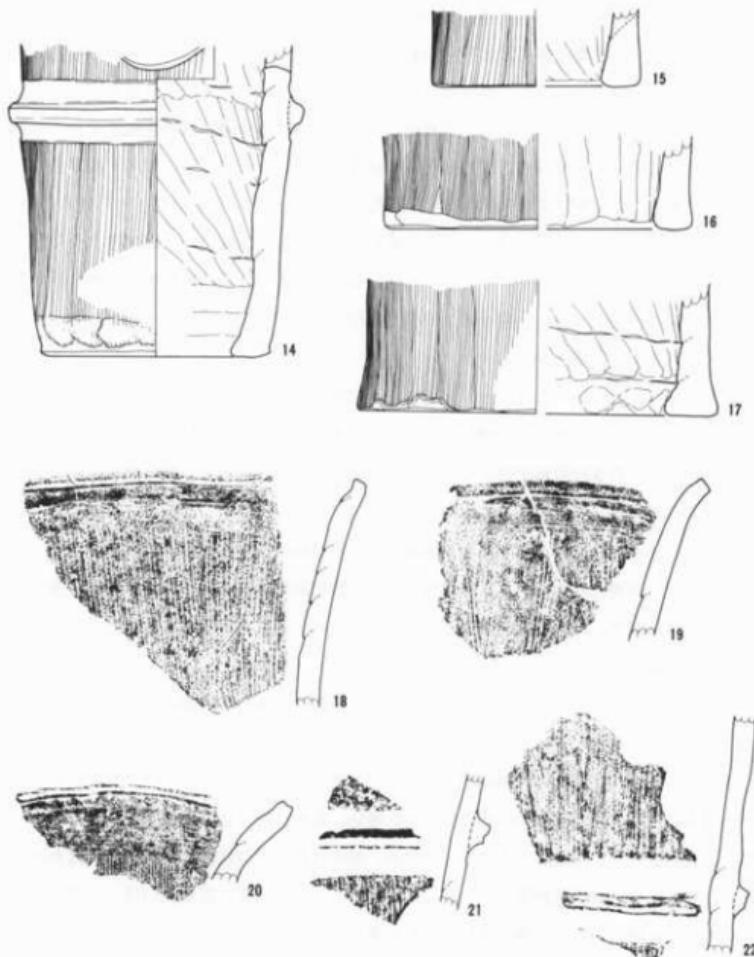
灰色、その両側が淡い乳橙色で、器表面は内外面ともに乳橙色で、焼成は良好である。

9から15は円筒埴輪である。上から下まで全てを復原できた資料はなかったが、3条4段のようである。9は器肉が淡い乳褐色、器表面は内外面ともに乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒などをやや多めに含み、焼成は普通である。10は器表外面が橙色、それ以外の部分は乳橙色である。酸化鉄粒、長石粒等を多く含み、焼成は良好である。11は2段目、3段目に透孔が直交方向で開けられている。器肉中央が乳褐色、器表面は内外面ともにやや濃い目の乳橙色で、石英粒等をやや多めに含み、焼成は良い。12も11と同様に透孔が開けられている。器肉が乳橙色で、器表外面が橙褐色、器表外面はやや濃い目の乳橙色である。酸化鉄粒等の石粒をやや多めに含み、焼成は良い。13は基部から2段目にかけての資料である。基部外面のハケ目調整は下から上に向かって行われており、基部の所でひきつれ状になっている。色調は乳橙色で、酸化鉄粒等をやや多めに含み、焼成は良い。14も13と同様に基部から2段目にかけての資料である。基部外面はハケ目を施す前に横方向のヘラケズリを行っている。従って、通常呼称されているところの底部調整ではない。ハケ目はやはり基部から上に向かって施されており、基部の所でひきつれをみせている。15は基部のみの資料である。径の復原値から円筒埴輪の基部であろうと考えたが、動物埴輪の脚基部資料である可能性も否定できない。乳橙色で、酸化鉄粒等を普通に含み、焼成は良い。

16、17は円筒埴輪以外の、つまり形象埴輪か朝顔形埴輪のいずれかの基部資料である。16は器内が橙褐色、器表は内外面ともに赤橙色である。酸化鉄粒、石英粒等を少し含み、焼成は良好である。17は器肉が淡乳橙色、器表面が灰白色で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は良好である。

18から22は怪を復原できなかった円筒埴輪の破片拓影図である。内面はすべて指によるナデ調整があるので拓影図を省略した。18は器肉が灰黄色、器表面が赤橙色で、石英粒を普通に含み、焼成は良い。19は器表外面が乳橙色で、それ以外の部分は乳褐色である。酸化鉄粒、石英粒等を普通に含み、焼成は良い。20は器肉が乳褐色、器表は内外面ともにやや乳色がかった橙褐色で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は良い。21は器肉が乳黄色、器表は内外面ともに乳橙色で、酸化鉄粒等を少し含み、焼成は良い。22は器表外面が濃い目の乳橙色、それ以外の部分は乳橙色である。酸化鉄粒等をやや多めに含み、焼成は良好である。

これらの埴輪の時期についてであるが、円筒埴輪の場合3条4段ではあるが下総型のプロボーションにはなっておらず、さらには朝顔形埴輪を見た場合頸部のくびれが強く、明らかに下総型以前の形状である。以上のことからこれらの資料はかつて『小林古墳群』の中で述べられていたのと同様に、6世紀前葉のものとみてよいであろう。



第33図 古墳時代遺物(4) (埴輪)

## 第7章 中近世の遺構と遺物

### (1) 築城遺構（土塁、空堀、虎口）

本節では、第4章で地表面観察から城の縄張構造を概観した際に出た構造上の問題点（主郭がI郭とII郭のどちらかであるか）が発掘調査でどのように解明されたかが主旨である。つまり、II郭が郭内最高位にあること、II郭側の土塁B・B'がI郭側の土塁A・A'より大規模であり、その間に空堀SH1が存在することなどはII郭が主郭であることを示すが、土塁B・B'のII郭側に検出が予想された大規模な空堀SH2の存在は逆にある時期のI郭の優位性を示すことになる。この矛盾は城の改造の存在が予想された。なお、基本的にトレンチごとではなく、遺構ごとにみていきたい。

#### I郭上（第35図）

Aトレンチでは、ハードローム層まで削平された面上に30~40cmの暗褐色土と表土が堆積している。中世の面の標高は26.6m前後である。

#### II郭上（第36図）

Aトレンチでは、ハードローム層上面まで削平された後に土塁CとSH2近くの傾斜部を除いて黒色土が10~30cm堆積しており、これが郭使用面と考えられる（標高約27m）。土塁C近くの長さ約6m部分では青灰色粘土が50cm程積まれ、SH2側の傾斜部約11mは当時の郭面が削られたこと、SH2の肩部分（標高25.8m）では1.2m程も削平された可能性がある。

Bトレンチでは、ハードローム面まで削平された上面に、耕作土と考えられる暗褐色土と表土が30~40cm堆積している。ローム上面の凹凸は後世の畑耕作による擾乱とみられる。郭使用面の標高は約28mとAトレンチ（南側）よりやや高い。

#### 土塁A（第36図、図版7）

Bトレンチによると、ハードローム層を削平した上面に粘土を含む暗褐色土、ローム粒・ブロックを多く含む黄褐色土、白色粘土を多く含む灰褐色・暗褐色粘土質土の互層で高さ約1.7m積まれている。基底部から中世の遺物が出土しているが、この下に検出された掘立柱建物跡や土坑群に伴うものであろう。

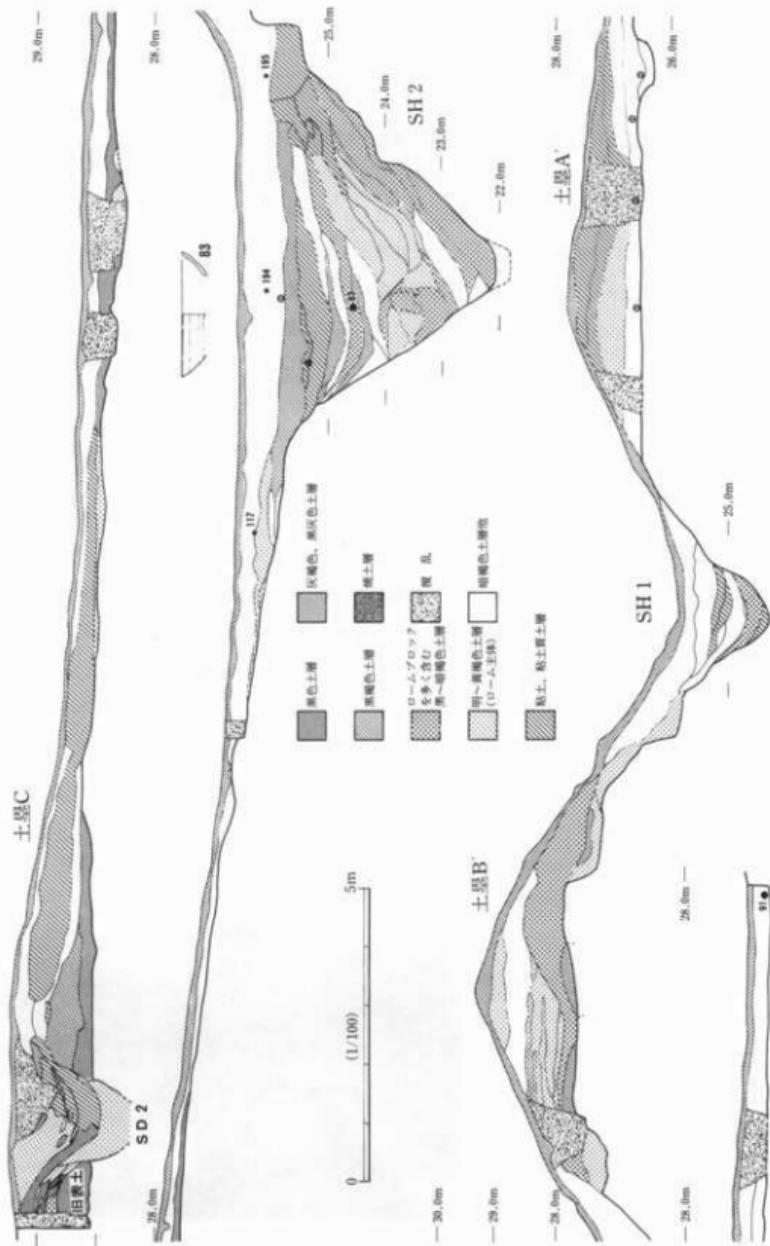
#### 土塁A'（第35図）

Aトレンチによると、ハードローム層まで削平した上面に最高で厚さ1.3mの土が積まれている。下から暗褐色土、



第34図 トレンチ調査風景

第35図 Aトレーナセクション



黄褐色土、明褐色粘土質土、灰褐色粘土であり、ロームブロックも含む。基底部から黒雲母片岩の小破片が数点検出されているが、これは土壙下の遺構SK64に伴うものと考えられる。

#### 土壙B（第36図、図版7）

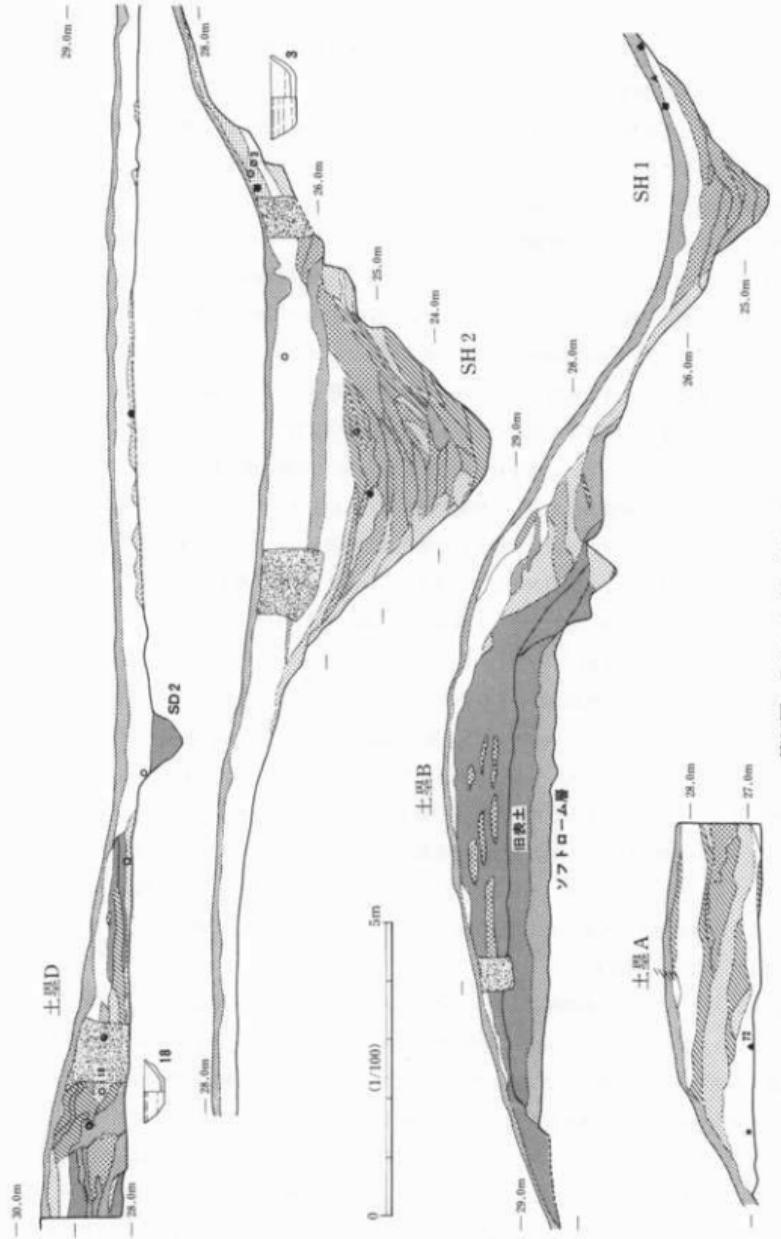
Bトレンチは土壙Bの中でもII郭側に突出している部分に入れた。この部分は土壙C端部と同様だが、他にはみられない築城以前の旧表土と考えられる面が残存していた。旧表土面は標高29m程であり、ソフトローム層から漸位的に続く厚さ約40cmの黒褐色土とその上の約40cmの黒色土がある。この黒色土と黒褐色土中には非常に多くの遺物が含まれていた。縄文時代の遺物が目立ったのでトレンチ部分外も含めたこの箇所は包含層（約60m<sup>2</sup>）として調査したが、出土遺物の破片数は、縄文時代石器剥片2、疊97、土器片2,181点の他、古墳時代初頭の土師器片も188点出土しており、特に時期的・プロック的には捉えられなかった。さて、この旧表土からはローム微粒を微量含む黒色土とややロームの多い暗褐色土が交互に最大1.2m程積まれている。なお、SH1側は旧表土が斜めにカットされて遺構（SD1）が造られており、旧表土上に積まれた黒色土がその上にも積まれている。また、さらに外側に幅約1.5mの段とさらにSH1斜面に2ヶ所の段が造られており、黒褐色土とローム粒が多く含む明褐色土が積まれて斜面を形成している。旧表土とその上に積まれた黒色土で形成された部分は古墳や土壙の盛土にみられるような版築ではなく、旧表土が下に残存していることから、築城以前の盛土として考えられ、周囲で土坑群が検出されたことも含めると、塚の可能性が考えられる。

#### 土壙B'（第35図、図版6）

Aトレンチによると、地山をハードローム層まで削平した上に土を最高1.8m積んでおり、頂部とSH2底との比高は約7.5mにもなる。基底部幅は約7mであるが、両端部の約1.5mが50cm程段状にカットされており、SH1側斜面にも段が設けられている。これらの段にはローム主体の黄褐色土を盛っており、段状整形後の盛土は土壙崩落を防止するためのものと考えられる。土壙下の遺構上はあらためて黒褐色土を載せた後、SH1側を中心に約70cmの厚さでローム小粒を多く含む暗褐色土を、SH2側にはローム微粒～小粒を多く含む明褐色土を50cm程盛り、さらに暗褐色土・明褐色土を積んでおり、ロームを大量に使用して積んだ土壙である。

#### 土壙C（第35図、図版6）

Aトレンチによると、西端部に旧表土を残して黒色土・黒褐色土・暗褐色土を1m程積んでいる。その上面から上幅約2.5m程の空堀が掘削されている。これはII郭上を南北に走る薬研状の溝SD2であり、土壙Cにまで達して止まっており、土壙上から堀底まで2m程になる。その後、青灰色粘土層を主体とした粘土・土が1.2m程積まれて、同時にSD2が粘土とロームブロックで人為的に埋められており、土壙造成に2段階あることが判明した。SD2の上、表土下に1.2m程掘り込まれたものはローム小粒を含む黒色土・暗褐色土で埋まっており、II郭上のSD2の覆土と同様であることから、SD2が埋められて若干のくぼみに掘られた後世の根切



第36図 Bトレントセクション

り溝の可能性が考えられる。

#### 土壘D（第36図、図版7）

Bトレンチによると、ハードローム面まで削平された上に、西端部に1mあまり、ローム微粒・粘土粒を含む黒色土・黒褐色土が積まれている。さらにその西側に粘土質土を中心に長さ約4.5mにわたってSD2の手前まで積まれており、Aトレンチの土壘Cでみられた2段階の造成の様相と基本的に一致する。

#### 土壘E（第37図）

II郭の南西部が削平された際にそのほとんどが消失しているが、残存部にトレンチ調査を行った。ハードローム面まで削平された上に、白色粘土を多く含む灰褐色粘土質土や暗褐色土を高さ約80cm積んでいる。

#### S H 1（第35～38図、図版9）

地表面で既に土壘B'・土壘Aの間の空堀の存在が確認できたが、Aトレンチでは、堀底は地表面から1.6mと予想外に埋没していた。土壘B'との比高は約5m、土壘Aとの比高は約3.5mで、薬研堀である。覆土は自然堆積と考えられる堀底から約10cmの灰褐色粘土質土層、その上に50cm程粘土・ロームブロックを多く含む層があり、さらにその上に人為的埋土と考えられる30cm程の灰褐色粘土層があり、その上表土までの約60cmの暗褐色土は自然堆積と考えられる。

Bトレンチは基本的にはAトレンチと同様であるが、堀底から1.2m程はローム微粒を多く含む暗褐色土と粘土質土が埋まっており、基本的には両側の土壘から崩落した自然埋没と考えられる。

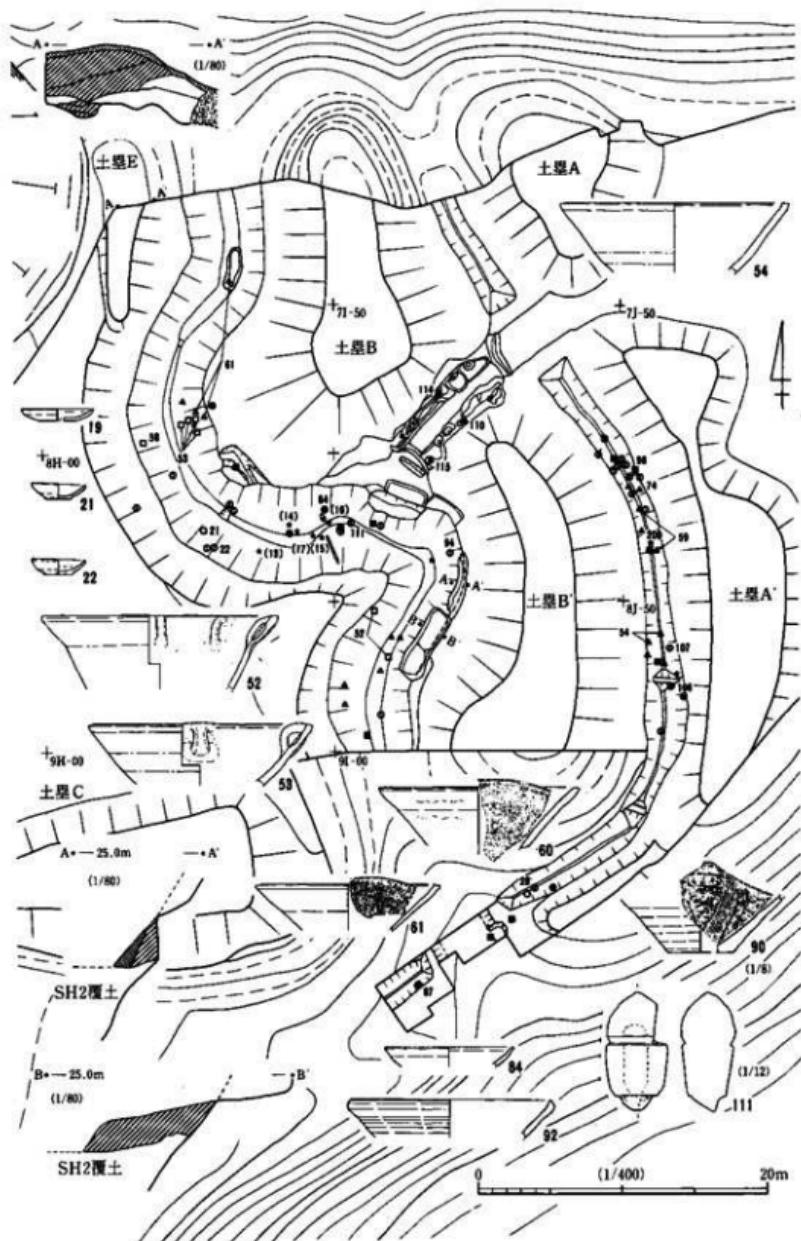
遺物はAトレンチが通った周辺で絹質母片岩が多く出土しており、板碑が集中して出土した土壘下の遺構SK64からの流れ込みと考えられ、SH1はSK64より後に掘削されたことが推測される。また、SH1全体では瓦質擂鉢の破片の出土が多い傾向がある。

#### 土橋（第39図、図版8、9）

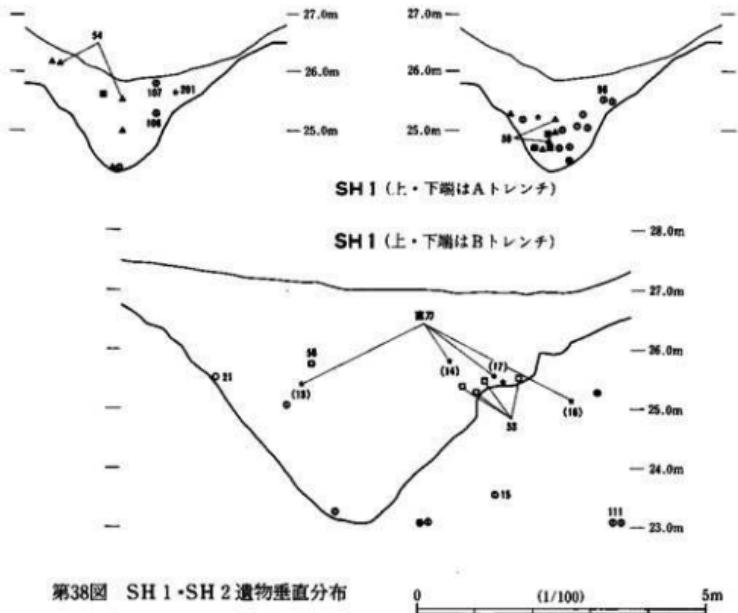
Dトレンチによると、土橋はハードロームの地山でSH1掘削時に掘り残したものと考えられる。基底部の幅は7.5m、上部はやや丸みをもつが、幅3m程である。SF1側に上幅約60cm、下幅約20cm、深さ約5cmの溝が掘られている。斜面は北側は直線的だが、南側は曲線的と、形態が異なる。或いは、分担した掘削担当者の違いであろうか。SH1の覆土は北側の底から40cm程に白色粘土粒を多く含む灰暗褐色粘土質土が帯状に堆積しているが、全体として基本的に自然堆積とみられる。

#### S H 2（第35～38図、図版10）

北から土壘Bの南端突出部を巡る様に西側に膨らみ、土壘B・B'間の切れ目（虎口）部分では北東に入って約7mの直線部分があり、さらに土壘B'の南端突出部を巡る様に西側に膨らみ、南東斜面の豊堀に続く。土壘と郭面との境を空堀の肩で計測した場合、ほぼ9m(5間)だが、



第37図 SH 1・SH 2 遺物平面分布

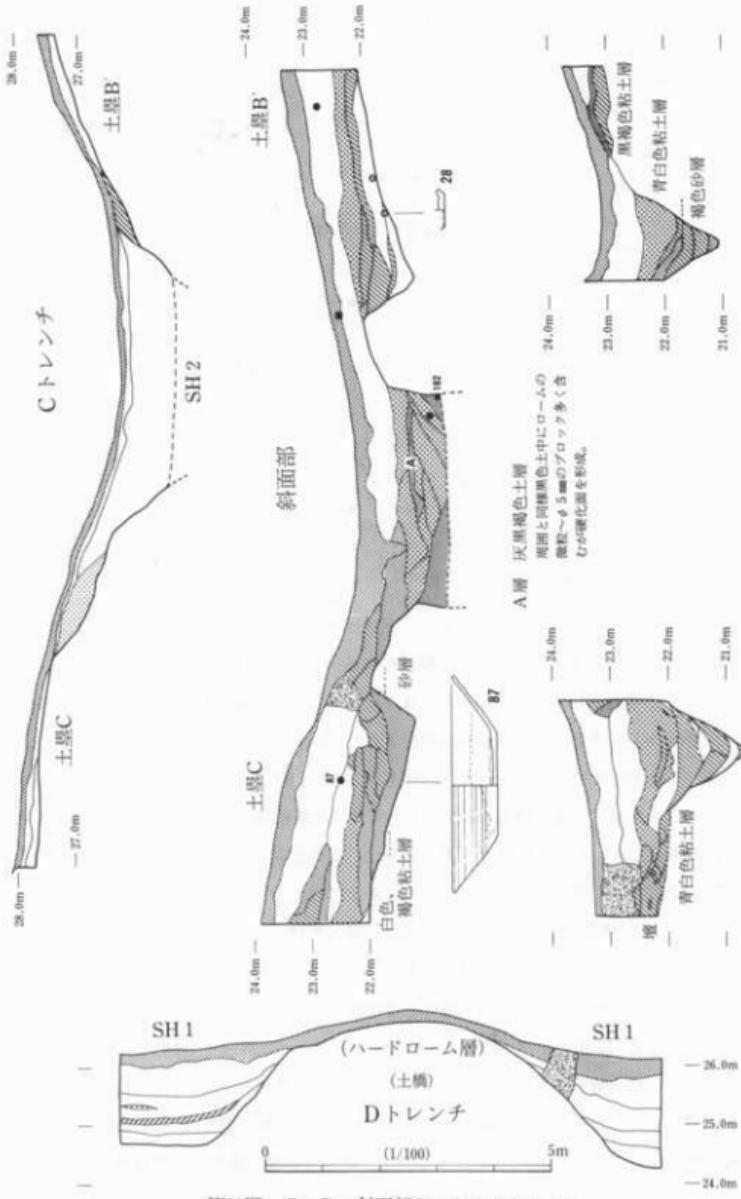


第38図 SH 1・SH 2 遺物垂直分布

(1/100) 5m

虎口とII郭の突出部との距離は約7mである。堀底は虎口部で幅約20cmと狭いが、南北端では幅約1mとやや広がる。また、この部分の堀斜面にピットと縦の溝が検出されたことから、SF1につながる木橋の痕跡の可能性がある。Aトレンチでは、上幅約6.5m、深さ3.5m、堀底幅約50cmで断面が逆三角形となる薬研堀が検出された。現地表面から堀底までの深さは約4.5mである。肩からは堀底までは約3.5mであるが、削平されたII郭上の復原レベルからは6m程にもなる。これは人為的に一度に埋められている。まず、土壠B'側からロームブロックを多く含む黒褐色～暗褐色土が、次に土壠B'の下部を削り出した粘土やロームブロックを多く含む土が入り、次にII郭側から暗褐色から黒色土が入り、最後に粘土で平らにならされ、その直上に黒褐色土が入っている。黒褐色土は雨水などの影響で窪地に堆積したもの或いは、宝永火山灰(1708年)を含む可能性がある。その上には暗褐色土・表土が80cm程堆積している。

Bトレーナーでは、規模はAトレーナーの部分とほぼ同一であるが、やや浅いのはAトレーナーにかかる部分が土壌B・B'間の虎口手前という要部分であるためであろう（後述）。埋土は土壌B側から粘土または粘土質土、次にロームブロックを多く含む黒褐色土、同時にII郭側からローム主体の明褐色土が入れられ、次にII郭側から黒褐色土、白色粘土質土などが入れられて、最後は暗褐色土で平らにされている。また、その直上にやや暗い層が厚さ20cm程堆積しているが、Aトレーナーと同様、雨水などによって窪地に堆積したものだろう。その上は厚さ約80cmの暗褐色土と表土が堆積する。



第39図 C・D・斜面部トレンチセクション

Cトレンチでは、肩部からの急激な斜面を検出したのみであった。ここではSH2の上幅は4.7mである。土壘B'、土壘Cについては共に基底部の地山のカットおよびA・Bトレンチでも確認された斜面の段およびその上の盛土が検出されたが、土壘の盛土は存在しなかった。両者共にこの部分では緩やかな斜面となっていることから、恐らく盛土はSH2の埋め立てに使用されたものと考えられる。

土壘B・B'の斜面に形成された壇状遺構は、伴う遺物も無く、何らかの用途で使用された痕跡が無く、SH2が埋め立てられる最終段階で粘土を削り出した結果と考えられる。

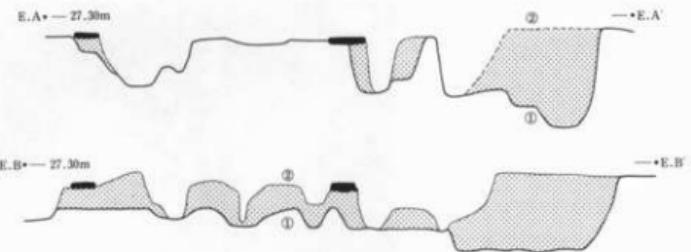
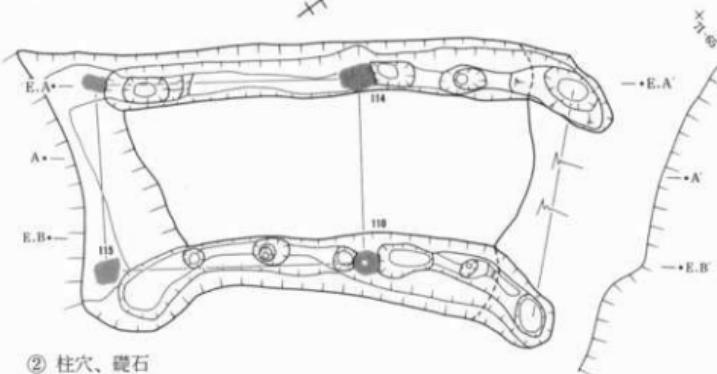
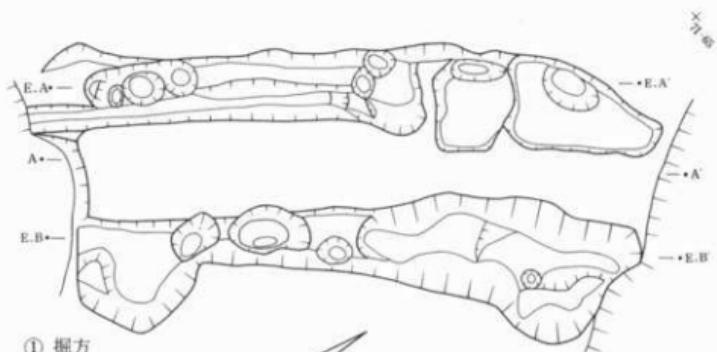
遺物は、中央部に集中し、特に縄文土器片は2,350点、土師器片は537点と多く、また、古墳の主体部の副葬品であったと考えられる直刀が出土し、埴輪片は1点も出土していないことから、土壘Bを構成する黒色土中の遺物が入ったものと考えられる。また、中世の遺物は主にII郭側から人為的に入れられた土に大量に含まれ（カワラケ片25、内耳鍋片40、瓦質土器片19、瀬戸・美濃産陶器片12、常滑産陶器片4、銭貨3点など）、その上の自然埋没の土中からは寛永通寶が出土している。人為的埋土の中からは中世以前の遺物しか含まれていないことから、この堀が埋められた時期は、下っても17世紀初頭以前と考えられる。

#### 斜面部（SH2'・SH1・他）（第37、39、40図、図版8）

SH2の続きとして幅3.5mで壁が垂直に落ちる空堀（堅堀 SH2'）が検出されたが、1m程下げたところでボーリングステッキで確認した結果はさらに1m以上深く危険なためそこで止めた。東側では堀底幅が約10cmと、台地上よりさらに薬研状のSH1が傾斜してきており、西側にも同様な空堀が検出された。II郭の南側には地表面でも空堀の存在が想定できたが、SH1の連続としてII郭南部斜面下を巡っていると考えられる。また、II郭側SH1の外側に白色・灰色・褐色粘土を20~50cm、I郭側SH1の外側にも白色粘土・黒色土・暗褐色土を積んだ50cmの低土壘が検出された。また、SH2'の両側には幅1.5m前後の地山砂層があることから、SH1掘削時に掘り残されたものと考えられる。ここからはSH2'の存在に合わせてSH1が掘削されたとみられるが、台地上のSH2とは形態が異なることから、或いは虎口施設がSH1と同時に造られ、後でSH2'に連続したものとも考えられる。覆土はSH2'が自然堆積とみられる表土・暗褐色土約70cmの下に人為的埋土とみられるロームブロックを多く含む黒褐色土・暗褐色土があるが、その中に東西2mの硬化した層が存在しており、埋めている過程でなんらか



第40図 斜面部調査風景



第41図 SF 1

の重圧がかかってできたものと推定でき、或いは人夫の通路であった可能性がある。その下の左右にある黒色土以下も推定される深さから考えて人為的埋土の可能性が高い。なお、SH1については下層に白色粘土または粘土質土が、上層は粘土や黒褐色土が堆積しており、外側土壌と土壌B'・Cの盛土の流れ込みと考えられる。

#### S F 1 (第41図、図版11)

土壌BとB'の切れ目に検出された虎口施設である。土壌の壁は高さ1m程ほぼ垂直にカットされて、表土下からは上面がやや硬化した、ロームブロックを多く含む暗褐色土の通路部分(幅約1.8m(2間))があり、両側に幅約50cmのロームブロックを含むがやや暗い土からなるプランが検出された。プランの下約40cmの高さで黒雲母片岩製の厚く平らな石(古墳石棺材の板磚再利用)2枚、茶白の台部1、河原石1が2.5m×3.6mで検出された。さらにその下から西側でピット4基と溝状遺構、東側でピット6基の柱穴列が検出された(第41図①)。一方、通路部分は20cm程下から非常に硬質な灰から灰褐色砂質土層(厚さ10~15cm)が検出された。柱穴列の掘方の覆土はロームブロック主体の黄褐色土であり、通路部分はII郭側では幅約1.3mで長さ4m程、I郭側では幅60~90cmで長さ3m程と異なり、柱穴掘方もII郭側の方でより大形のものが2本ずつで、やや主軸も異なる(第41図②)。

以上から次の様な建て替え・改造が行われたことが推測される。

1期、I郭側に大柱穴を有する二脚または四脚門

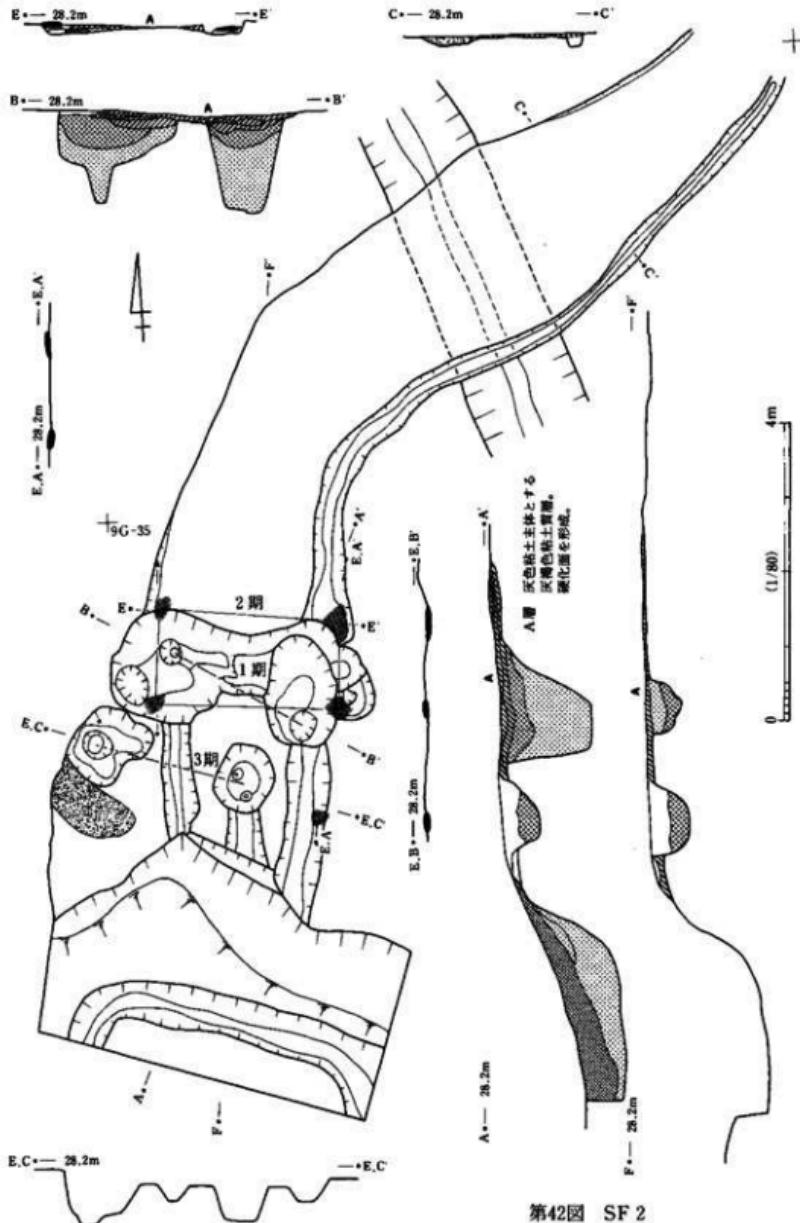
2期、II郭側に礎石柱四脚門と棚列と硬化面の通路

3期、盛土の硬化面の通路

或いは2期と3期は同時期の可能性も考えられる。

#### S F 2 (第42図、図版12)

表土を除去した段階で土壌CとD'の切れ目部分からII郭上を北北東に5m、若干右折してSD2の覆土上をまたいで、北東(II郭のSH2への突出部)に約8mにわたって、幅2~3mで灰褐色粘土質土の硬化面が帯状に検出された。これはその形状・方向から恐らくII郭の門から入ってI郭へ行く通路と考えられ、深さ5~10cmの帯状の掘り込みの上に2~5cmの厚さで敷かれていた。さらにその南端部で偏平な石(20~30cm)が5つ検出された。北部の4つ(黒雲母片岩・石棺材か)の中心を通る線はほぼ長方形をなし、四脚門の礎石に推測される。東西間隔は2.2~2.3m、南北間隔は1.1~1.2mであり、南東の1個(泥岩)に対応するものは検出されなかった。東側の3個の石は直線的に並ばないので、或いは北部の4個とは別の性格のものかもしれない。トレーナを入れ、さらにベルトを残して調査した結果、硬化面を切って掘り込まれた上端径80~100cm、下端径20~40cm、深さ約80cmの柱穴が2基検出された。覆土は下層がロームブロックを多く含む暗褐色土で、上層が白色粘土を小量含む暗灰褐色土であり、柱は抜かれたものと考えられる。



第42図 SF 2

また、東側の柱穴の端からII郭の端の肩部までの50~80cmに幅約40cm、深さ15cm程の溝状の掘り込みが検出されたが、西側については擾乱のためか検出できなかった。また、北部の硬化面の下からは上端径1~1.2m、下端径約30cmのやや大型の柱穴が検出された。覆土は下層がロームブロックを主体とする暗褐色土、上層がロームの微粒からブロックを多く、白色粘土を少量含む暗褐色土で、最上部には硬化面の粘土が10~20cm入り込んでいた。壁は凹凸が激しく、柱を抜かれた際にあらためて掘り返されて埋められたものと考えられる。なお、この2つの柱穴の南端部からも幅40~50cm、深さ25cm程の溝状の掘り込みが検出された。これは柱穴の北に伸びる硬化面の下から東側で顯著に検出されており、これらは柱穴に伴うもので、排水溝または板塀施設の跡と考えられる。

これらの門跡と考えられるII郭南端部の斜面は門跡に対応する様に内側にカットされ、II郭の肩から1.2m程下に幅約30cm、深さ数cmの溝状の掘り込みと平場が検出された。この溝状の掘り込みと同様の施設はSF1の土橋側でも検出されており、同様な排水施設かと考えられる。なお、斜面部で検出されたII郭南側も巡ると推測されたSH1は検出されなかつたが、恐らく、SF1同様にこの部分に土橋が存在するのではないかと考えられる。

以上から次の様な建て替え・改造が行われたことが推測される。

1期、北側に大柱穴を有する掘立柱二脚門と排水溝

2期、1期の柱穴を埋めた粘土敷硬化面通路と礎石柱二脚門

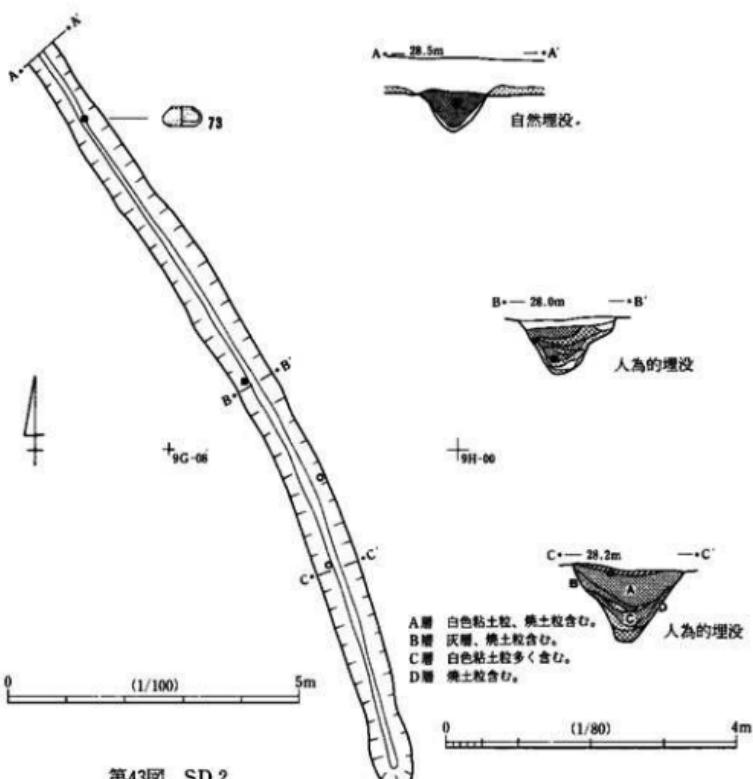
3期、南側に小柱穴を有する掘立柱二脚門

これはSF1と基本的に改造方法が一致することから、時期的にも対応するものと考えられる。

つまり、1期の掘立柱二脚門から2期では礎石柱門と粘土敷硬化面が造られ、3期では破壊されたか簡易な施設になっていることから、当城の最盛期が2期にあること、SF1では2期以降I郭側からII郭側に門の位置が移動していることから、郭の優位性がII郭からI郭に変更されたことが推測される。それはSH2が掘削され、さらに土壘C・土壘Dが盛土されたことによって推測されたII郭からI郭への優位性と発展的繩張構造への変化と一致するものであり、いずれも同時期の改造であることが考えられる。また、3期はSH2が埋め立てられた時期ではないかと考えられる。

#### S D 2 (第43図、図版16)

II郭の北端から土壘Cまでかかる幅約70cm、深さ60cm~1mの、断面が薬研状を呈する溝状遺構である。既にカットされているが、1984年のII郭北部のトレンチ調査においても検出されている。深さは北から南に徐々に深くなり、底の標高も27.5mから26.7mと低くなる。覆土は北部で黒色土が自然堆積しているが、南部は粘土や灰を含む人為的埋土である。Aトレンチの調査結果からは、SD2が古い時期の低い土壘Cの上から掘り込まれ、その後、土壘C上に積



第43図 SD 2

まれた粘土・ロームなどが同時にSD 2に入れられたこと、さらに、SF 2の通路がSD 2を埋めて造られていることが明らかとなった。これにより、SF 1・2の1期、土壙C・Dの低い時期或いはそれ以前に機能したことが推定される。薬研堀の形状を呈するので一応築城遺構と捉えた。また、SD 2に添う様に植栽痕と考えられる不定形の穴が多く検出された(図版16)が、AトレンチでSD 2の上部で検出された溝状浅い掘り込みがII郭上でもSD 2上に近世以降の畠耕作に關係する溝として存在したものと考えられ、図示はしていない。

## (2) I郭上の遺構

本節ではI郭上の平場と土壙A・A'の下から検出された遺構を扱う。I郭上では掘立柱建物跡・土坑墓・地下式坑を含む多くの土坑群が重複して検出された。

### 土壙A下の遺構（第44、45図、図版13）

土壙A下からは掘立柱建物跡・土坑群が検出された。

**S B 1** 柱穴SK12, 27, 17, 15から構成される1間×1間（約2.6×3.8m）の掘立柱建物跡と考えられる。主軸はN-8°-W。柱穴は上端径1m程度でやや東西に長く、下端径は50cm程度、深さは約1mである。なお、遺物はSK2と27から出土した常滑窯が同一個体で、SK27と17から出土した天目茶碗が接合したことから、やや主軸はずれるが、SK2, 3を含めた2間×1間の掘立柱建物跡の可能性も考えられる。

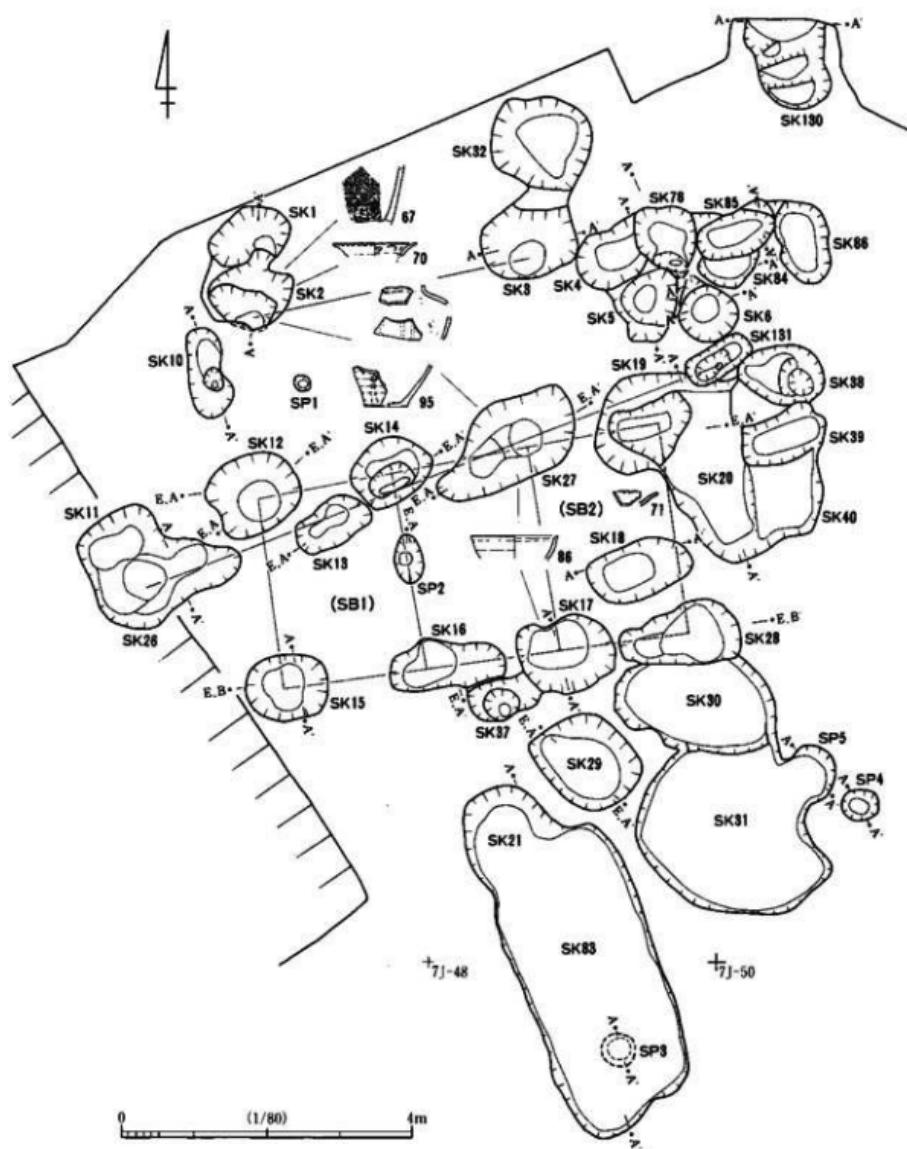
**S B 2** 柱穴SK14, 19, 28, 16から構成される1間×1間（約2.6×3.6m）の掘立柱建物跡と考えられる。主軸はS B 1とほぼ同じで、一直線上に並ぶので同一の建物跡のようにみえるが、柱穴の上端径が60~80cmで下端径もより東西に長く、深さも60~80cmとやや規模が小さいことや柱穴間距離から別の建物跡と判断される。主体としてSK2, 3を合わせた2間×3間の掘立柱建物跡（約5.0×5.5m）と考えられる。主軸はN-8°-W。

**S B 3** 少なくとも、一直線上に並ぶ柱穴SK26, 13, 27, 131から構成される棚列あるいは掘立柱建物跡と考えられる。主軸はN-30°-W。柱穴は上端径60cm前後で東西に長く、下端径は30~40cm、深さは60~80cmでS B 1, 2よりも細い柱であったことが推定される。

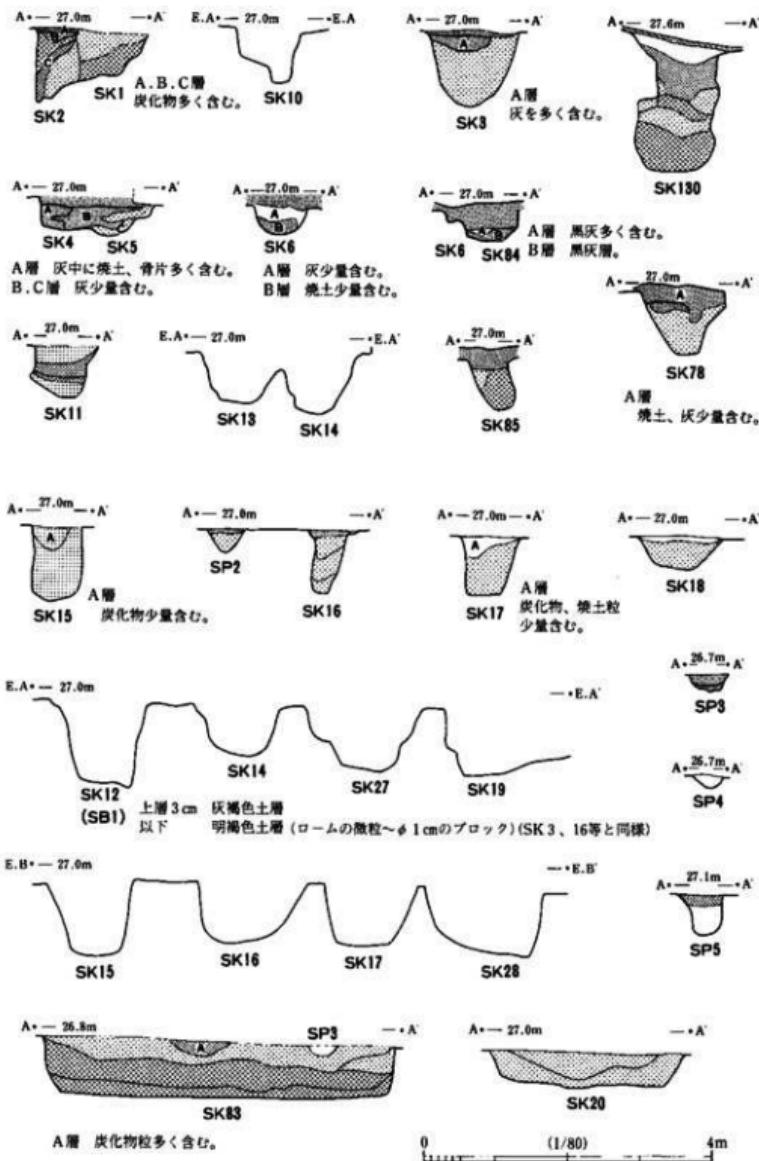
以上の柱穴跡の壁は凹凸が激しく、覆土はロームブロックを主体に一気に埋められており、最上層には灰や炭化物が混入する灰褐色土が入り込んでいた。新旧関係は不明であるが、土壙A構築の際に東西方向から周囲を掘り返して柱を抜いた後に埋め戻したものと考えられる。

**土坑墓** S B 1の北東側に集中するSK4, 5, 6, 78, 84などは覆土に灰・焼土を含み、特にSK4には風化した骨とみられる灰白色の粉が混入しており、火葬骨を埋葬したものと考えられる。

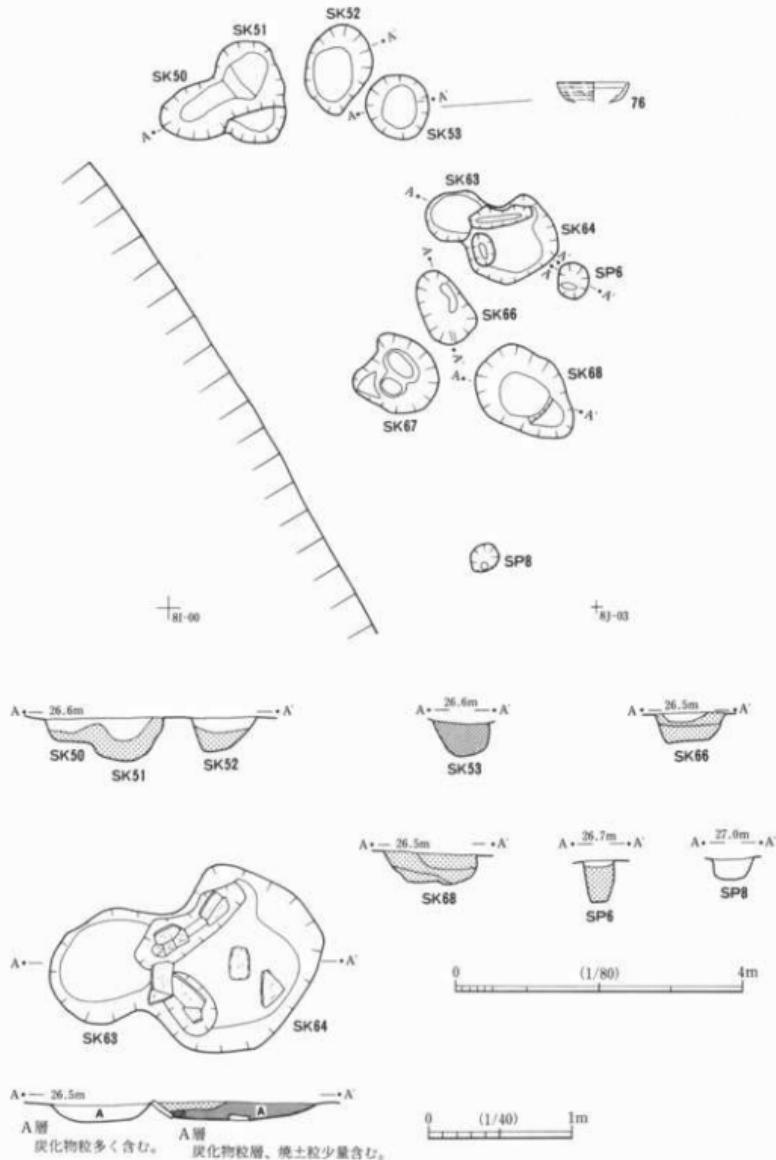
その他の土坑 SK20, 40はSK19, 38, 39と切り合っているが、同様に覆土はロームブロック主体の黄褐色土であり、これらも最終的にはS B 1同様に埋められている。南側のSK21と83は土壙AとA'の切れ目にあたる箇所であり、覆土は下層がロームを多く含む暗褐色土、上層がロームを多く含む明褐色土で、同様に切り合は不明であるが、小形のピットSP3はSK83が埋められた後に掘られている。SK30, 31は深さ30cm程の浅い土坑で、覆土はロームブロックを多く含むものであるが性格不明である。他に小形の浅いピットが数基検出されたが、特に並ぶこともなく、性格は不明である。SK130は土壙Aの上から掘り込まれたもので、I郭の端に位置しており、斜面崩壊を防ぐためその先は調査していないが、さらに深くなるようである。覆土は下層がロームブロックを多く含む暗・黄褐色土、上層は黒褐色土であり、埋められ



第44図 1 郭上遺構 (1)-1



第45図 I 郭上遺構 (1)-2



第46図 1 郭上遺構 (2)

ているが、恐らく近世以降の地下室の入口部分ではないかと考えられる。

#### 土壙A'下の遺構（第46～48図、図版13、14）

土壙A'の北端部の下から検出された遺構群には、板碑が多く出土したSK64とその周囲の土坑があり、SH1側にくびれた部分（I郭平場上）には方形の土坑2基、南部には浅い溝状遺構にピットをもつSX2、大形方形土坑SK98、方形土坑SK99などが検出された。

**SK64** 径1～1.3m、深さ12cm程の不整円形で、覆土は焼土を含む炭化物粒である。また、絹雲母片岩、黒雲母片岩の板状の石片が溝状の掘り込みに刺さるように入っていた。銘は存在しないが、起立していた板碑が倒れた状態ではないかと考えられる。また、西側に接するSK63の覆土も炭化物粒を少量含む暗褐色土であり、関連が考えられる。

**SK64周辺土坑群**（SK50, 51, 52, 53, 63, 66, 67, 68）直径5mの円を描く様に環状の群を呈するが、性格は不明である。上端径70～100cm、深さ40cm前後、覆土はロームブロック主体の明褐色土である。

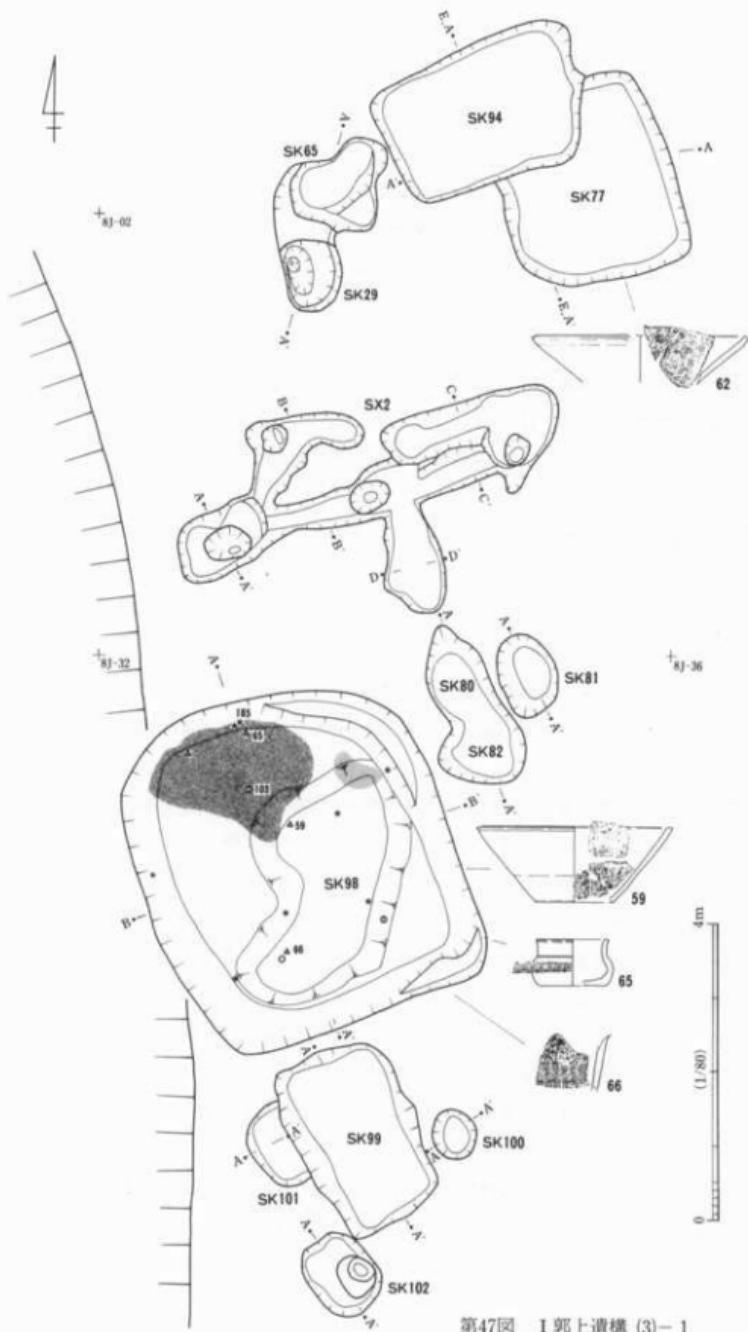
**方形土坑（SK94, 77, 99）** 1.7～2.4m×2.4～2.8m、深さ40～50cmの長方形である。SK77はSK94を切っている。覆土はSK77の下層がローム粒を多く含む明褐色土、上層が暗褐色土、SK99は炭化物粒を多く含み、下層が灰暗褐色土、上層が暗褐色土で、境界に炭化物粒層が入る。

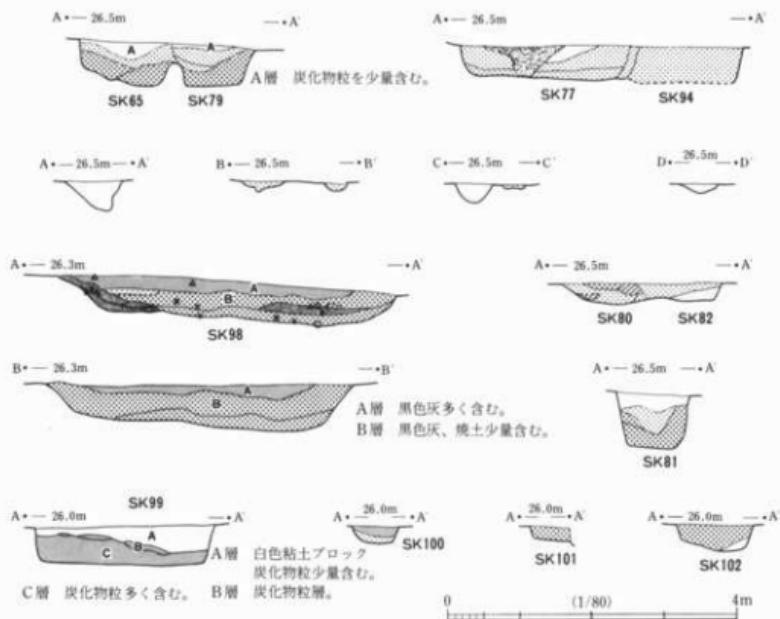
**SX2** 幅40～50cm、深さ10cm程の浅い掘り込みで、東西は6.8mある。また、南北に若干延びる部分がある。東西方向には約2.1m間隔で深さ20～40cmのピットが3基並ぶ。覆土はローム粒を多く含む明褐色土である。

**SK98** 4.4×4.7m程の隅丸方形で深さは50～60cmの土坑である。東側の壁には若干の段があり、床の一部がわずかに低い。覆土は北側の斜面から床にかけて焼土があり、他は、下から炭化物、焼土、黒色灰を含む暗褐色土である。また、中世の遺物は、瓦質捕鉢・瓦質香炉・鐵貨・鐵釘などと比較的多く出土した。壁は熱を受けている様子はなく、焼土・灰などは遺物とともに廃棄されたものと考えられる。

**SK98周辺の土坑** SK65, 79は覆土最上層に炭化物粒を含むが、他はローム粒を多く含む明褐色土である。SK80は覆土中に白色粘土を多く含む灰褐色粘土質土層があり、他はロームを多く含む明褐色土である。SK100, 101, 102も覆土にロームブロックを多く含むものである。これらは埋められているものと考えられる。なお、SK98周辺は土壙A'下の標高がやや低く、遺構の底付近で既に地山の白色粘土がのぞく。

土壙A・A'下から検出された遺構群は、I郭上が築城の際に削平されて土壙が築かれる前の段階の遺構群と仮定するにしては、掘り込みが深い。或いは、土壙A・A'が構築される以前に台地を削平した区画の中に遺構が形成される台地整形区画であった可能性も考えられる。



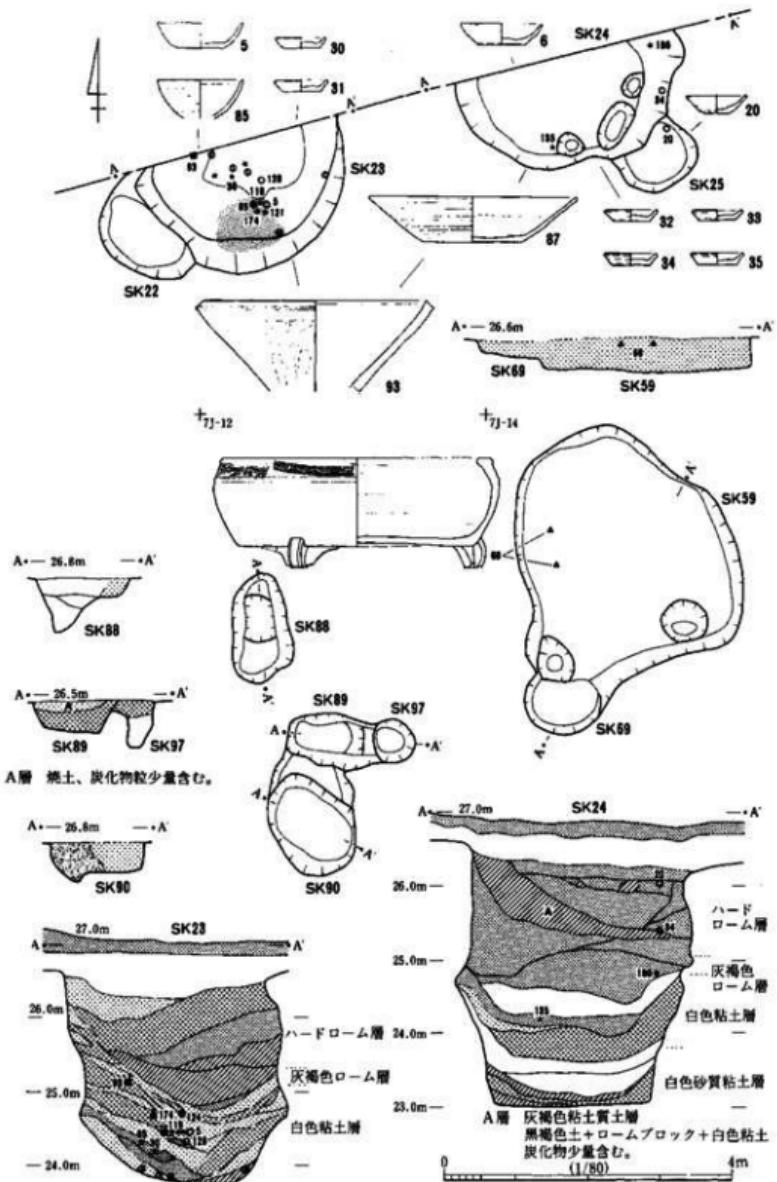


第48図 I 郭上遺構 (3)-2

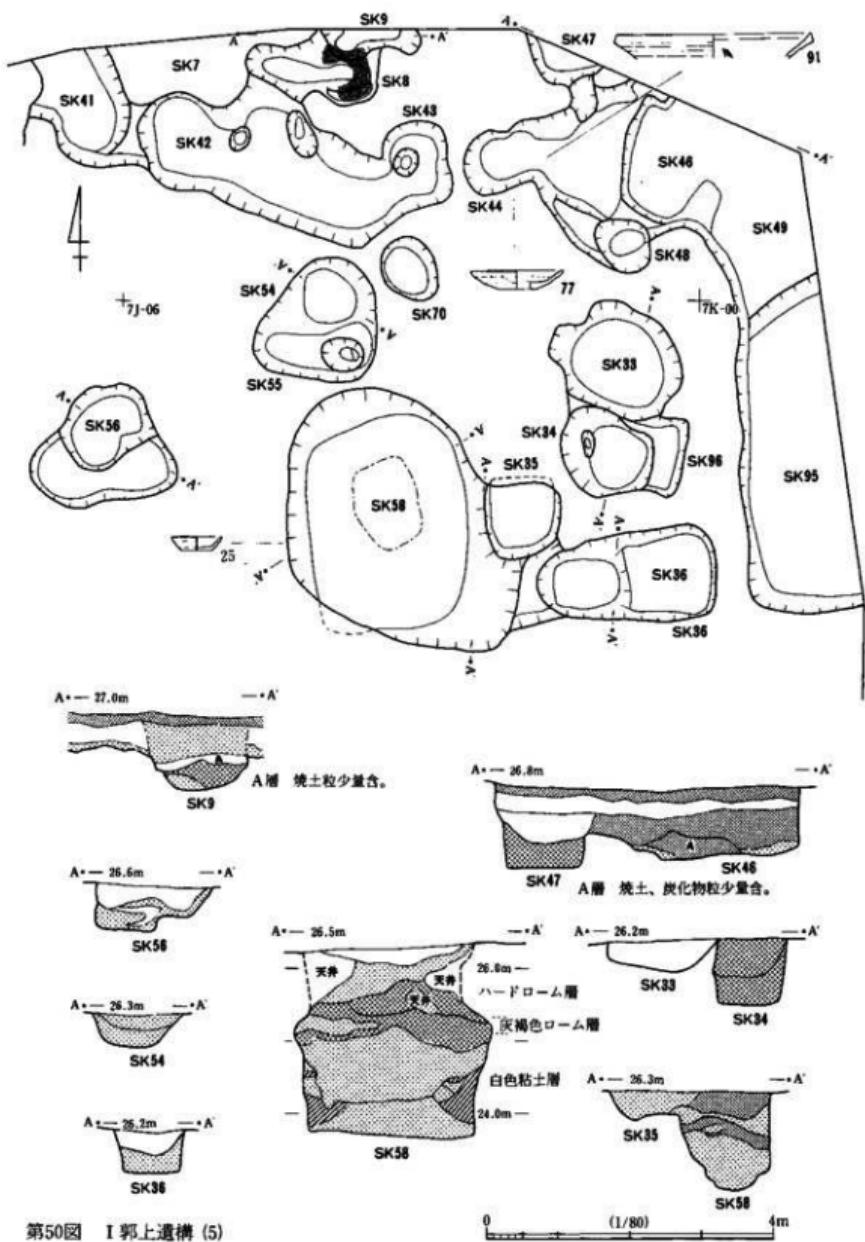
### I 郭平場上の遺構 (第49~51図、図版13, 14)

**地下式坑** I郭の北縁部にSK23, 24の2基の地下式坑が検出されたが、斜面の崩壊防止のため、入口側の半分のみの調査となった。また、どちらも郭面からの掘り込みで、平面形が円形で天井部ではなく、覆土中にもその崩落の痕跡はなかった。

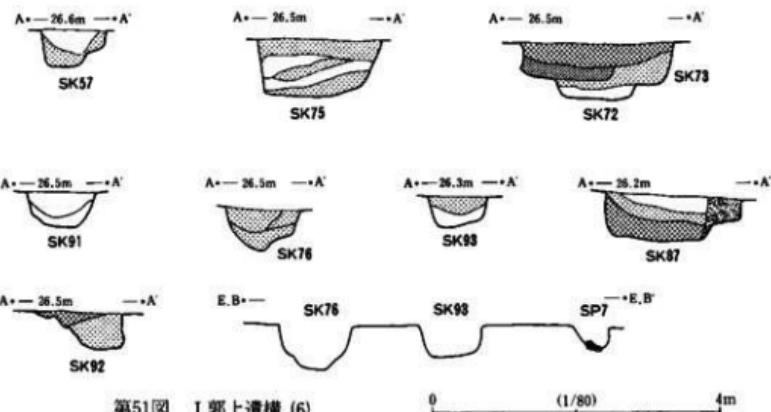
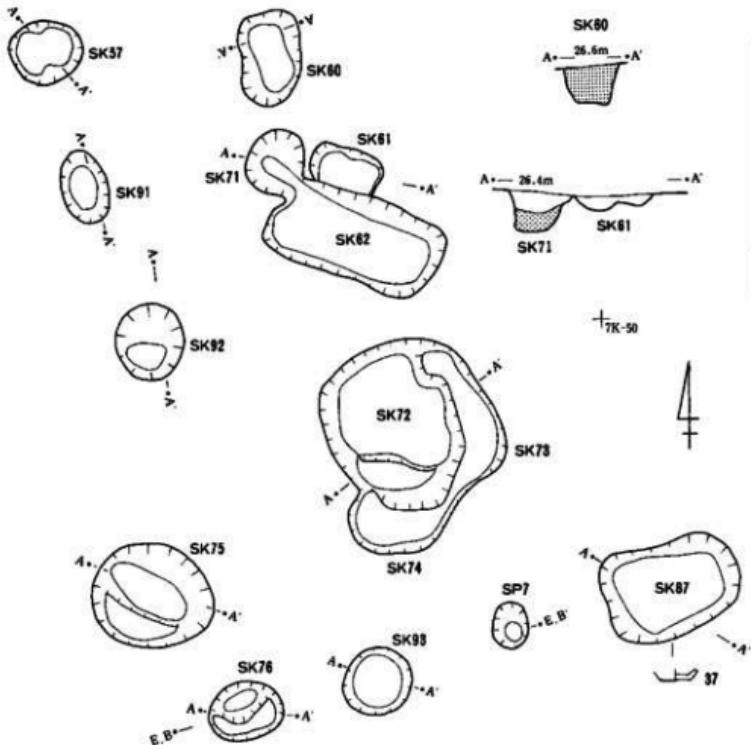
**地下式坑SK23** 入口が主体部の南西部に位置し、主体部底の径が約2.4m、深さは約3.0m、入口部の幅は約1.4m、深さは70cmである。入口部から主体部底への施設はない。主体部の断面形は直またはオーバーハングして下がり、底から90cm程の高さで若干外側へ張り出し、底部は丸みを持ち、壁との境が不明瞭である。覆土は最下層に自然堆積とみられる黒色土と白色粘土ブロックからなる黒灰色土が10cm程あるが、その上は郭面近くまで2段階の人为的埋土である。まず約1mの厚さでロームブロック主体の黄褐色土とロームブロックを多く含む黒褐色土が西上（入口部）から入り、次に東側の窪みから白色粘土ブロックを多く含む黒褐色土・ロームブロックを多く含む黒褐色土が入っている。人为的埋土の中央部が郭面から30cm程沈んでいるのは郭（城）の機能した最終期に窪みが残っていたためと考えられる。遺物は縄文土器、礫、土器、埴輪の他、中世の遺物も比較的多く、カワラケ、瀬戸・美濃陶器、木製椀に塗られていたと考えられる漆片などが第1段階の埋土中から集中して出土しており、土壙A'下のSK64に



第49図 I 郭上遺構 (4)



第50図 I 郭上遺構 (5)



第51図 I 郭上遺構 (6)

0 (1/80) 4m

関係する可能性がある網雲母片岩片が底近くから出土したことから築城に伴う台地の削平時に埋土と共にに入ったことが考えられる。

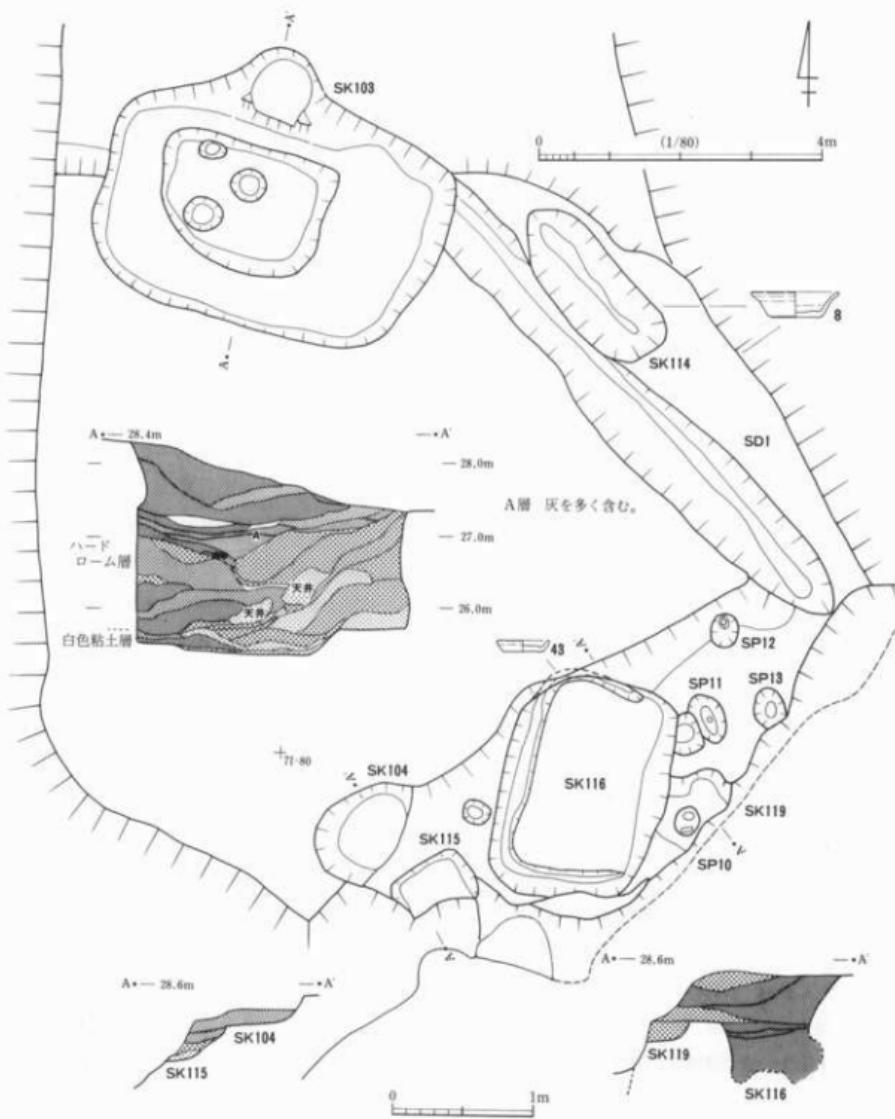
**地下式坑 S K 24** 入口が主体部の南東部に位置し、主体部底の怪が推定2.1m程、深さは約3.6m、入口部の幅は約1m、深さは約40cmである。主体部底の入口部下に深さ約30cm、両脇に深さ約10cmのピットがあり、出入口施設と考えられる。主体部の断面形は直またはオーバーハングして下がり、底から1.6m程の高さで若干外側へ張り出し、以下はややすばまり、底部はフラットである。覆土は最下層に自然堆積とみられる白色粘土粒や黒色土が20~50cm程あるが、その上は郭面レベルまで2段階の人为的埋土である。まず約2mの厚さでロームブロックを多く含む黒褐色土・暗褐色土が主に西側から入り、次にやはり西側から白色粘土・ロームブロック・黒色土からなる灰褐色粘土質土が入り、その上にロームや粘土を含む黒褐色土が入っている。出土遺物はS K23と同様だが、中世の遺物は、他に内耳土鍋、瓦質土器、常滑鉢などが第1段階の埋土中から集中して出土しており、同様に築城に伴う台地の削平時に埋土と共にに入ったことが考えられる。

**地下式坑 S K 58** I郭北東部に位置し、床の平面形が隅丸方形(2.2×2.8m程)で、深さは2.4~2.6m、入口部は東側にある。天井が一部残存していたが崩落防止のため崩した。断面形は天井部の床からの高さが推定1.8mで、底はほぼフラットである。覆土は底から約40cmの厚さで大型のロームブロック主体の黄褐色土があり、その上の壁際に白色粘土の崩落層があることから、天井部と壁の崩落と考えられる。壁の一部の張り出しが崩落によるものであろう。粘土の上には、厚さ80cm程のロームブロック主体の黄褐色土、その上50cm程はロームブロックを多く含む黒褐色土、その上にロームを多く含む明褐色土があり、これらは人为的埋土と考えられる。最上部の約20cmには暗褐色土が堆積する。中世の遺物は少量のカワラケ・常滑甕片が出土した。

**S K 59他** S K24の南側に検出された、約3.0×3.3mの不整形、深さ約40cmの土坑である。南側壁際に深さ約20cmのピットが存在する。南西部に径1m程、深さ約20cmの掘り込みがあり、重複の可能性があるが、いずれも人为的埋土とみられる分層できないロームを多く含む明褐色土であり、S K59の上層からは瓦質火鉢の1/3個体が出土した。この火鉢の破片はS H 2の埋土中からも出土しており、空堀と同時期に埋められたことが考えられる。

**S K 88他** S K59の西側に検出された4つの小土坑である。S K88, 89の上層は炭化物粒を少量含む層である。

**I郭北東部の遺構群** 調査区境にはS K42, 49, 95などの深さ約40cmのやや大形で不整形な土坑が検出された。覆土は黒褐色土で、遺物は埴輪片が多く、中世の遺物はカワラケ、瀬戸・美濃陶器が少量出土した。S K47はS K46を中世郭面で切っており、S K 9は表土直下から掘り込まれて、S K 8を切っており、近世以降のものと考えられる。



第52図 土壌B下遺構



第53図 SK103遺物分布

SK8, 48 SK8からは焼土、炭化物と共に粉状の骨片が検出され、火葬墓と考えられる。近世以降のSK9と時期は不明のSK7に切られている。骨は総重量587gで、犬歯の大きさから子供のものと考えられる。また、SK48からも火葬骨片が41g出土している。

I 郭中央部の遺構群 I郭北東部の大形土坑群が形成する逆L字形の南側に納まるように約9m×15mの範囲に多くの土坑が並んで検出された。径1m前後、深さ50cm前後の円形土坑(SK54, 56, 70, 57, 91, 92, 60, 71, 61, 74, 76, 93)・やや大形の土坑(SK33, 62, 72, 73, 78, 87)・ピット(SP7)からなる。掘立柱建物跡ではないと考えられるが、ほぼ規格的な配列があり、主軸はN-13°-Wである。覆土はローム主体の明褐色土もしくはロームを多く含む暗褐色土である。やや大形の土坑はSK33が径1.4m、深さ40cmで覆土は暗褐色土、SK62は約1.1×2.4mの方形で深さは約60cm、SK72, 73, 74はさらにもう一つの土坑が切り合っており、セクションラインでは下端径約1mのSK72(暗褐色土)が最初で、次に下端径約1.5m以上のSK73(ローム微小粒主体の黄褐色土)、最後にもう一つの下端径約1.3mの土坑(ローム微粒を多く含む黒褐色土)が切っている。SK75は径1.5m程、SK87は1.2×1.9mのやや方形でいずれもロームブロック主体の明褐色土とロームの少ない暗褐色土の互層である。また、SP7は底に切石が入っており、柱の根石と考えられるが、対応するピットは検出されなかった。

### (3) 土壙B・B'下の遺構

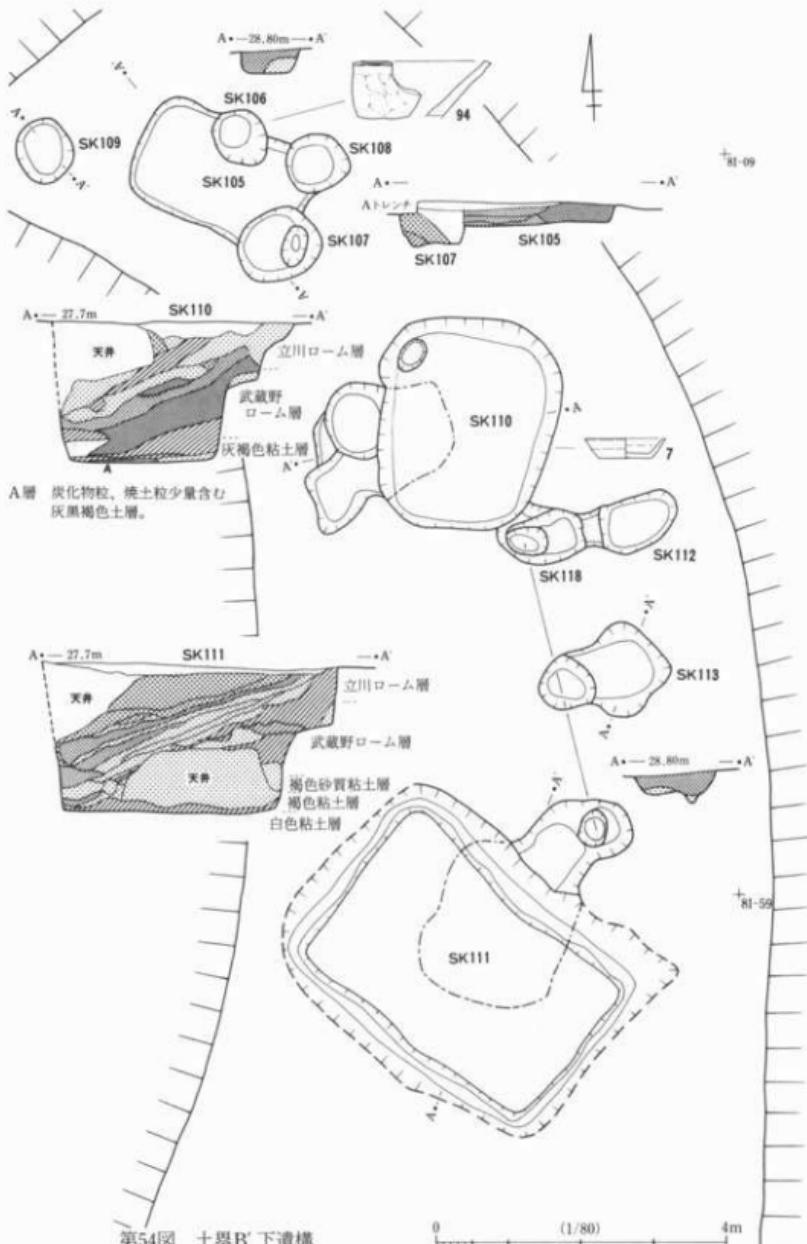
#### 土壙B下の遺構 (第52, 53図、図版15)

土壙Bの南部では黒色土の盛土の下に旧表土があり、縄文土器・土師器の包含層を調査したが、ソフトローム層上面（標高28.5m程）では遺構は検出されなかった。しかし、その部分を残して囲む様に中世遺構が検出された。北側は標高27.4m程でローム層が検出され、旧表土面の標高29m程から推定すると1.5m程削平されたことになる。

**地下式坑 SK103** 入口部が北東にあり、主軸はN-15°-E、主体部は約3×4.8mの隅丸方形、削平面からの深さは約2m、入口部は径1m程の円形で深さは約1.6mである。天井部はほとんど崩落しているが、南側壁に残る痕跡から、ロームの厚さで約90cm、旧表土からは約180cmに推定される。覆土はまず、ロームや白色粘土からなる明褐色土が10~40cm、主体部奥に黒色土が薄く乗る自然堆積があり、その上に入口から奥へロームを多く含む暗褐色土が入り、次に天井部の落下と南側を中心に黒色土やロームブロックを多く含む黒褐色土が一気に埋められ、厚さ10~40cmの灰が平らにならすように一面に入り、最後に土壙構成土としての黒色土や黒褐色土が乗るという4段階が考えられる。このことから、土壙B南部が中世の塚として存在した段階で北側からその下に掘り込まれ、築城に伴う削平によって天井部が落とされ、塚の構成土である黒色土が主に落とされたことが考えられる。遺物は縄文土器・土師器をはじめ、中世の遺物も大量に出土した。埴輪は出土していない。中世の遺物は全て第3段階の埋め立ての土の中にあり、地下式坑に伴うものは検出されなかった。塚の盛土に伴うものが中心であるが、それ以外（表土）からとの考えられるものも多い。15世紀前半を中心とするもので、16世紀に下るものはない。

**溝状遺構 SD1他** 南部の溝状遺構SD1が検出された。上幅1m前後、深さ約50cmの断面三角形で、覆土はロームを多く含む明褐色土(Bトレンチ参照)、性格は不明である。また、隣接して幅約1m、長さ約2.6m、深さ約60cmのSK114は覆土がSD1と同様で、中世土師質土器が出土した。

**方形土坑 SK116他** 南東側も高まりの北西側裾部を切る様に土坑・ピットが集中して検出された。覆土はみなロームを含む黒色土・黒褐色土である。ソフトローム層上面から約60cm下に有一段の平場があるが、その高さでSK116の覆土が切れ、その上に黒色土とロームが積まれて土壙が構築されていることから、築城時に塚の南側を削ったものであると考えられる。SK116は2.2~3.0mで、深さは東側の平場上から約1m、底は一辺以外は浅い溝が巡る。SK104は高まりの上から30cm程掘り込まれた径1.2m程の土坑である。SK115は斜面部に検出された一辺約1.2mの方形土坑である。SK119はSK116とSF1に切られている。ピットは平場に集中しており、深さは20~30cmであり、柱穴と考えられる。



第54図 土墨B' 下遺構

### 土壙B'下の遺構（第54図、図版15）

土壙B'の頂部から1~1.5m下の標高27.5~28mのハードローム上で検出された。

**地下式坑SK110** 入口部が西側、主軸はN-5°-W、主体部は隅丸方形で深さ約1.9m、底部が約2×2.5m、入口部には土坑が切り合うが、径約1mの円形で深さは80cm程度である。主体部底はほぼフラットで北西隅に径30~40cm、深さ約10cmのピットがある。天井部は入口側で崩落していたが、反対側で残存しており、残存部から主体部の高さは奥で約1m、中央部で約1.3mであり、入口部に向けて高くなる。なお、天井部は安全上除去した。覆土は入口部からの自然堆積（1.0~2.6m）の上に人為的埋土が載る。前者は底から5cm程の焼土・炭化物を含む灰黒褐色土、最大の厚さ80cmの灰褐色ローム・粘土などがあり、次に厚さ80cm程の黒色土が入る。後者はまずロームブロックを多く含む黒褐色土が10~20cm入り、最後に天井までロームや粘土主体の土が入れられている。遺物は縄文土器・土師器が大量で、中世はカワラケ・瓦質土器・常滑片が出土した。

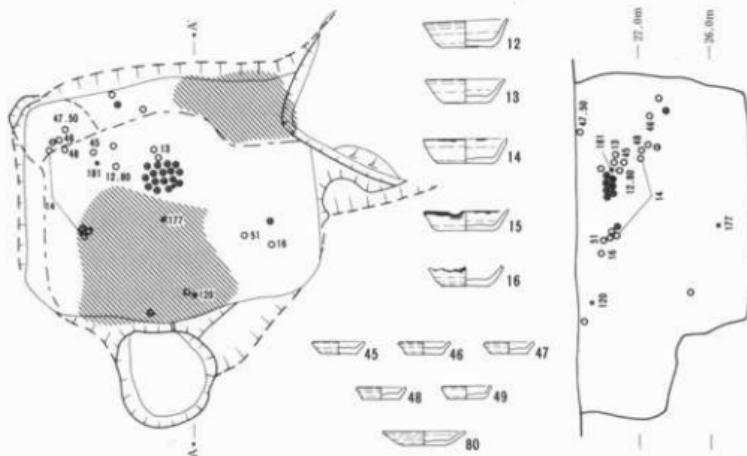
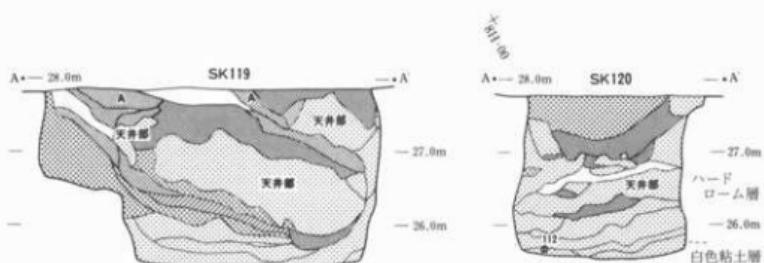
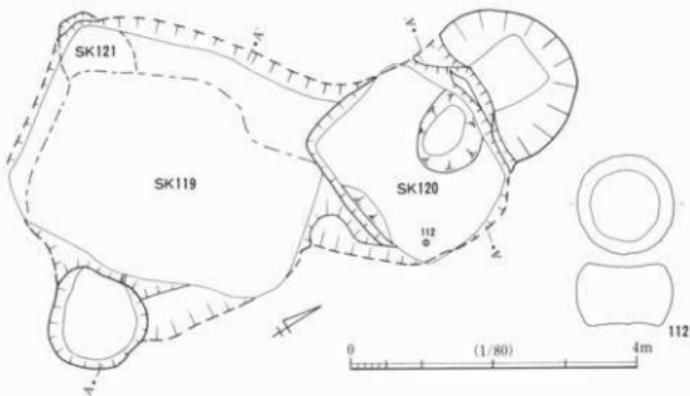
**地下式坑SK111** 入口部は北西、主軸はN-40°-E、主体部はほぼ方形で深さ約2m、底部が約2.8×4.2m、入口部は柱穴が切り合うが、幅・長さ約1mの方形で深さは約80cmである。主体部底はほぼフラットで壁際に幅10~30cm、深さ数cmの溝状の掘り込みが巡る。天井部は中央から入口側でそっくり崩落していたが、反対側で残存しており、残存部から主体部内の高さはほぼ全体に約1mである。なお、残存天井部も安全上除去した。覆土は底から10cm前後の厚さで武藏野ローム層の崩落とみられる灰黄褐色土が堆積し、崩落した天井部の上に入口部から灰白色粘土、次にローム主体の黄褐色土・明褐色土、さらに残存天井部までロームブロックを多く含む黒褐色土が入れられている。遺物は縄文土器・土師器が大量で、中世の遺物は瓦質土器・常滑片が少量出土した。

**方形土坑SK105他** 北部に1.5×2.5m、深さ約20cmの方形土坑が検出され、覆土は黑色土・黒褐色土で、径1m、深さ40cm程の土坑SK109（覆土は暗褐色土）が切っている。このような小形の土坑が土壙B'下に複数検出された。また、SK118、SK113、SK111入口部端にかかる上端径70cm・深さ0.8~1mのピットは約1.8m間隔で直線に並び、掘立柱建物跡の柱穴の可能性が考えられる。主軸はN-15°-Wである。

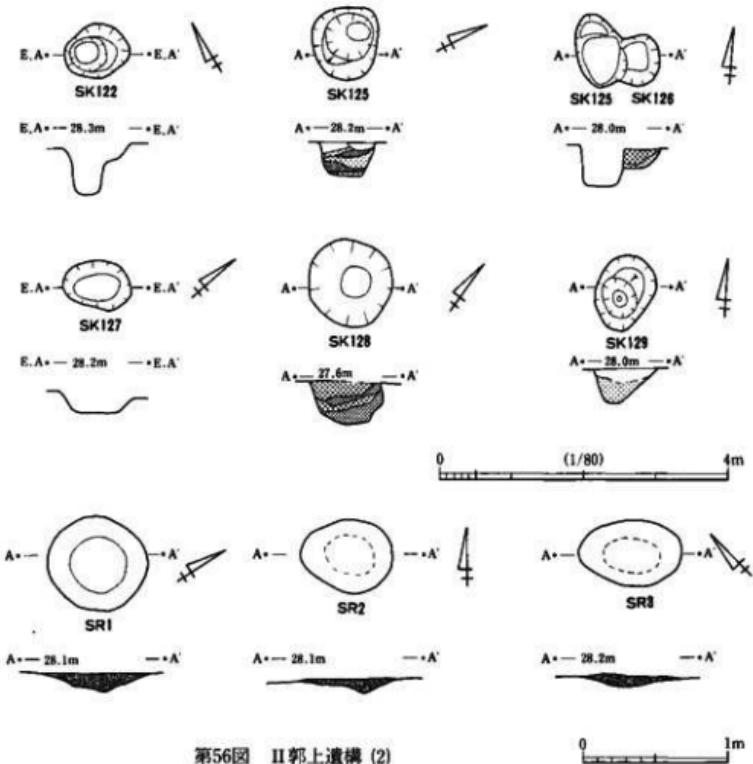
### （4） II郭上の遺構（第55~57図、図版16）

I郭に比べ、中世遺構の密度の薄い地区である。

**地下式坑SK119** 入口部は南東、主軸はS-37°-E、主体部はほぼ方形で深さ約2.4m、底部が約2.4×3.2m、入口部は径約1mの円形で深さは約1.4mである。主体部底はほぼフラットである。天井部は西から北側の壁際で残存していた他は崩落していたが、落ちた天井部から推測される主体部内の高さは約1.5mである。なお、残存天井部も安全上除去した。覆土は底から約



第55図 II郭上遺構(1)



第56図 II郭上遺構(2)

20cmの厚さで灰褐色ローム粒が堆積し、その上20~40cmの厚さで天井部の崩落とみられるロームブロックが堆積した後、入口部から厚さ30cm程の白褐色粘土、さらに30cm程のロームブロックを多く含む黒褐色土が入れられ、その上に天井部が落とされて黑色土や白色粘土が埋められている。遺物は崩落した天井部の上の土中から多く出土し、繩文土器・土師器が大量で、中世の遺物は土師質土器・カワラケが多く、貝もブロック状に検出された。また、中世の遺物は崩落天井部の下の入口部から入れられた土中からも若干出土している。北側に入れられた粘土の範囲は北に切り合うSK120の覆土にも入っていたことから、SK119がSK120より新しいことが確認された。

**地下式坑SK120** 入口部は北北西、主軸はN-10°W、主体部はほぼ方形で深さ約2.5m、底部が約2×2.4m、入口部は上端径約2mの大きな半円形であるが、底は幅80cm程の方形で、深さは約1.9mで、主体部へ降りる壁に小規模な段がある。入口部の下に深さ数cm、径1m程の落ち込みがある他は床はほぼフラットである。天井部はほとんど崩落していたが、崩落した天井

部から推測される主体部内の高さは約1.3mである。覆土は底から50~80cmの厚さでロームブロックを主体とする明・黄褐色土が堆積し、その上に入口部から約15cmの厚さで黒褐色土が入り、その上に天井部崩落層と考えられる厚さ30cm前後の黄褐色土が載り、さらに10cm程の暗褐色土が入り、また天井部の崩落があり、最後に黒褐色土や暗褐色土で埋められている。遺物は崩落した天井部の上の土中から縄文土器・土師器が多く出土し、中世の遺物はSK119に比べて少なく、土師質土器・カワラケは検出されなかった。なお、底から5cm程の高さで五輪塔の水輪部が出土した。

**小土坑** SK119の西側隅上に円形の小土坑が掘り込まれており、中世の遺物はカワラケが出土した。II郭上では他に径約1m、深さ50cm程の円形土坑が数基検出された。覆土はSK125は黒色土とロームブロック主体の黄褐色土の互層であり、128は黒褐色土である。なお、SD2の周囲から多くの穴が検出されたが、不整形で内部壁の凹凸が激しく、覆土も表土が入るような状況であったため、近世以降の擾乱と判断して図示はしていない。

**S R 1, 2, 3** 径50~60cmの円形および梢円形の焼土が入るあるいは被熱した遺構が3基検出された。SR1は焼土が入るが、SR2, 3はローム面が被熱して赤橙色硬化しており、SR3の上面には灰が載る。いずれからも遺物は出土しなかった。古墳時代初頭の堅穴住居跡の炉と同様の形状であるが、周囲から壁や柱穴は検出されず、時期・性格は不明である。

以上、土壙・空堀・虎口部分以外の中近世の遺構数は、掘立柱建物跡4棟、その他の柱穴6基、地下式坑8基、火葬骨検出土坑墓5基、土坑108基、ピット15基である。時期などについては第8章であらためて検討したい。

## (5) 遺 物

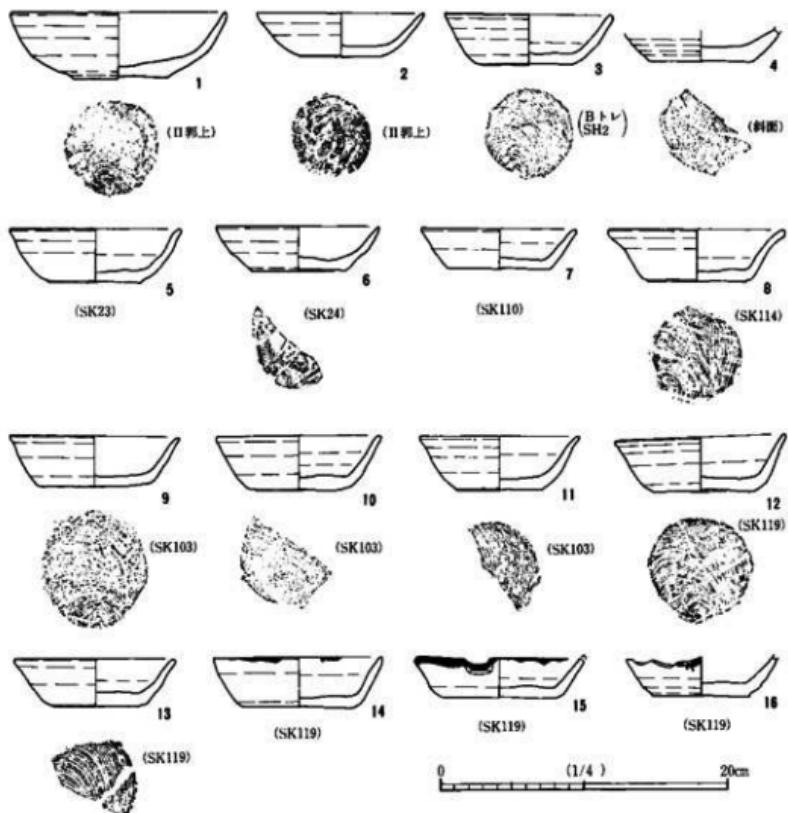
中世の遺物は個々の遺構が埋められた土の中からの出土が多く、逆に遺構に本来伴うものは少ない。また、離れた遺構間の接合あるいは同一個体関係も多いので、種類別にあげ、遺構番号は図中に示した。

①**土師質土器** (第58図、図版21) ロクロ整形、底部回転糸切り無調整などはほぼ同じであるが、大きさがいくつかに分類されるので、基本的に小さなものをカワラケとして扱う。カワラケをあわせた破片数は411点で、土師質土器の推定個体は70個である。

1は口径15cm、底径6.5cm、器高4.5cmで胴部下半がやや膨らむ大形品であるが、2~16は口



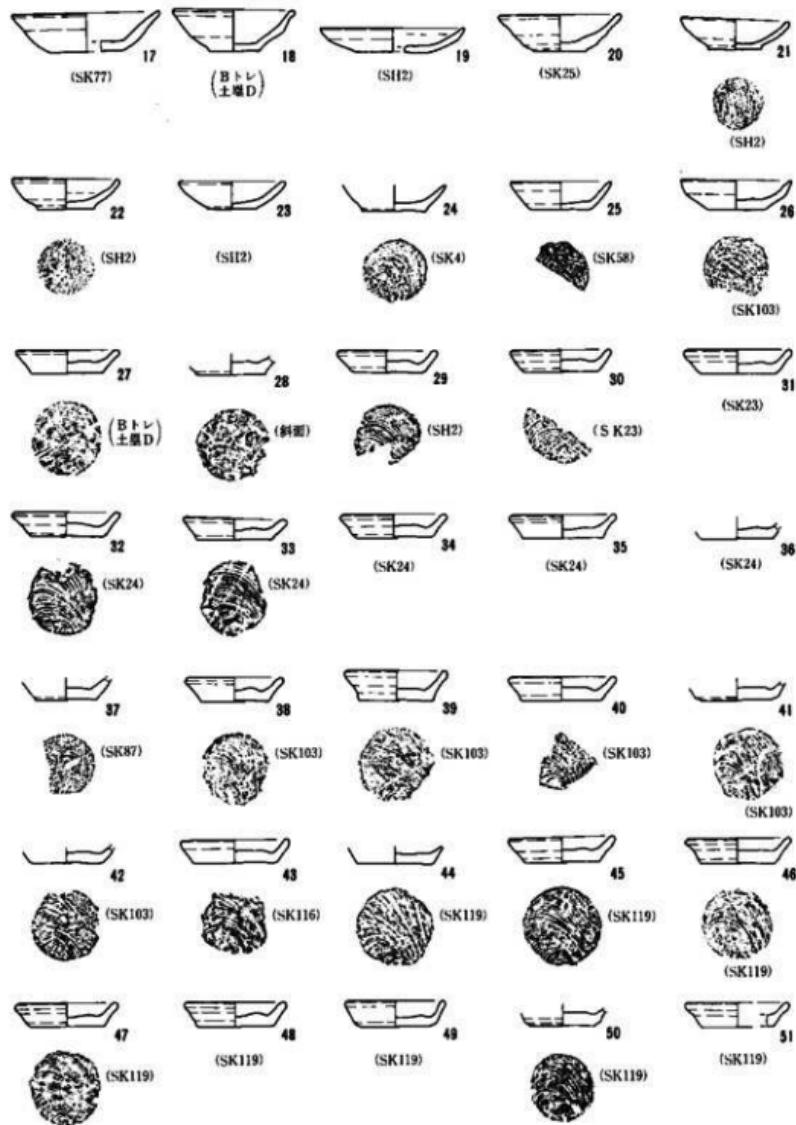
第57図 II郭上調査風景



第58図 土師質土器

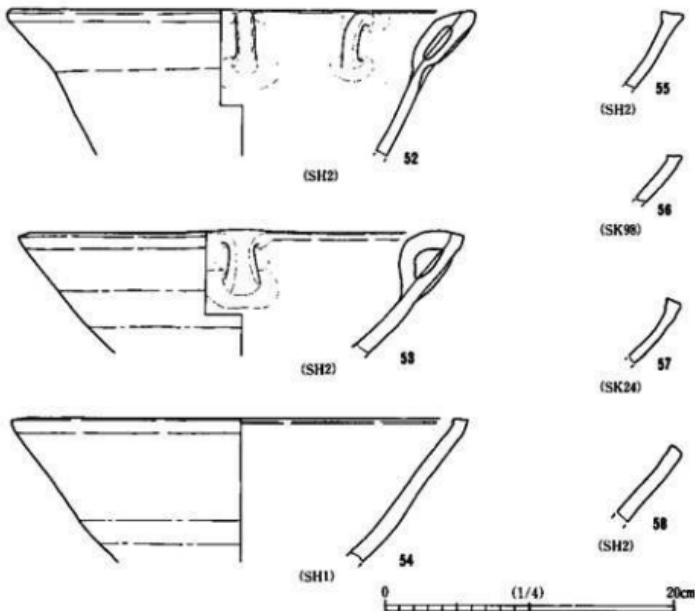
径11~12cm、底径6~7cm、器高3~4cmである。8, 11, 12は口縁部がやや外反する。14, 15, 16は口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものとみられる。遺構は土塙B下のSK103、II郭上のSK119、I郭上のSK23、24などの地下式坑に捨てられたものが多い。

②カワラケ(第59図、図版21) 個体数の推定は130個である。様々な形態で口径のやや大きなもの(17~26)と、口径6.5~2cm、器高1.5~2cmの小形のもの(27~51)がある。前者で特徴的なものをあげると、18, 20は器高2.8cmで脇部外面に稜をもち、19は推定口径10cm、器高1.6cmの皿状の形態、20, 21の色調は橙色である。後者の色調は浅黄橙色・にぶい黄橙色で焼成は悪く量的に最も多く、これが本来のカワラケで、使い捨てされたものと考えられる。出土した遺構は土師質土器同様、地下式坑が多い。



0 (1/4) 10cm

第59図 カワラケ



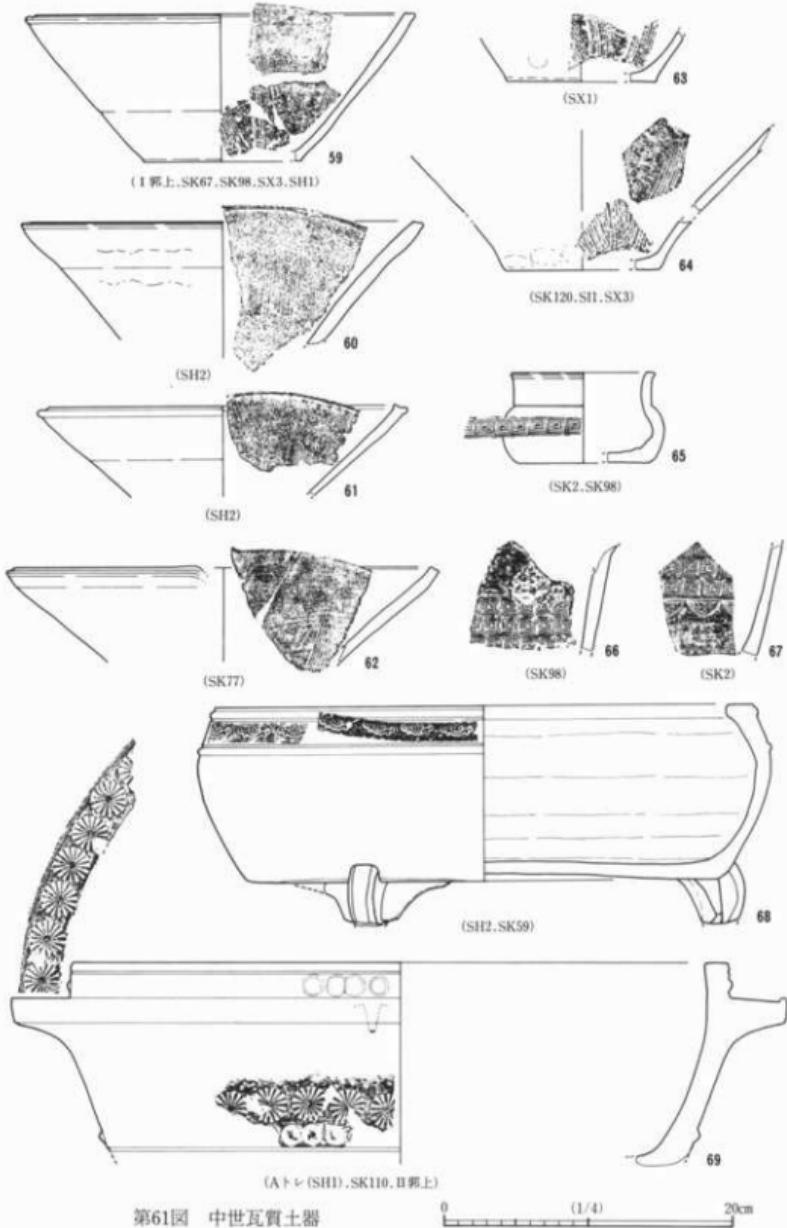
第60図 中世内耳土鍋

③内耳土鍋（第60図、図版22） 破片数は84点、推定21個体。口縁部から胴部まで復原できたものは3個体であるが、54は内耳部が出土しなかった。52の内耳は推定3カ所で、53の内耳は1カ所しか出土しなかった。口径は52が32.8cm、53、54が29.3cmである。色調は52、53が外面黒褐色・内面浅黄褐色、54が外面灰褐色・内面にぶい黄褐色である。他に口縁部の形態の例として4点の断面を図示した（55～58）。出土遺構はSH2の埋土中が多い。

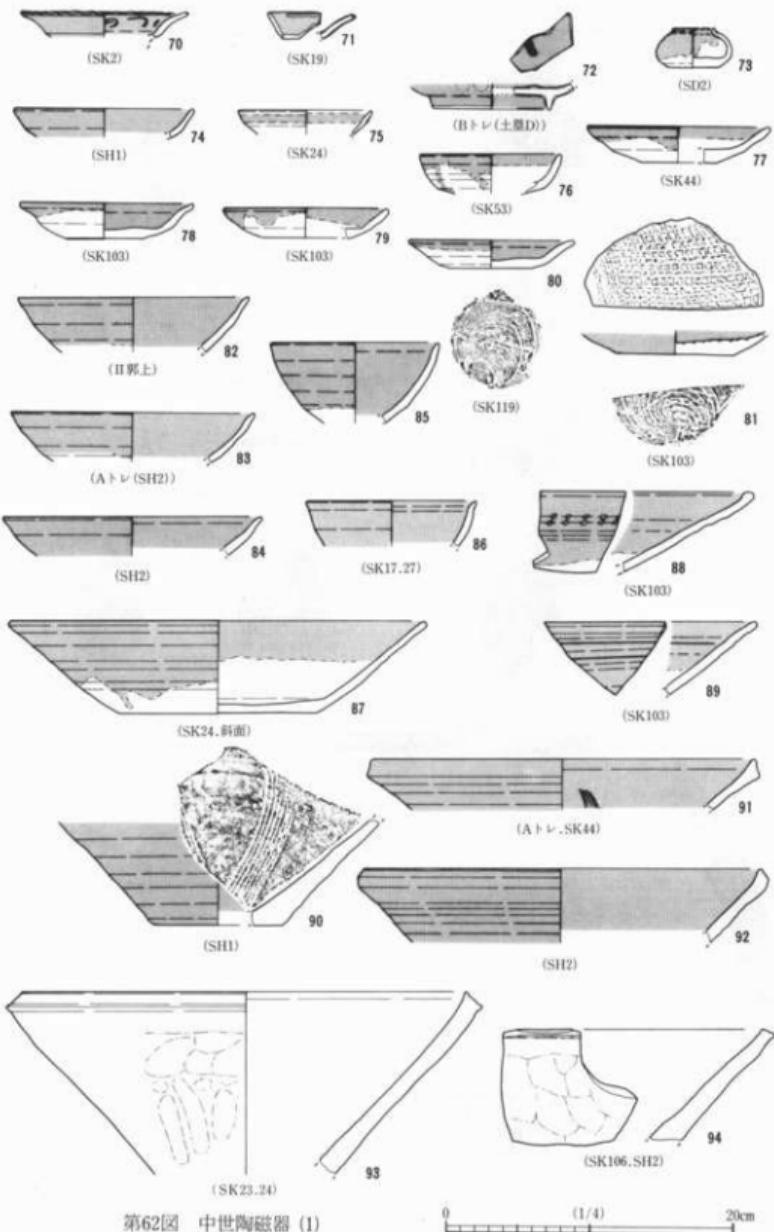
④瓦質土器（第61図、図版22） 破片数は115点で種別は壠鉢12個体 香炉5個体 火鉢3個体と判断した。

**壠鉢（59～64）** 59は同一個体と考えられる破片がI郭上、SK67、SX3、SH1と広範囲の遺構から出土し、SH2、SK120などのII郭側からも出土している。壠鉢は全体を復原できたものは少ないが、口径は59、60が25cm前後、61が24cm、62が28.4cmで、59の器高が10.2cmである。壠目は9条前後・幅2cm程の単位で底部から放射状に広がり、上部ほど間隔があくものである。色調は内外面灰黄褐色・黒褐色である。

**香炉（65、66、67）** 65は器高6.2cm、胴部は膨らみ、口辺部はほぼ直立する。66、67は恐らく鉢状の器形と考えられる。いずれも胴部には雷文のスタンプが横に連続して押されている。色調は65の内面が浅黄褐色であるが、他は内外面黒褐色・灰色である。65は土墨A下のSK2と



第61図 中世瓦質土器



第62図 中世陶磁器 (1)

0 (1/4) 20cm

土壘A'下のSK98出土の破片が同一個体とみられることから、同時期の遺構の埋め立ておよび土壘構築であることが推測される。

**火鉢** (68, 69) 68は口径33.4cm、器高15.0cm、脚部は3脚で、外側に膨らむ主体部の両側に板状の飾りが付く。口辺部は内湾し、外側に植物を表現したスタンプが横に連続して押されている。遺構はI郭側のSK59で多かったが、SH2からも出土した。69は口径42.4cmで鉢が張り出し、最大径は53.6cm。底部は出土しなかつたが、現存器高14a.5cmである。また、鉢部の上下を細い穴が穿孔しており、鉢の反対側は出土しなかつたが、恐らく本体を釣るための金具に入る穴と考えられる。鉢部の上面と胴部下部に菊花文と考えられる16弁の花のスタンプが横に連続し、鉢部より上の口辺部外面と胴部菊花文の下に低い円錐形の突起が横に連続する。火鉢の時期は中世後半と考えられる。遺構はSH1、土壘B'SK110とII郭上擾乱内出土の破片が同一個体と判断した。

⑤**舶載磁器** (第62図、図版23) 全て青磁で破片数は8点、7個体と考えられる。破片のため、実測図は3点のみであるが、写真で全て掲載した。白磁・染付は出土しなかつた。

**青磁穂花皿** (70, 71) いずれも内面に掃描波状文が刻まれる。70の口径は推定11.2cm、釉はオリーブ灰色、胎部は灰色。71の釉はオリーブ灰色、胎土は灰色。

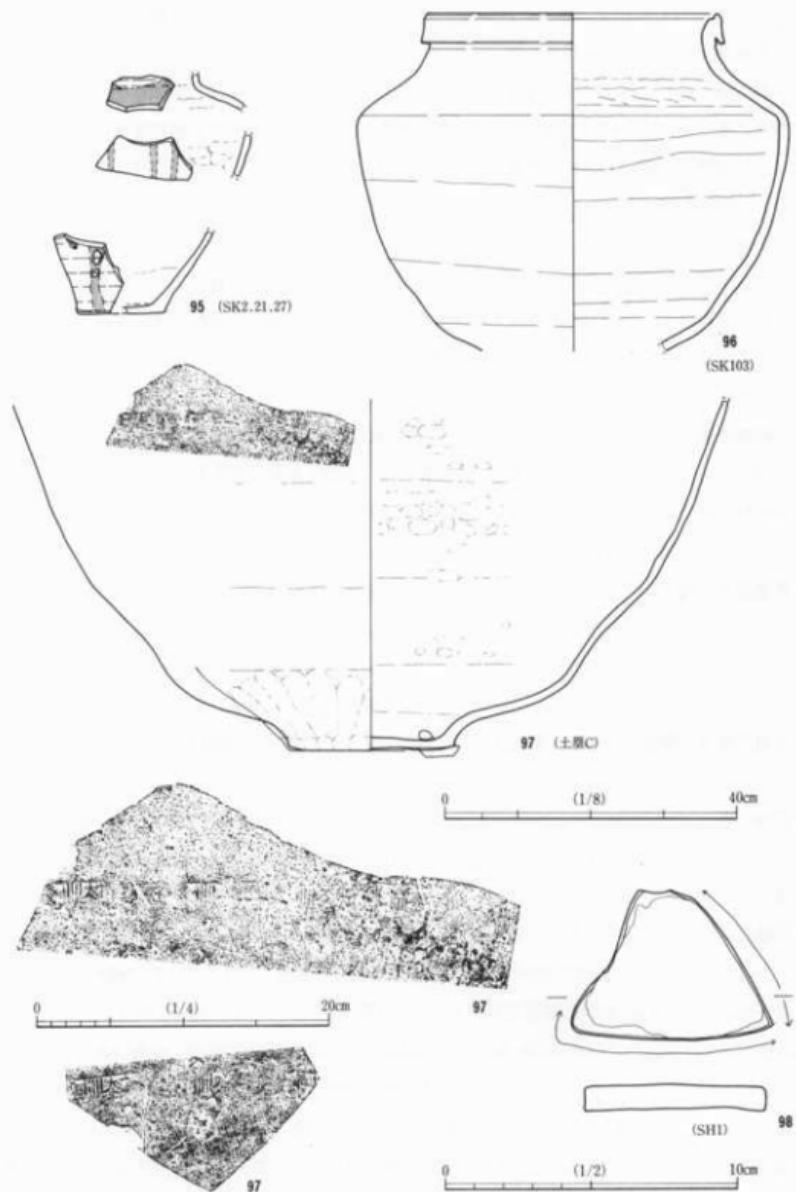
**青磁蓮弁文碗** (72) 底径は8.2cm、見込み部に双魚文とみられる尾の部分が残る。釉はオリーブ色、胎土は白灰色から灰色。

その他は穂花皿2個、蓮弁文碗2個でいずれも龍泉窯15世紀初頭から16世紀前半の製品と考えられる。遺構はI郭平場上、土壘A下の掘立柱建物跡柱穴、土壘D中などからである。

⑥**瀬戸美濃産陶器** (第62図、図版23) 破片数は89点、器種別推定個体数は皿16(30.8%)、碗20(38.5%)、大皿8(15.4%)、擂鉢5(9.6%)、小壺1(1.9%)、瓶子2(3.8%)。

**灰釉小壺** (73) 器高2.8cm、胴部下半に最大径がある。底部は回転糸切り無調整、釉は浅黄からオリーブ灰色、胎土は灰色、15世紀後半から16世紀初頭の所産と考えられる。SD2覆土上層出土。

**灰釉皿** (74~81) 74は推定口径12.4cm、釉は全面に施されており、灰白からオリーブ灰色、胎土はにぶい黄橙色、16世紀前半の所産の可能性がある。SH1出土。75~81は綠釉皿である。75は推定口径9.2cm、釉は口縁部のみであるが、口唇部で禿げている。色調は灰白からオリーブ灰色、胎土は灰白色。76は口径9.8cm、やや器高が高く15世紀後半の所産(古瀬戸後IV期)と考えられる。釉は灰色からオリーブ灰色、胎土は浅黄橙色。77~81は平らな見込み部から明瞭に立ち上がり、底部回転糸切り無調整の綠釉皿で、釉は灰白色・オリーブ灰色・灰オリーブ色、胎土は灰白色・灰色で、15世紀前半の所産(古瀬戸後III期)と考えられる。77は推定口径12.6cm、底径5.3cm、器高2.5cm。78は推定口径11.8cm、底径5.4cm、器高2.5~3cm。79は推定口径11.2cm、底径6.0cm、器高2.1cm。80は推定口径11.0cm、底径5.8cm、器高2.0cm。



第63図 中世陶磁器 (2)

**灰釉鉢皿** (81) 底径8.0cm。内面の鉢目はあまり使用された痕跡がない。

**灰釉平碗** (82~84) 82は推定口径15.8cm、釉は薄い灰オリーブ色、胎土は灰白色。83は推定口径16.8cm、釉は浅黄色からオリーブ黄色、胎土は灰白色。84は推定口径17.8cm、釉はオリーブ黄から灰オリーブ色。

**天目茶碗** (85, 86) 共に推定口径は11.8cm、85の釉は口辺部が褐色、以下黒色。86の釉は暗褐色から黒色。

**灰釉直縁大皿** (平鉢) (87~89) 胎土はいずれも灰白色。87は推定口径28.8cm、底径13.6cm、器高6.3cm、釉は浅黄色からオリーブ黄色。I郭の地下式坑S K24と斜面部から出土した破片が接合した。88は口辺部外面に横位の連続した刻みがある。釉は浅黄からオリーブ黄色。89は釉は浅黄色。これらは14世紀末~15世紀初頭の所産(古瀬戸後期後II期)と考えられる。

**鐵釉擂鉢** (90~92) 90は底径8.8cm、擂目は一単位8条で2cm、色調は表面が褐色、胎土は淡黄色。91は推定口径26.6cm、色調は器表面が暗紫灰色、胎土はにぶい黄橙色。92は推定口径27.6cm、色調は器表面がにぶい褐色、胎土は淡黄色。これらは15世紀末~16世紀初頭の所産(大窯1期)と考えられる。

⑦常滑産陶器(第63図、図版24, 25)破片数は124点、器種別推定個体数は片口鉢2個、壺2個、大壺4個である。

**片口鉢**(93, 94) いずれも外面は粗い指頭痕が残り、胎土は長石粒が多い。93は推定口径31.0cm、内面は櫛状工具によるものか斜め縱方向のナデ跡が残り、下半は使用のため凹凸が激しい。色調はにぶい赤褐色・橙色。S K23, 24の破片が同一個体と考えられ、同時期に投げ込まれたものと考えられる。94は色調は黄灰色、内面の調整は板状工具の押圧と考えられる。14世紀後半~15世紀前半の所産と考えられる。

**壺** (95) 推定器高35cm程、器表は黒色、肩から垂れる自然釉はオリーブ灰からオリーブ黒色、胎土は灰白色である。土壙A下のS B 1を構成する柱穴3基の覆土内から出土した破片を同一個体と判断した。

**大壺** (96, 97, 98) 96は土壙B下の地下式坑S K103の埋土中からの出土である。底部が出土しなかつたが、現状の器高46cmで推定器高は50cm以上、口径は48.0cm、口縁部はN字状の折り返しで本来外側の端部が器表に付くものであるが、焼成後若干離れている。色調は外面が褐色、内面はにぶい黄褐色、胎土は長石・石英・灰色石粒を多く含む。15世紀前半の所産と考えられる。97は土壙C中からの出土である。胴部以下のみで上部は出土していない。底径は23.0cm、ゆがみがあるので実際は実測図ほど外側に開かない可能性がある。肩部の下と推測される位置に「大」の字が入るスタンプが横位に連続して押印されている。色調は外面がにぶい褐色、内面はやや薄いにぶい褐色、胎土は96と同様である。14世紀前半の所産と考えられる。97は常滑大壺の破片を再利用した祇(石)であり、S H 1から出土した。

⑧近世陶磁器（図版25） 破片数は陶器23点、磁器41点である。陶器は瀬戸・美濃系、磁器は肥前系で時期は18世紀代と考えられる。全て表土からの出土である。

#### 土器・陶磁器関係参考文献

- ・小川望・小股悟「関東の瓦質土師質火鉢類－中世鎌倉、近世江戸を中心に－」  
『考古学ジャーナル』No.299 1988年
- ・横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」  
『九州歴史資料館研究論集』4 1978年
- ・龜井明徳「熊本県城南町出土の青磁資料」「貿易陶磁研究」1 1981年
- ・藤澤良佑「瀬戸大窯発掘調査報告」「瀬戸市歴史民俗資料館研究報告」V 1986年
- ・藤澤良佑「瀬戸古窯址群II－古瀬戸後期様式の編年－」「瀬戸市歴史民俗資料館研究報告」X 1991年
- ・藤澤良佑「大窯期工人集団の史的考察－瀬戸・美濃系大窯を中心に－」  
『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集 1992年
- ・「大戸窯検討のための「会津シンポジウム」－東日本における古代・中世窯業の諸問題－」 資料掲載  
(中野晴久・常滑窯) 1992年
- ・『国内出土の肥前陶磁－古唐津・伊万里の流通をさぐる－佐賀県立九州陶磁文化館』 1984年

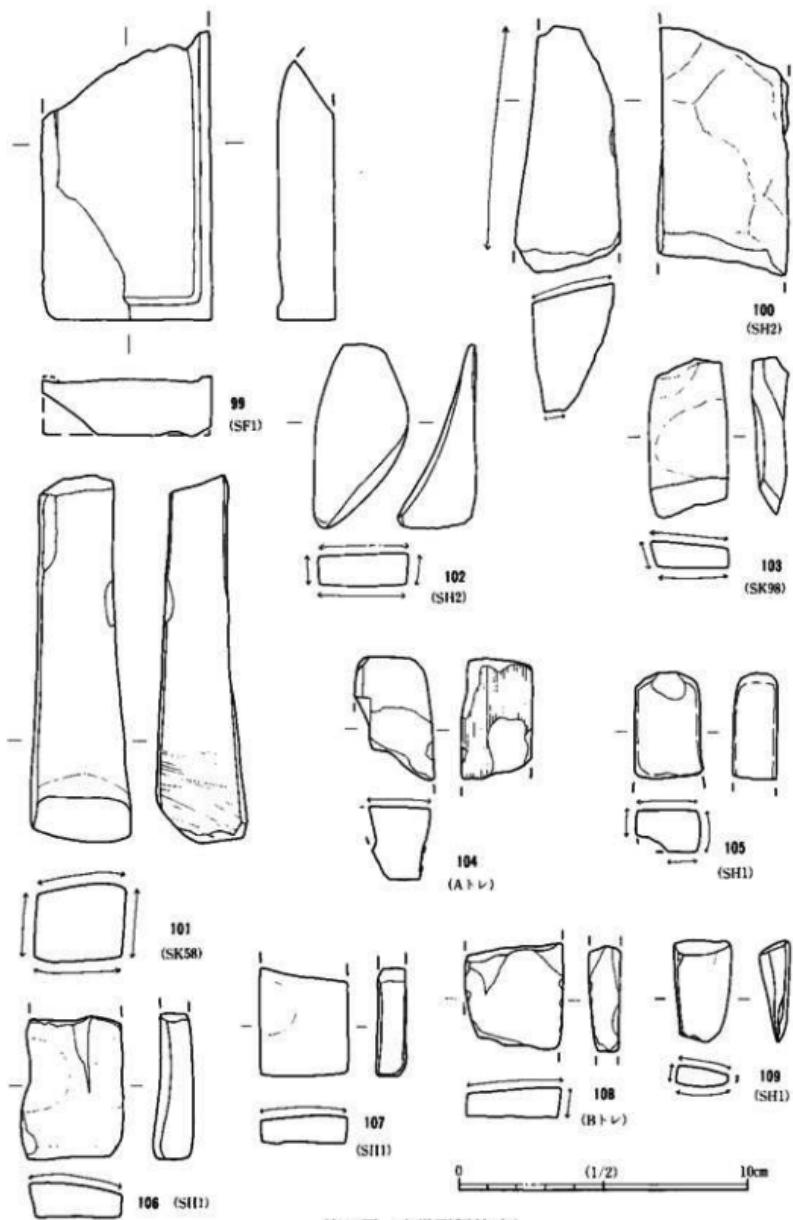
#### ⑨石製品（第64～66図、図版26, 27）

硯（99） S F 1 の通路上に積まれていた土中から出土した灰色から黒色の頁岩製長方硯であるが、遺存度は60%である。縁帶内部も方形で、側面はほぼ垂直であり、福井県一乗谷遺跡で最も出土例の多いもので、15世紀後半～16世紀後半と考えられる。

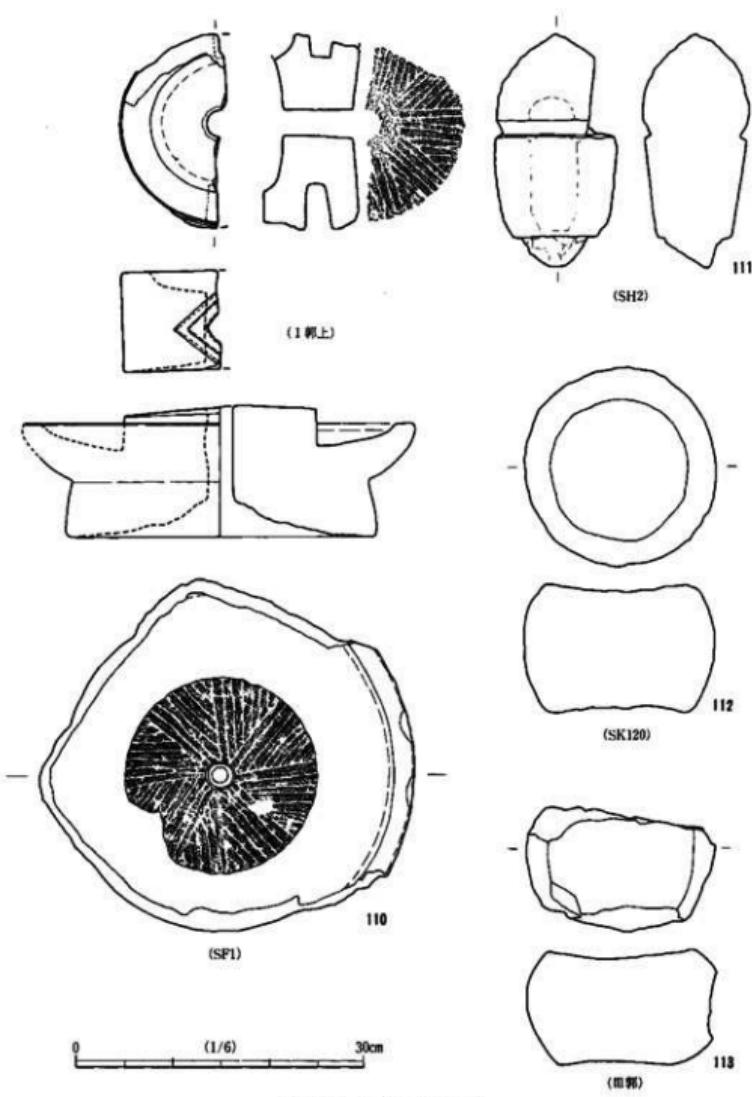
砥石（100～109） 100は黒褐色安山岩、102～106, 109は灰白色地に黒褐色の斑状のまだらが入る泥岩、107は青灰色砂岩、108は泥岩製だが、後に被熱により表面が褐色化している。104は3面が未使用面で整形痕と考えられる筋が残る。

茶臼（110） 上部はI郭平場上出土、下部はS F 1 の礎石として再利用されていたが、擦り面および芯棒の穴が適合しており、セットと考えられる。上部の回転部は灰色の安山岩製で、遺存度は40%、推定径は約20cm、底部はややくぼみ擦り目がつけられている。横から棒を差し込む穴は菱形のレリーフが施されている。下部も安山岩製で、遺存度は70%、推定径は41.4cm、芯棒は推定径2cmである。

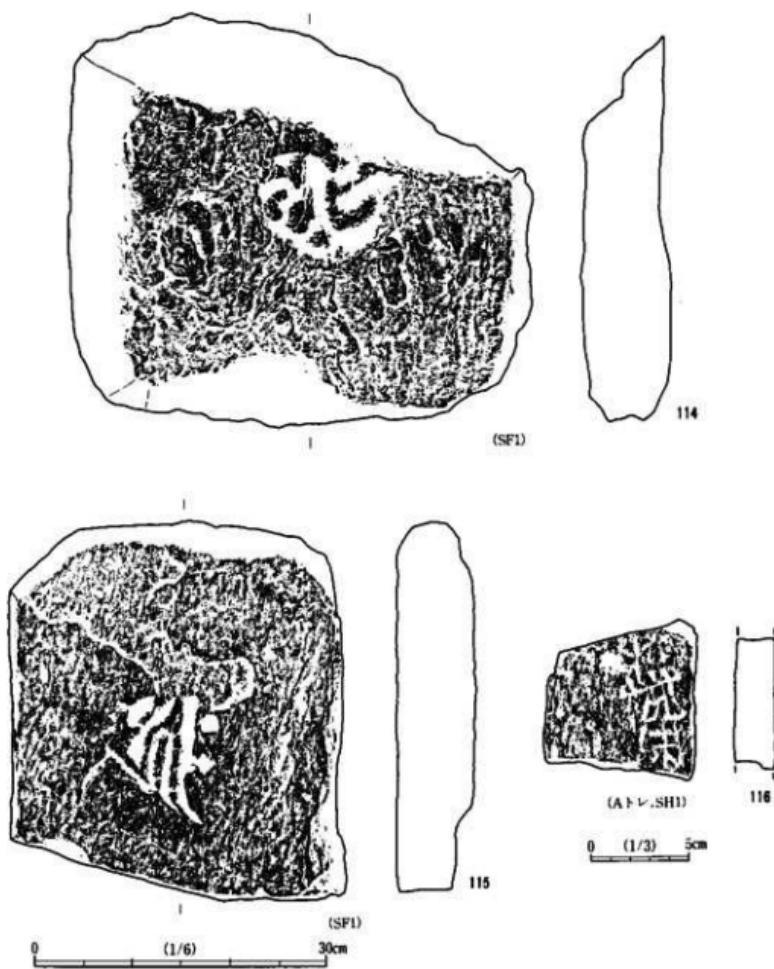
五輪塔（111～113） 111は空風輪で、灰白から黄灰色の飯岡石製。長軸24.0cm。火輪に差し込まれる突出部はやや欠損。2面が約5cmの幅で両輪にかけて削られているため断面はやや偏平であるが、他の部分はノミ跡が顕著で粗い作りである。S H 2 のS F 1 近くの埋土中出土であ



第64図 中世石製品 (1)

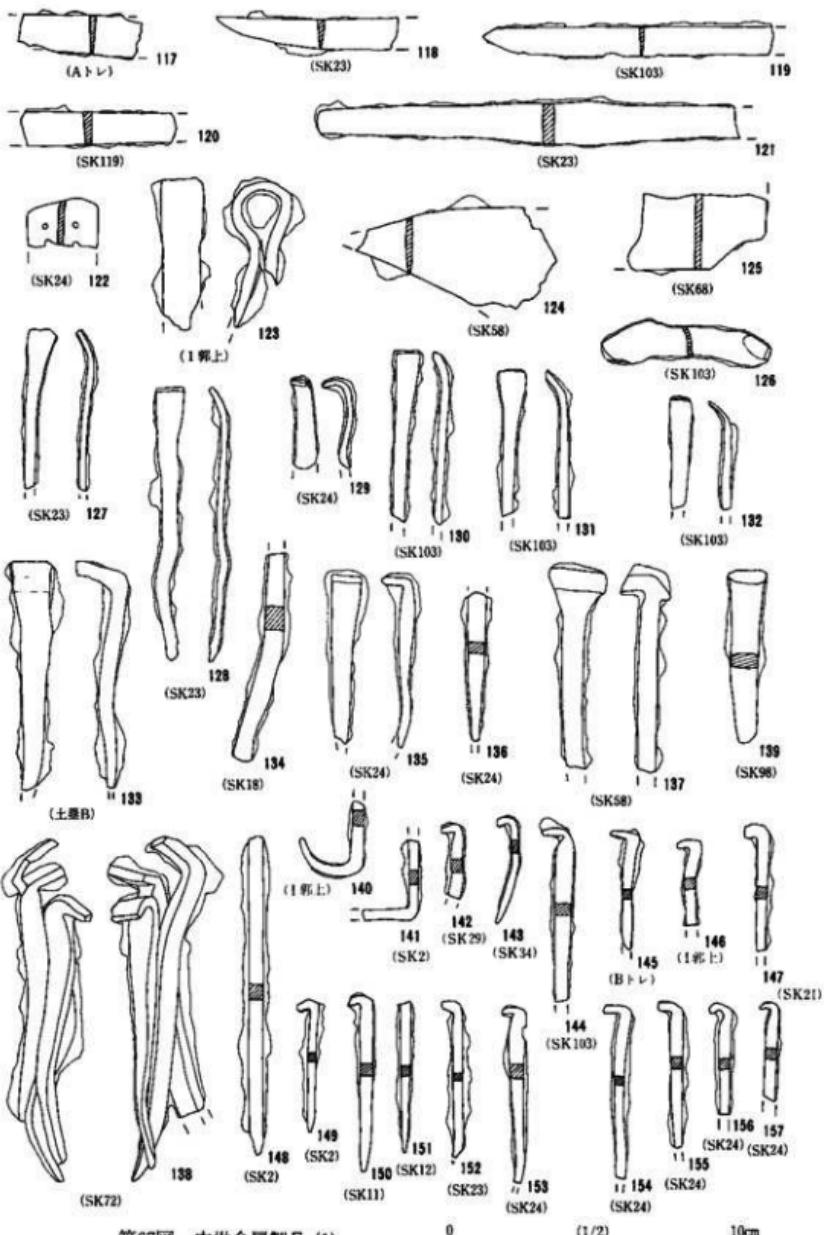


第65図 中世石製品 (2)

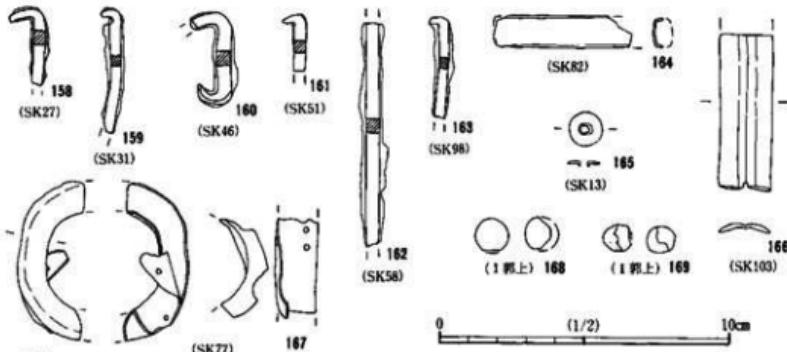


第66図 中世石製品(3)

り、あるいは土星Bが塚であったとすればそれに伴うものであろうか。112はSK120の底近くで出土した花崗岩製の水輪である。最大径は20.0cmで若干中心からずれていることから、上下が判明する。高さは13.0cmである。四面の梵字は凹凸が激しく存在が不明である他はほぼ欠損がない。113はSF2の下近くの田郭上で表面採集した黄灰色砂岩製の水輪である。遺存度は40%。最大径は推定21cm、高さは12.7cmである。あるいはSF2の石棺材利用の4つの巖石の他



第67図 中世金属製品 (1)



第68図 中世金属製品(2)

にあった泥岩に対応する礎石としてあったものが落ちたものであろうか。

**板碑 (114~116)** 銀灰色の黒雲母片岩は多量に出土しており、石棺材の破片であったことが考えられるが、銘を有するものが3個出土しており、板碑として再利用されているものも多いことが推定される。114, 115はS F 1の礎石として検出されたもので、キリーグ(阿弥陀如来)が刻まれているが、蓮座・花瓶・紀年銘などはない。114は現存の幅47.5cm、長さ42cm、厚さ9.5cm。115は現存の幅35cm、長さ38.5cm、厚さ8.0cm。116はS H 1覆土出土の銘が刻まれるものである。土壙A'下の絹雲母片岩の板が多く出土したSK64に伴っていたものと考えられ、同時にそれらが板碑であることが判明する。現存幅8.0cm、長さ8.0cm、厚さ2.0cm。銘は漢字3文字と考えられるが、不明である。

#### 石製品参考文献

- 水野和雄「日本石器考—出土品を中心として—」『考古学雑誌』70巻4号 1985年

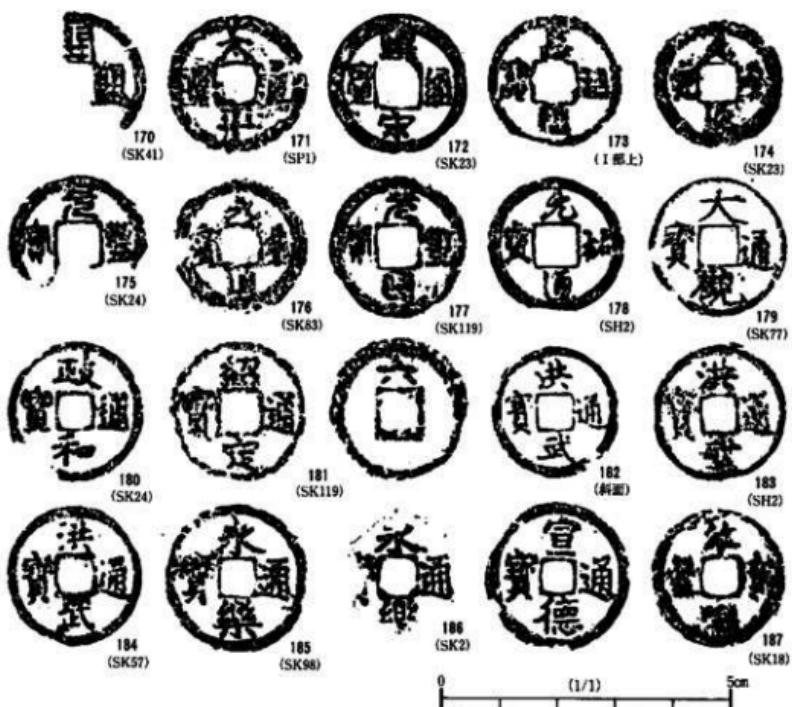
#### ⑩金属製品関係 (第67, 68図、図版27, 28)

**小刀または小柄 (117~120)** 117, 118は小刀の刃部。119は刃先まであるが、細く直線的であることから小柄の可能性がある。120は中茎と考えられる。

**小札 (122)** わずか1片であるが、幅2.4cmで、穿孔が4ヶ所残存する。

**不明鉄製品 (121, 123~126)** 121は細い板状の製品。123は金具。124, 125はあるいは鉄鍋かもしれない。

**鉄釘 (127~163)** 127~132は板状に薄くつぶして頭部をやや曲げている平折釘の一類と考えられる。地下式坑の埋土から多く出土していることの意味は不明である。133~138は断面が平たくなり、頭部を曲げる平折釘の大形品である。140~143は平折釘の小形品である。144~163は断面が正方形で頭部をつぶした折釘である。鉄釘はI郭上の土坑群から一様に出土している



第69図 中世銭貨

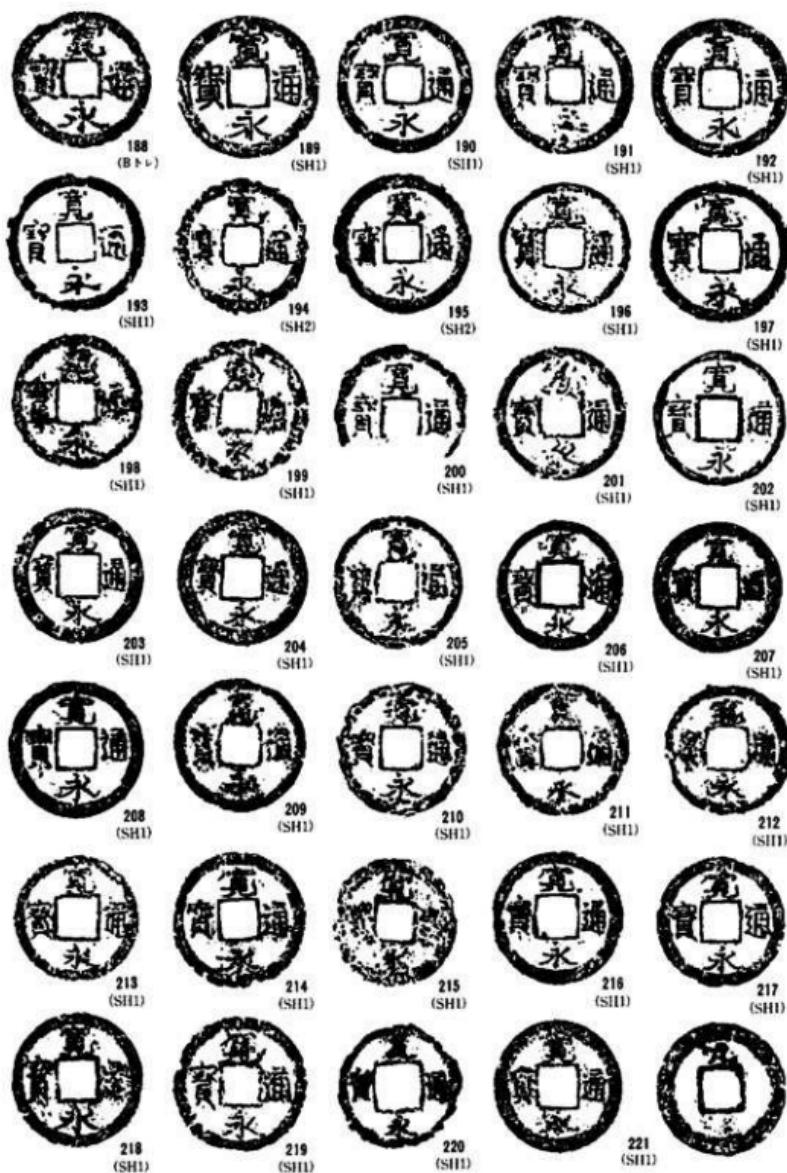
ことから、建物跡の存在が推測できる。

**スラグなど (図版28)** 小鋳冶関係の遺物が出土したが、時期は不明である。スラグ57点・焼形10点・るつば5個体が出土した。鉄滓全体では823gである。土壘B下の包含層を含めて一様に出土していること、鍛冶遺構が検出されていないことなどから、築城以前のものであろう。

**銅製品 (164~167)** 164は小柄の鞘、165、166は金具、167は直径3.5cm程の木製の棒状のものに釘で装着される金具と考えられる。

**鉄砲玉 (168, 169)** I郭の土壘AとA'の間にあたる中世遺構確認面での平場 (SK83の上) で2個出土した。白色で鉛を主成分とするものであろう。いずれも発射されて何かに当たったためか欠損している。推定径及び重量は168が1.2cm、5.70g、169が1.0cm、4.44gである。16世紀末から近世の製品であり、戦国末期にSF1(虎口)からI郭に向かって発射されたと想像はできるが、陶磁器など他の遺物で概期にあたるものもなく、結論は避けたい。

**銭貨 (第69, 70図、図版27)** 中世の中国銭は北宋銭を中心に開元通寶から宣德通寶まで合計30枚出土したが、集中や傾向はみられなかった。傷みが激しい。また、近世の寛永通寶はSH1の表土中から鉄銭も含めて紐で通された痕跡(繊維付着)をもってまとまって47枚出土した。



0 (1/1) 5cm

第70図 近世銭貨

算定は主に小川裕樹「寛永通寶」(1960年)を参考とした。)

合計は52枚、古寛永から18世紀前半までの鉄造品で18世紀後半以降のものは出土しなかった。

#### ⑪その他

**漆** (図版28) 地下式坑SK23、103から出土した。前者のものは径約5cmの円形が残存しており、漆椀の高台内部に塗られた黒漆の可能性が考えられる。

**貝** (図版28) SK103からハマグリ主体にテンギニシも含む310g、SK119からキサゴ1039g、土星C中から炭化米0.67gと共にイシガイ3,803gが出土した。イシガイは淡水産、他は海水産であり、かつて内海であった当地域近辺で捕獲されたものであろう。地下式坑出土のものは埋土上層で検出されたもので、城の機能時に食用にされて捨てられたものと考えられる。

## 第8章 結語

本章ではまず遺物を中心に小林城の変遷を追ってみたい。時代別の遺物破片数は以下の通りである。

**先土器時代** 石器1、**縄文時代** 石器19、フレイク53、礫1,129、土器8,547

**古墳時代** 土師器2313、埴輪244、石棺材198、金属製品(6)、

**奈良・平安時代** 須恵器7

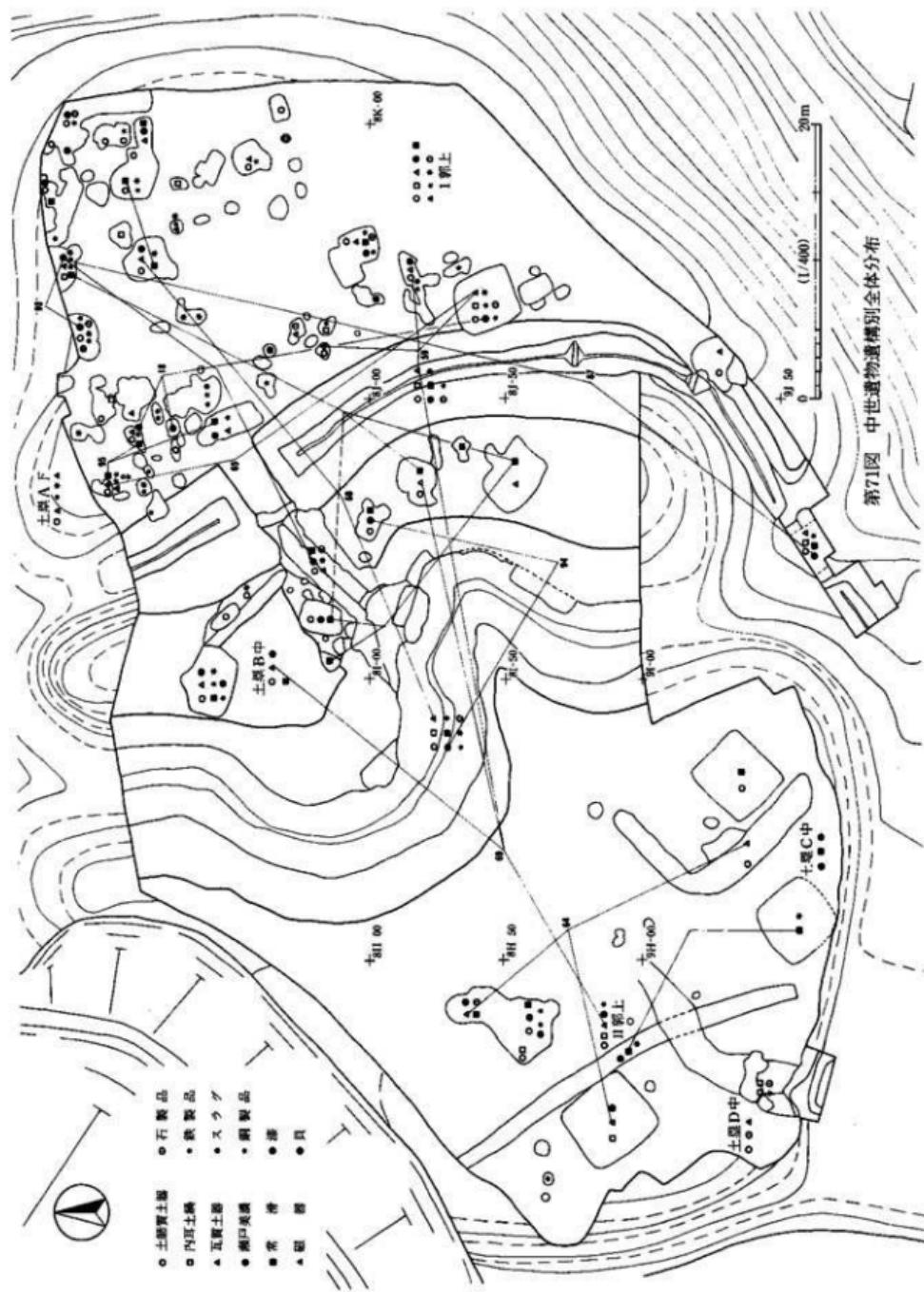
**中世** 土師質土器(含カワラケ)411(49.5%)、内耳土鍋84(10.1%)、瓦質土器115(13.8%)、瀬戸・美濃89(10.7%)、常滑124(14.9%)、磁器8(1.0%)、銭貨30、石硯1、磁石10、茶臼1、五輪塔3、板碑(3)、金属製品64、漆2ヶ所、火葬骨3ヶ所、貝3ヶ所、炭化米1ヶ所

**近世** 陶器23、磁器41、瓦1、銭貨52

**時期不明** るつぼ5個体、スラグ57 (板碑は銘文が刻まれているもの)

中世の遺物は遺構別全体分布(第71図)から明らかな様に、距離のある遺構間での接合関係や同一個体の遺物が分布している。これは築城から改造、そして廃城行為の過程で多くの土が動いたことを示すものである。既に遺構説明の中でも触れてきたが、ここでまとめると、接合・同一個体関係は土星AとA'間、土星BとB'下遺構間、I郭北東部の遺構と土星B・B'下の遺構とSH2間、II郭上遺構間、土星B・B'下とII郭上表采遺物であり、逆に関係がみられないものとしてI郭上とII郭上の遺構間、SH1とSH2間である。これはほとんど遺構に廃棄されたものであり、例えばI郭北東部の地下式坑と土星B・B'下の地下式坑が同時期に存在し、築城時に遺物が入り、廃城時には土星B・B'の土を崩してSH2が埋められたことが推測される。

次に地表面観察による城の繩張構造の矛盾点が発掘調査によって解決されたことについて述べたい。地表面観察では、II郭が郭の中で最高所にあること、II郭側の土星B・B'がI郭側の土星A・A'より大規模であり、その間に空堀SH1が存在することなどから、II郭が主郭であ



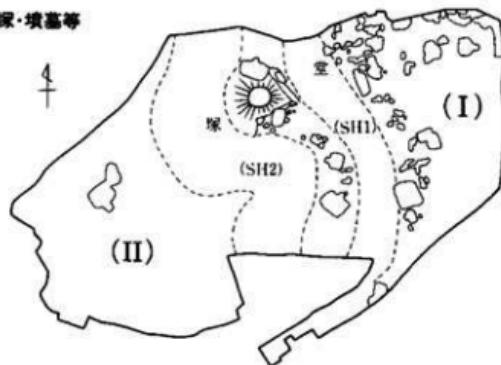
第71図 中世遺物遺構別全体分布

ることを示すものであるが、土壘B・B'のII郭側に埋もれていることが予想された大規模な空堀SH2の存在は、逆にある時期においてI郭の優位性を示すという点であった。さて、発掘調査では予想通り、土壘B・B'のII郭側に大規模で屈曲した空堀が検出され、中世末期に人為的に埋められたものであることが明らかとなった。そして、土壘A・A'がSH1を掘削した際に出た粘土層の盛土であり、土壘B・B'が中世の塹を中心に表土を削平して出た黒色土やロームの盛土であることから、土壘B・B'が土壘A・A'より先行すること、I・II郭の2カ所の虎口(SF1、SF2)の門に少なくとも3時期あり、SF1の門がI郭側からII郭側へ移行していること、最終期に礎石を使用していることなどから、SH1を巡らせたII郭が主郭の時期からある時、SH2を掘削してその土を土壘C・Dに載せ、また、II郭上の溝SD2を埋め、主郭をI郭に移したことが明らかとなった。以上の改造過程と検出遺物から中世の遺構変遷および時期が次のように考えられる(第71図)。

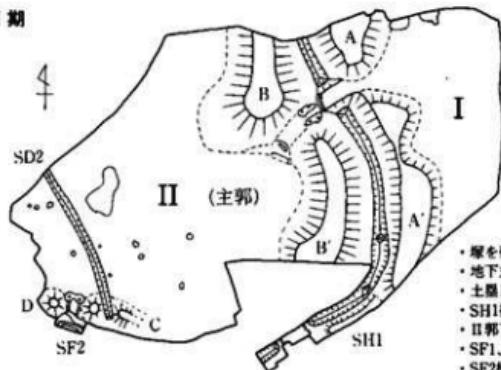
- ① 中世遺物の多くが築城時に埋められた地下式坑内に廃棄されたものであり、非常に多くの種類の遺物が検出されており、生活感があることから一概に墓地とはいはず、青磁など優品も伴うことから、在地領主のあるいは村の宗教的施設の可能性が考えられる。(14世紀末～15世紀前半)
- ② 台地上を土壘B(塹)を残して削平し、II郭を主郭として周囲に土壘(B・B'、C・D・E)、空堀SH1を巡らせた時期。SF1はI郭(土橋)側に掘立柱二脚門。地下式坑は天井部を落とされ、土を入れられる。土壘A・A'の下にあったはずの建物などの柱を抜いて壊した後、土壘を構築。II郭下のIII・IV郭の空堀も機能。恐らく在地領主の本拠地としての築城。(15世紀半ば)
- ③ II郭を主郭として機能させるため、SH2を掘削し、土壘C・D上に土を盛り、SD2が埋められ、SF1はII郭側に礎石柱四脚門と柵列と硬化面通路、SF2は②期の柱穴を埋めた粘土敷硬化面通路と礎石柱二脚門。地下式坑は再び埋められる。III・IV郭の空堀埋め立ておよび郭面造成。常陸国との境目にあって軍事上の重要拠点としての機能をもつたためであろうか。後北条氏の影響か。(16世紀半ば)
- ④ 廃城行為と考えられるSH2の埋め立て。土は土壘B・B'およびII郭上を削平したもの。この時にII郭上の城に伴う掘立柱建物なども破壊されたと考えられる。SF1は盛土され、SF2は再び二脚門が造られ、廃城後もなんらかの機能を有したものと考えられる。(16世紀後半あるいは17世紀末)

以上、今回の調査では、中世城郭の築城から改造、そして廃城に至る過程が明らかになった点は大きな成果であったと考えられる。しかし、最後に今後の課題の一つをあげると、小林城は歴史的環境、縄張構造、検出遺構などから16世紀末期まで機能したと考えられるが、染付磁器をはじめとした確実な概期の遺物の出土がなかった事実をどう解釈するかであろう。

① 墓・塚・墳墓等

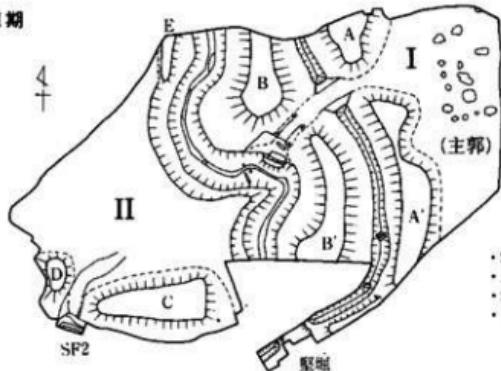


② 城Ⅰ期



- 塚を残して台地上を削平。
- 地下式坑はまだ埋まりきらない。
- 土壘B・B'・小規模なC・D構築。
- SH1櫓門、土壘A・A'構築。
- II郭下のIII・IV郭の空櫓構築。
- SF1、櫻立柱門
- SF2構築は②と③の間の時期か。

③ 城Ⅱ期

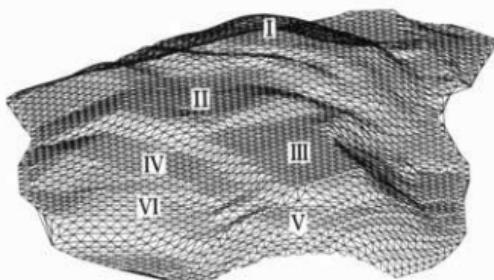


- SH2櫓削除、木柵設置。
- 土壘C・D大規模化。
- SF1, SF2櫻石西御門
- III・IV・V・VI郭などの造成。

第72図 中世遺構変遷図

0 (1/1,000) 40m

# 写 真 図 版



小林城跡鳥瞰図

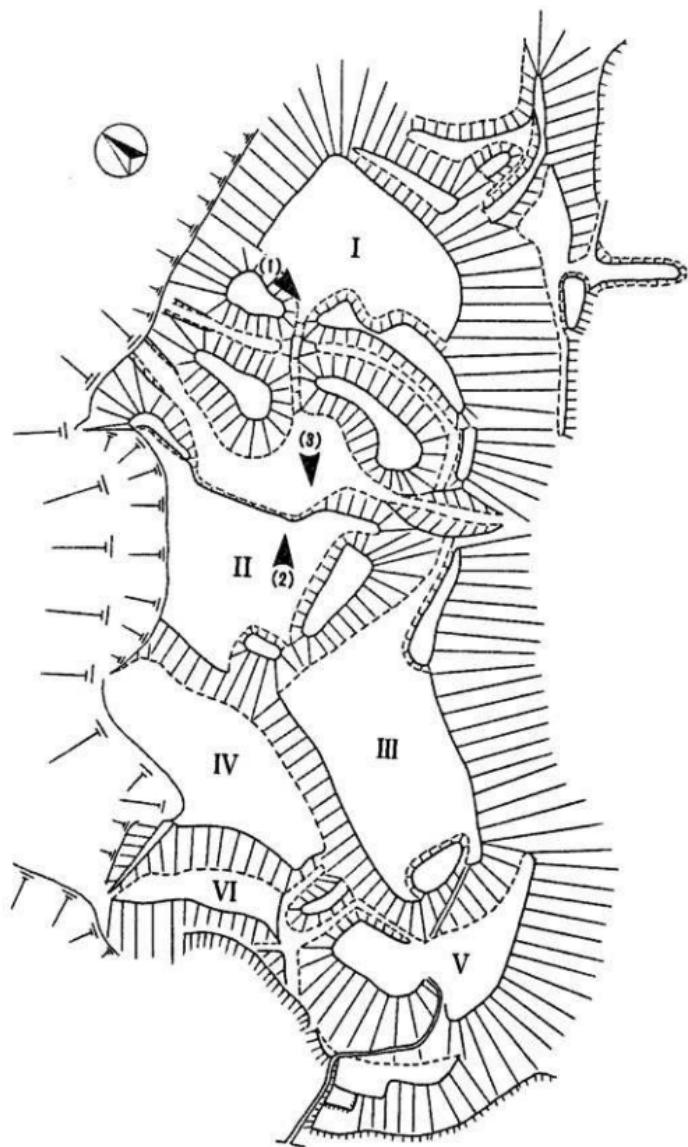




(1) 小林城跡航空写真（撮影・1991年5月）



(2) 小林城跡遠景（東から）





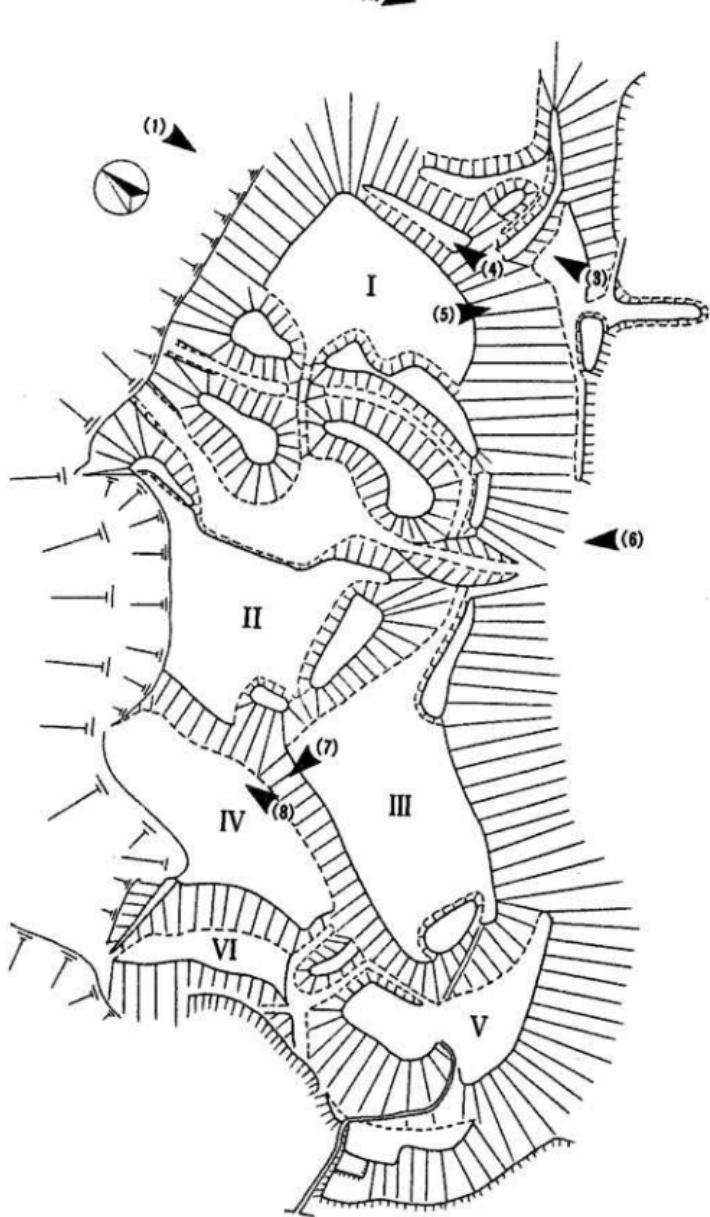
(1) 調査前  
(I 郭側空掘と土塁)



(2) 調査前  
(II 郭から I 郭方向  
をのぞむ)



(3) 調査前  
(土塁B上から II 郭  
をのぞむ)





(1) I郭北側直下から近景



(2) 北東部の切り通し



(3) I郭東側尾根



(4) I郭東側腰曲輪



(5) I郭南東側腰曲輪



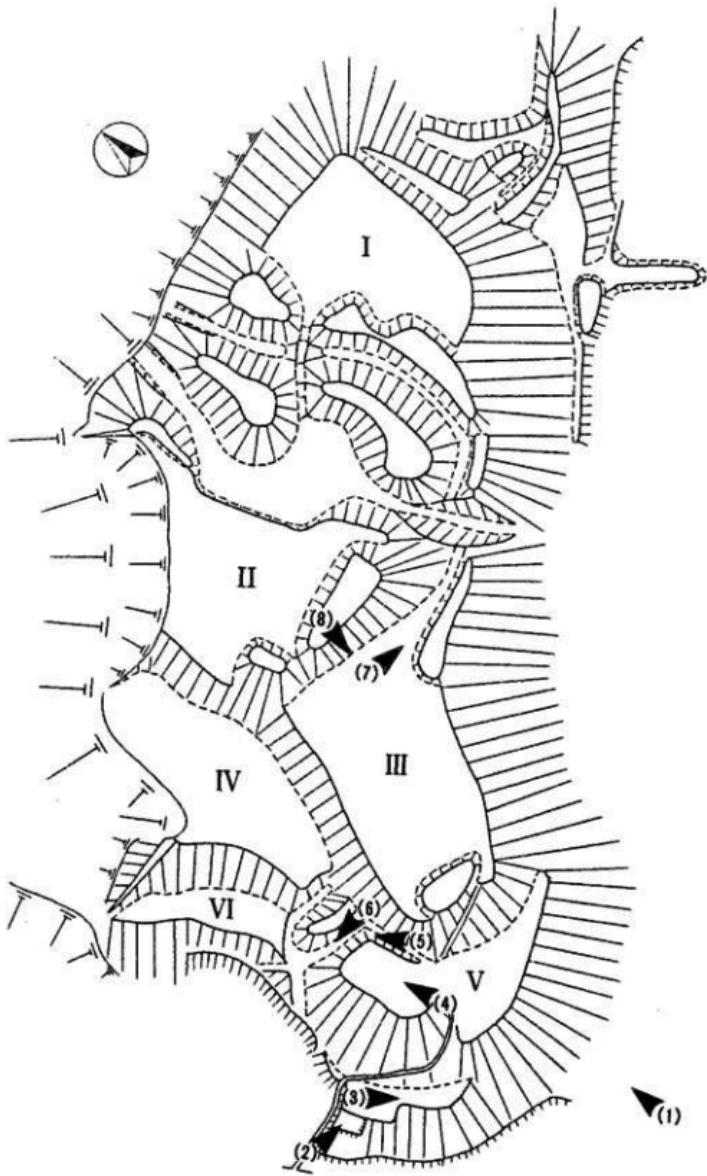
(6) 南東側堅堀



(7) II郭虎口付近からIV郭をのぞむ



(8) IV郭上（右側はII郭）





(1) 南西側近景



(2) 斜面途中の墓地



(3) V郭下の段



(4) IV郭上



(5) IV・V郭間の堀と土塁



(6) IV・V郭間の堀と土塁



(7) III郭南東縁



(8) II郭上からIII郭をのぞむ



(1) A トレンチ (土壘 C)



(2) A トレンチ (SH 2)



(3) A トレンチ (土壘 B')



(1) B トレンチ（土壌D）



(2) B トレンチ（土壌B）



(3) B トレンチ（土壌A）



(1) C トレンチ



(2) D トレンチ (土橋)



(3) 南東側斜面部



(1) SH1 (B トレンチ)



(2) SH1 (南から)



(3) SH1 内障壁



(1) SH2 表土除去状況



(2) SH2 堤段階



(3) SH2 堤底



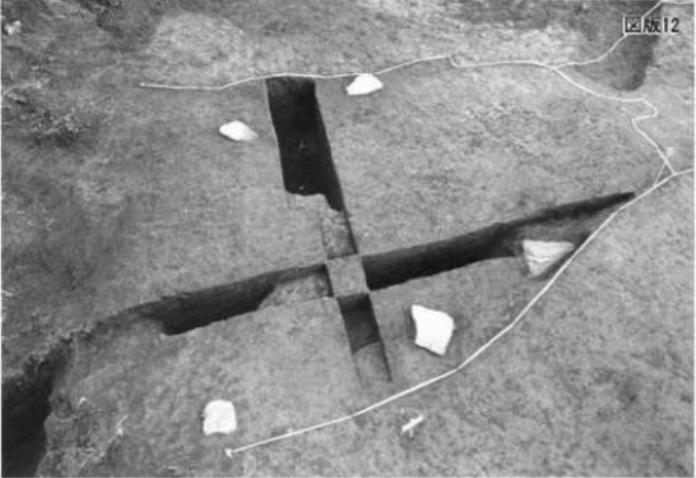
(1) SF 1 (II郭上空から)



(2) SF 1 (柱穴と礎石)



(3) SF 1 (掘方)



(1) SF 2 石



(2) SF 2 と道路跡



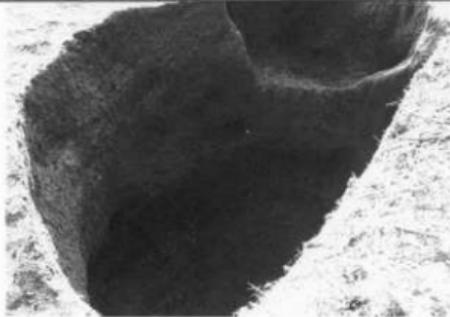
(3) SF 2 堀立柱門跡



(1) I郭上遺構（西から）



(2) I郭上遺構（南西から）



(1) SK23



(2) SK23炭化物，烧土等出土状况



(3) SK24



(4) SK35, 36, 56等



(5) SK 8 烧土,火葬骨出土状况



(6) SK64板碑出土状况



(7) SK19, 20他



(8) SK130



(1) SK103



(2) SK103遺物出土狀況



(3) SK116他



(4) SK110他



(5) SK111他



(6) SK111土層堆積狀況



(1) SH 2とII郭上



(2) 下層土層



(3) SX 3



(4) SK119, 120, 121



(5) SK119土層堆積状況



(6) SK120土層堆積状況



(7) SD 2と近世以降の植栽痕



(8) SD 2土層堆積状況



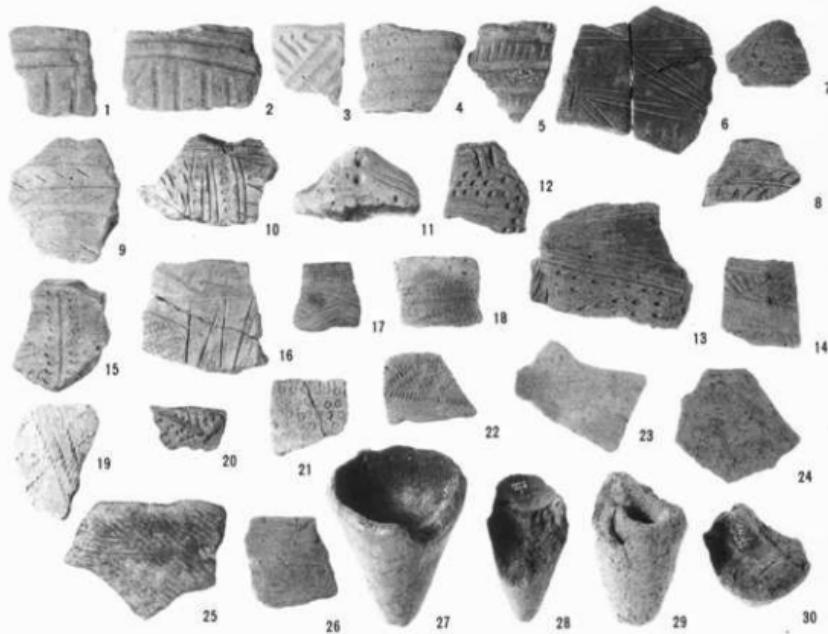
(1) S I 1



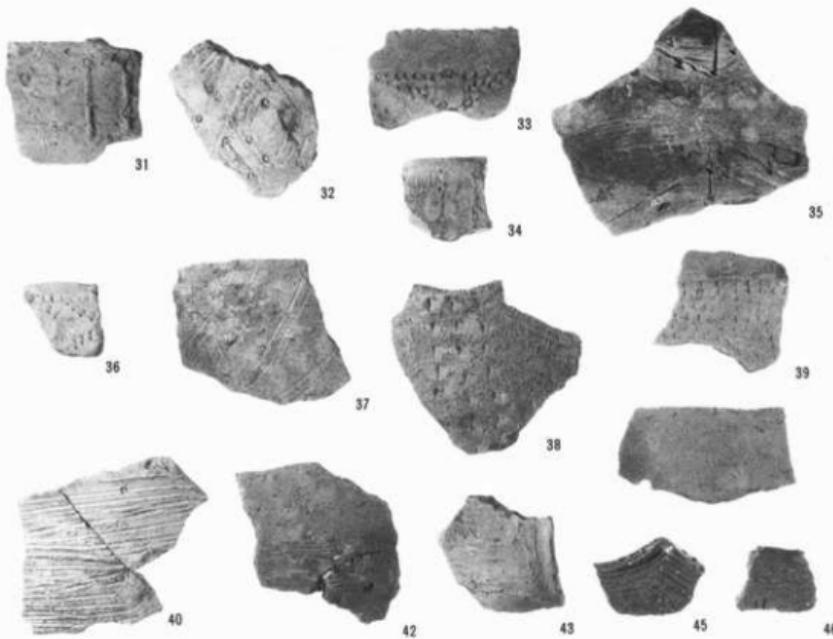
(2) S I 2



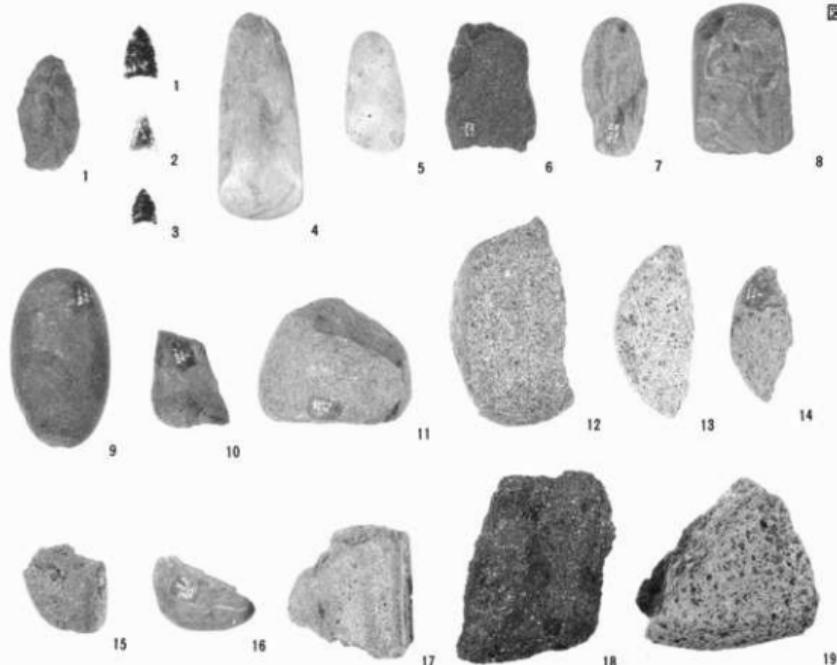
(3) S I 3



(1) 繩文土器 (田戸式土器群)



(2) 繩文土器 (鞠ヶ島台・茅山・諸磯式土器群)



(1) 石器



(2) 古墳時代遺物



1



2



4



3



7



9



12

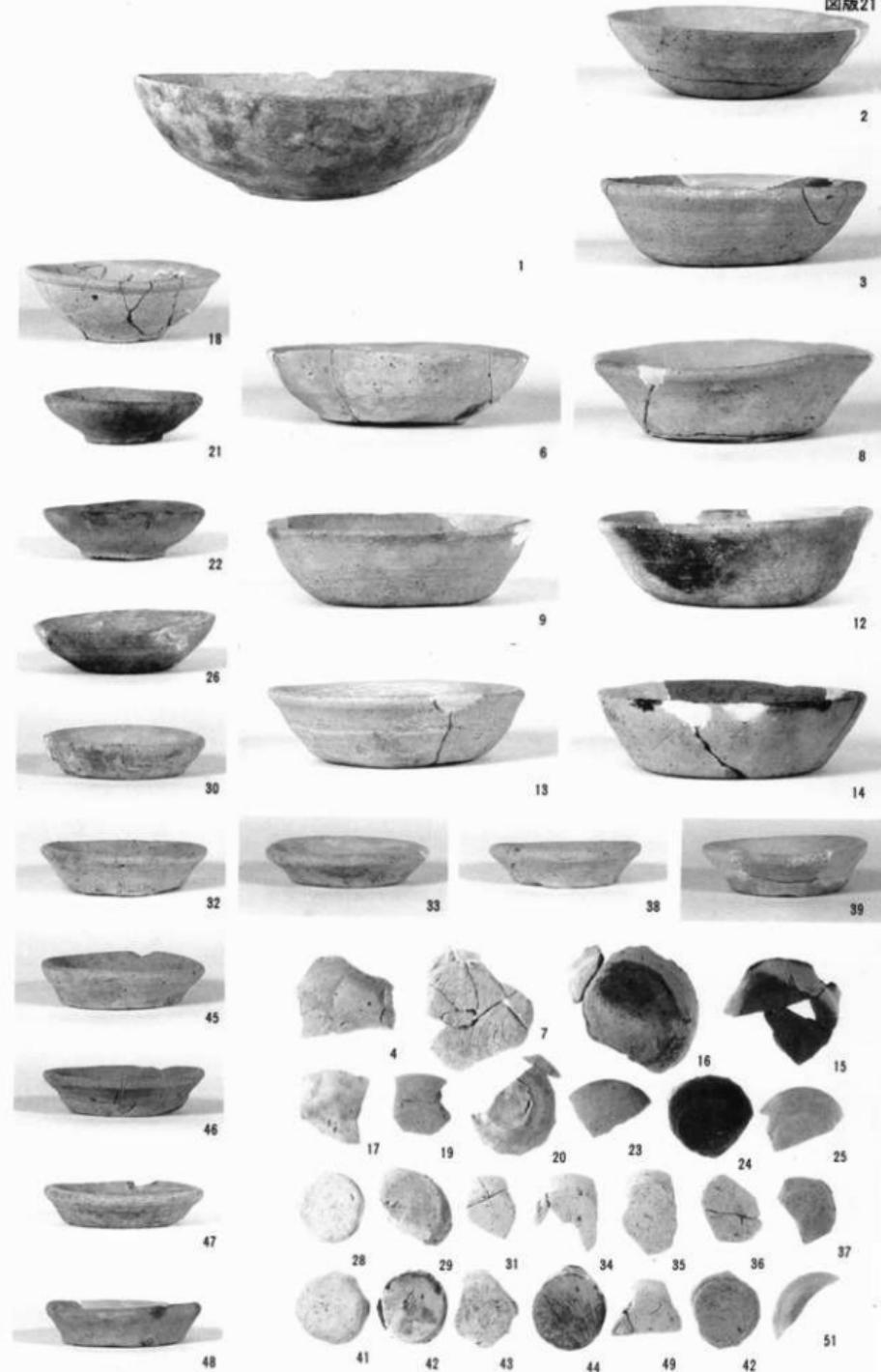


10

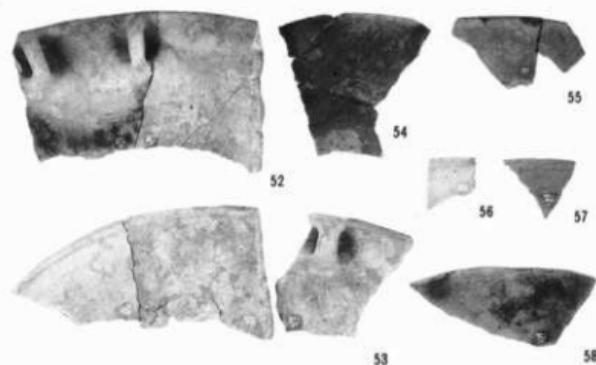


13

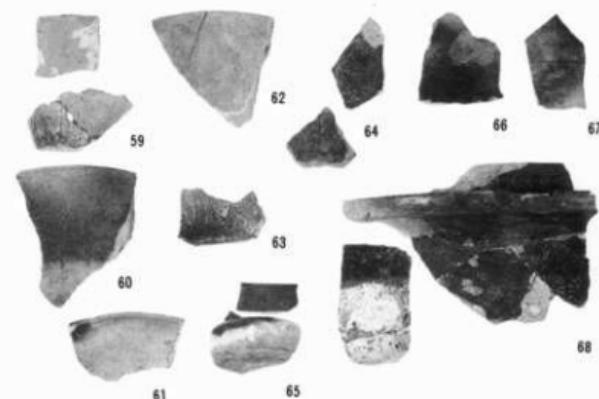
埴輪 (S=1/3)



土師質土器、カワラケ



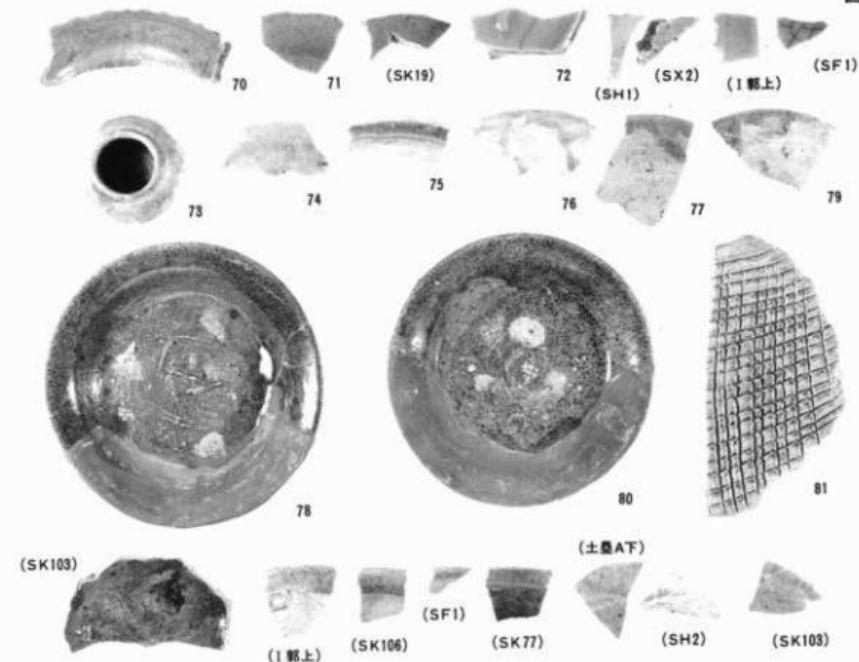
(1) 内耳土鍋



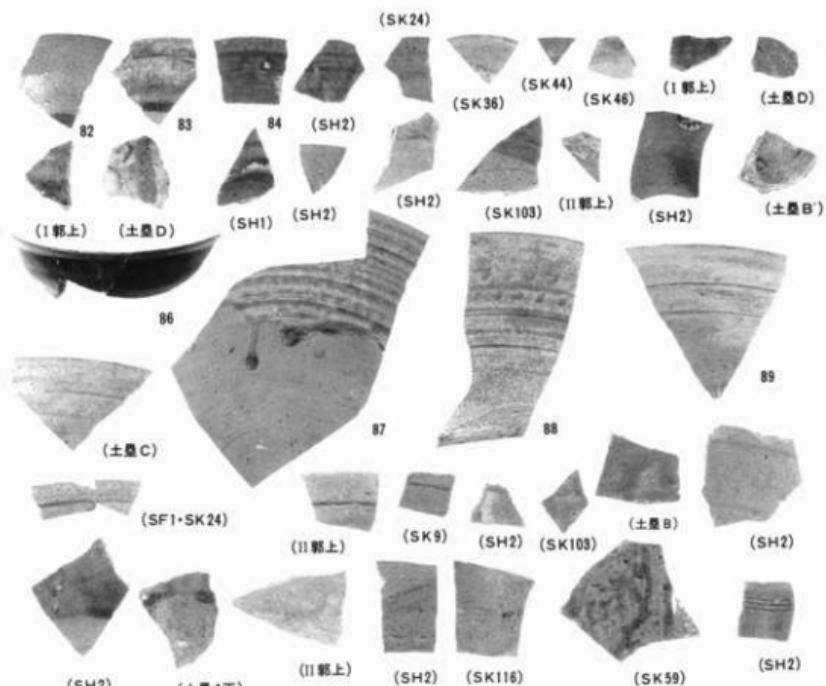
(2) 瓦質土器



(3) 瓦質火鉢



(1) 青磁、瀬戸・美濃産皿



(2) 瀬戸・美濃産碗、鉢、瓶子



78



80

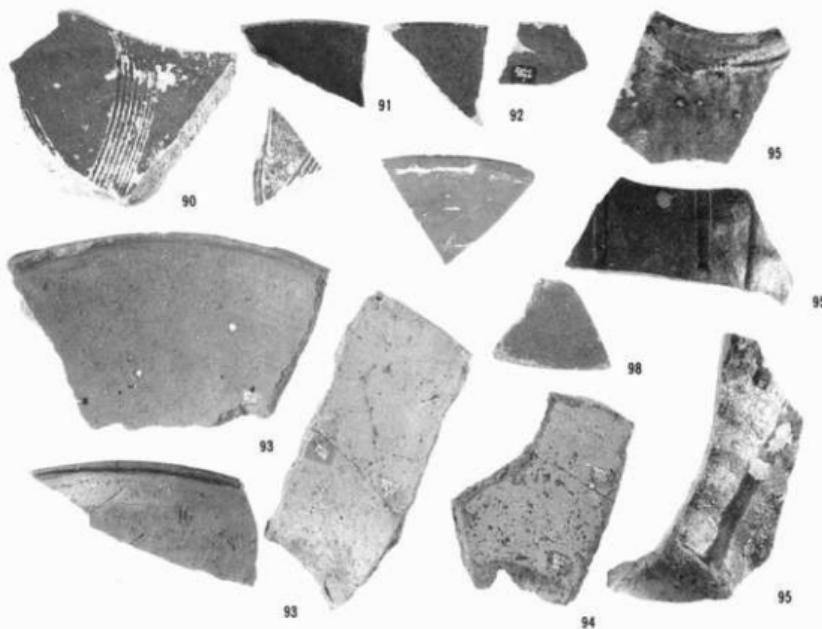


85



73

(1) 濑戸・美濃産皿、天目茶碗、小壺



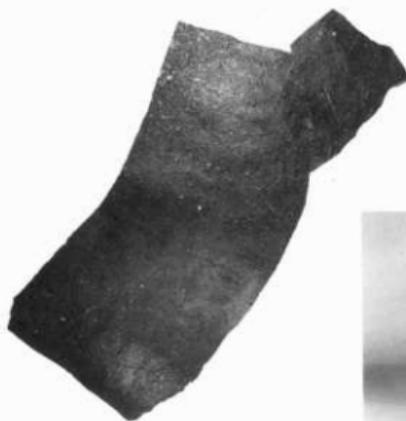
(2) 濑戸・美濃、常滑産擂鉢



96



97

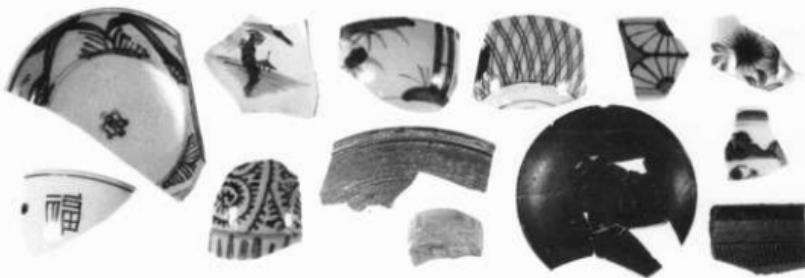


97

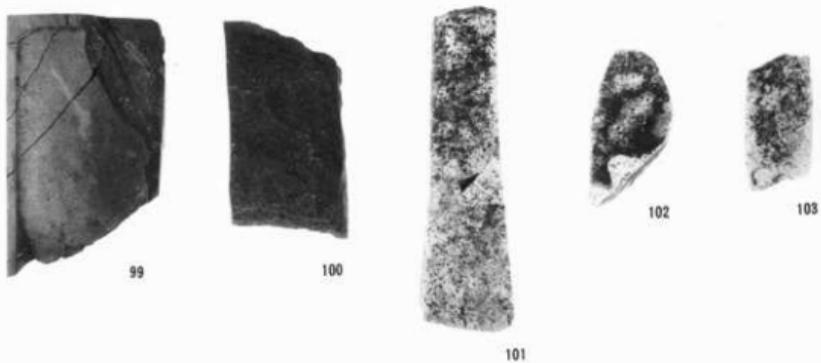


97

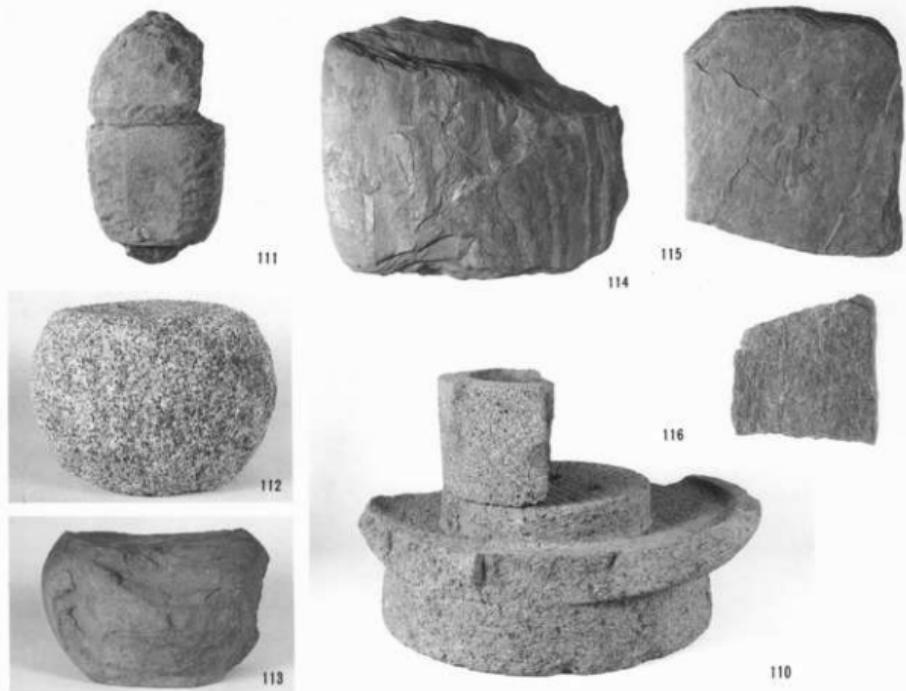
(1) 常滑産大甕



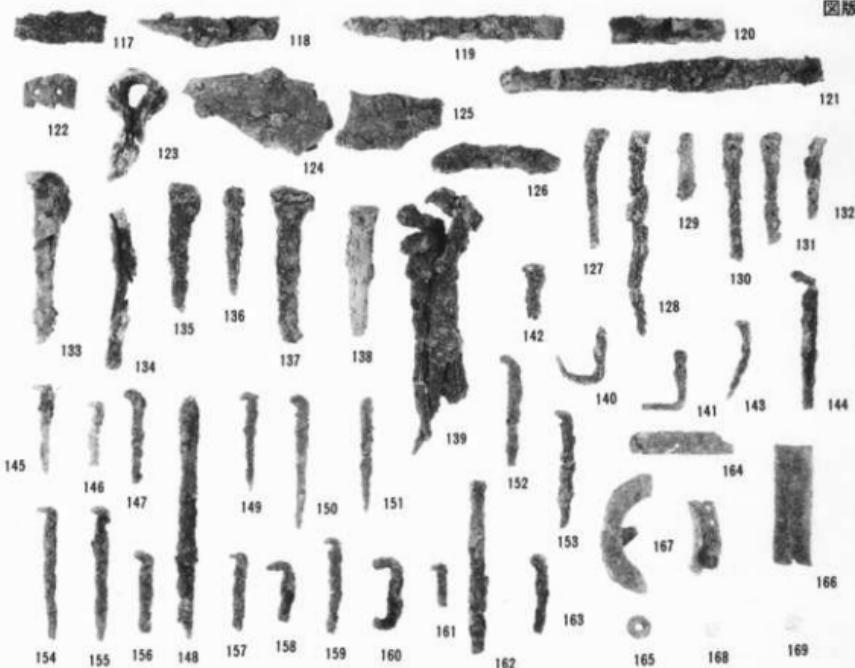
(2) 近世陶磁器 (SHI 表土出土)



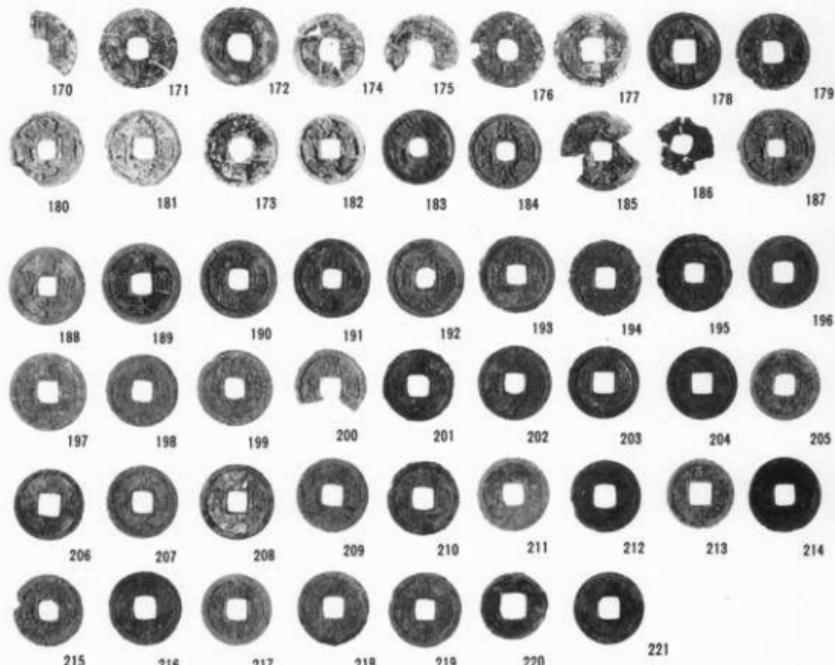
(1) 中世石製品（硯、砥石）



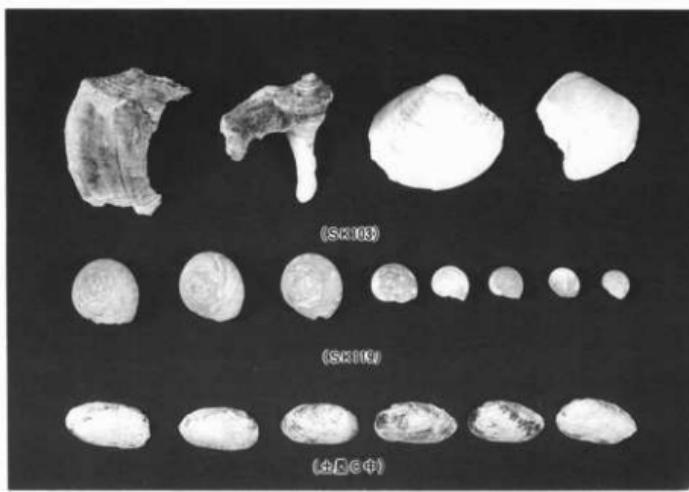
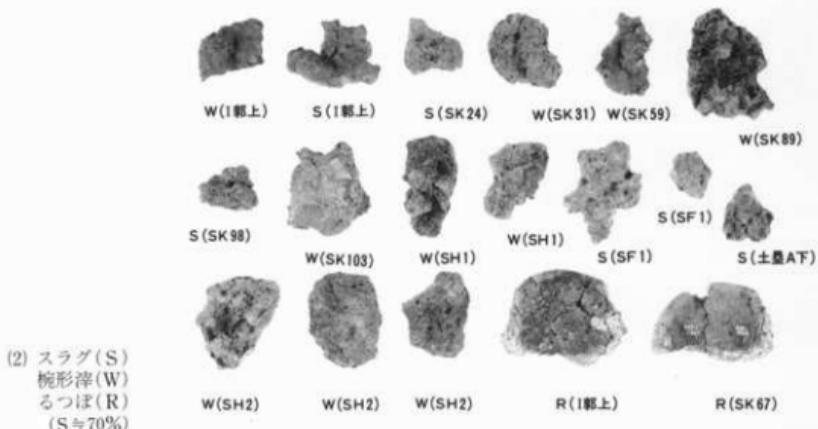
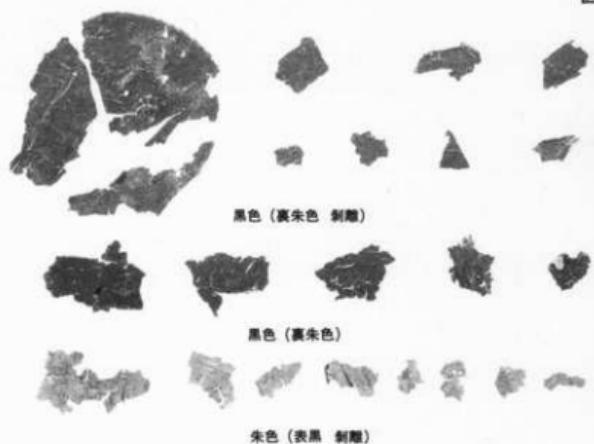
(2) 中世石製品（五輪塔、板碑、茶臼）



(1) 中世金属製品



(2) 中近世銭貨



## 報告書抄録

ふりがな	いんざいまちこばやしじょうあと
書名	印西町小林城跡
副書名	一般県道印西印旛線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第250集
編著者名	井上哲朗
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811
発行年	西暦 1994年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小林城跡	津幡郡印西町小林 1,474 他	12327	001	35度 49分 13秒	140度 12分 00秒	19910601 ~ 19920331	4,600	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小林城跡	集落 墳墓 城館	先土器 縄文 古墳 中世	方形周溝墓 竪穴住居跡 曲輪 土塁 空堀 門跡 道路跡 掘立柱建物跡 柱穴 塹 地下式坑 土坑墓 土坑 土坑	尖頭器 土器 石器 磨 土師器 土玉 埴輪 直刀 石棺材 土師質土器 カワラケ 8条 内耳上鍋 瓦質土器 2条 2基 2ヶ所 4棟 21基 1基 8基 5基 106基 2基	縄文土器は早期田戸式土器群主体。 古墳時代は初頭の遺構と築城によって失われた後期古墳に伴う遺物である。 中世は墓地の跡に山城が築城され、以降の改造、そして施城に至る過程が明らかとなった。

千葉県文化財センター調査報告第250集

印西町小林城跡

---

平成6年3月25日 印刷

平成6年3月31日 発行

発 行 千 葉 県 土 木 部  
千葉市中央区市場町1丁目1番

編 集 財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809番地2号

印 刷 株式会社 弘 文 社

---